2015年度

青山学院大学
FD活動報告書

青山学院大学全学FD委員会

青山学院教育方針

青山学院の教育は
キリスト教信仰にもとづく教育をめざし、
神の前に真実に生き
真理を謙虚に追求し
愛と奉仕の精神をもって
すべての人と社会とに対する責任を
進んで果たす人間の形成を目的とする。

青山学院　スクール・モットー

地の塩、世の光
The Salt of the Earth, The Light of the World
（聖書　マタイによる福音書　第5章13 〜 16節より）

青山学院大学の理念

青山学院大学は、「青山学院教育方針」に立脚した、
神と人とに仕え社会に貢献する
「地の塩、世の光」としての教育研究共同体である。
本学は、地球規模の視野にもとづく正しい認識をもって
自ら問題を発見し解決する知恵と力を持つ人材を育成する。
それは、人類への奉仕をめざす自由で幅広い学問研究を通してなされる。
本学すべての教員、職員、学生は、
相互の人格を尊重し、建学以来の伝統を重んじつつ、
おのおのの立場において、時代の要請に応えうる大学の創出に努める。

2015年度　青山学院大学　FD活動報告書　目次

1. はじめに …… 1
2. 本年度活動一覧 …… 2
3. 新任教職員研修会 …… 4
4. 授業改善のための学生アンケート …… 18
5. 学生FDスタッフの活動 …… 22
6. 教育改善支援制度 …… 24
7. 学生意識調査 …… 50
8. FD講演会 …… 53
9. FDEagoプロジェクト …… 69
10. その他のFD活動 …… 78
11. 諸規則 …… 83
12. FD推進委員会及び全学FD委員会委員一覧 …… 87

1. はじめに

全学FD委員会委員長
副学長　　田中　正郎

本学のFD（Faculty Development）活動は、2003年度から全学的な授業改善のための学生アンケートがはじまり、2005年度からFDプロジェクトチームが活動を開始しました。そして、2008年10月からFD推進委員会、2009年4月から全学FD委員会が活動を開始しました。また、全学FD委員会の守備範囲はFDにとどまらずSD（Staff Development）まで拡がってきました。

本学のFD活動は、次のような点を重視して進められてきました。第1に、大学を構成する教員、職員、学生、社会の4者が協力して、組織的に教育の改善を行うこと、第2に、学生にとって、また教職員にとって「個々が安心して教育目標に向かって取り組むことのできる環境作り」を実現すること、そして第3に、FD、SD相互のバランスをとりながら、教職員が協力して教育力の向上に努めることです。

FD活動は、「授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な取り組み」といわれます。その内容は多岐にわたり、現状ではより幅広い活動へと展開してきました。そこで組織の強化がはかられ、2013年4月に教育支援課が発足し、FD活動の推進を支える体制が整えられました。本学のFD活動も、個々の教員の自発的な授業改善にとどまらず、組織的な授業改善や教育支援活動が展開されはじめています。

2016年度は、SD研修会の企画運営を政策･企画課と連携できるようにしました。また、授業改善のための学生アンケートのWeb入力をスタートさせました。2010年度からはじめました学生意識調査の見直しをしています。これら以外のさまざまな取り組みを通じて授業改善に取り組んできました。

個々の教員による教育改善の蓄積は、潜在的にたいへん大きなものがあります。しかし、これらの豊富な教育資源は、目に見えないままであり、個人に固着しており継承することが難しいという現状があります。これらの豊富な資源を可視化するとともに、情報システムを活用することで、組織全体が共有する財産とすることが求められています。学生達の夢や希望を大切にして、教員と職員が協働しながら、より豊かな、質の高い教育の実現をめざしてゆきたいと思います。

2. 本年度活動一覧

○ 2015 年度　月別活動一覧

	委員会開催	新任教職員研修会	授業改善のための学生アンケート	学生FDスタッフの活動	教育改善支援制度	学生意識調査
4月	4月8日 ①FD推進委員会 ①全学FD委員会	4月2日 第1回開催	(2014年度後期実施結果公開)	新スタッフ勧誘説明会	(2014年度外部評価委員会全体講評の発表) 3月4日 公募開始	(3月30日)～4月4日 学生意識調査(1・2年生)・キャリアアプローチ(3年生)調査実施 4月23日 3年生対象フォローアップ講座
5月	5月20日 ②FD推進委員会			学生FDスタッフスタートアップミーティング 5月22日・29日 しゃべり場	4月24日 公募締切 外部評価委員事前審査 5月12日 第1回外部評価委員全体会(審査・配分額決定) 5月20日 採択プログラム決定	5月22日 1・2年生対象フォローアップ講座
6月	6月17日 ③FD推進委員会 ②全学FD委員会			6月13日 JPFF主催学生FDスタッフ・ピアサポーター交流会参加		フォローアップ講座動画配信
7月	7月15日 ④FD推進委員会		7月9日～23日 前期アンケート実施	7月17日 しゃべり場		7月21日 事務職員対象結果報告会 7月22日～29日 結果報告会(各学部)
8月				8月27日・28日 岡山大学 i*see2015 参加		
9月		9月14日 第2回開催	9月17日 前期結果公開	9月2日・3日 学生FDサミット2015夏 参加		9月16日 結果報告会(大学執行部) 9月17日～26日 4年生調査(9月卒業生)
10月	10月21日 ⑤FD推進委員会 ③全学FD委員会			10月31日 青山祭出展		
11月	11月18日 ⑥FD推進委員会			11月1日 青山祭出展		
12月	12月16日 ⑦FD推進委員会 ④全学FD委員会		12月17日 1月7日～25日 後期アンケート実施			12月1日 4年生調査(全4年生)開始(～3月26日)
1月	1月27日 ⑧FD推進委員会					
2月					2月29日 プログラム活動期間終了 活動報告書・決算報告書提出	
3月	3月2日 ⑨FD推進委員会 ⑤全学FD委員会		(4月1日) 後期結果公開	3月12日・13日 学生FDサミット2016春 参加	外部評価委員事前審査 3月28日 第2回外部評価委員全体会(最終審査・全体講評作成)	3月26日 4年生調査終了

	FDフォーラム FD講演会	FDEagoプロジェクト		SD講演会・研修会	教員のための英語研修プログラム	全国私立大学FD連携フォーラム	関東圏FD連絡会
		Happyくらす 作品コンテスト	FD Tip				
4月							
5月	5月20日 FDフォーラム 第1回開催						
6月	6月17日 FD講演会 第1回開催	6月11日 募集開始（～9月27日）		6月30日 SD講演会 第1回開催 （FD委員会共催）		6月13日 総会出席	6月23日 連絡会出席
7月					7月1日 第3回プログラム 実施		
8月							
9月							
10月		10月30日 募集締切					
11月		審査 11月30日 入選作発表					11月25日 連絡会出席
12月	12月16日 FD講演会 第2回開催				12月2日 第4回プログラム 実施		
1月		1月25日 授賞式 受賞者による 座談会		1月14・15日 SD研修会 （FD委員会共催）		1月15日 会員校ミーティング	
2月							2月23日 連絡会出席
3月							

3.　新任教職員研修会

本学では、大学に新規採用された教員と学院全体で採用された事務職員を対象とした「新任教職員研修会」を年2回開催している。

第1回は本学就任直後の4月初旬に開催され、本学における教育研究活動の概要からFD活動の紹介、各種手続に関する説明を行い、本学での教育研究活動が円滑に開始できることを目的としている。

第2回は9月中旬～下旬に開催され、前期の授業経験を踏まえ、教育方法の改善に資する契機となる研修を行うべく、外部から講師をお招きし、より実践的な内容の研修会を実施している。2015年度は、2012 ～ 2014年度に引き続き、杉原真晃先生に講師をお引き受けいただいた。

なお2回目の研修会については、新任教職員以外に希望者も参加可能としている。

○　2015 年度第 1 回　大学新任教職員研修会

日　時　　4月2日（木）12：45 ～ 14：45
場　所　　第19会議室（総研ビル11F）
司　会　　全学FD委員会委員長　長谷川　信教授

プログラム

1. 聖書朗読・祈祷

「主に望みをおく人は新たな力を得、鷲のように翼を張って上る。
走っても弱ることなく、歩いても疲れない。」（イザヤ書 第40章31節）
“But those who trust in the Lord will find new strength. They will soar high on wings like eagles. They will run and not grow weary. They will walk and not faint.” (Isaiah 40:31)
（2015年度学院主題聖句）

2. 開会挨拶　　副学長　長谷川　信教授

3. 本学のキリスト教活動について　　大学宗教部長　伊藤　悟教授

4. 青山スタンダード紹介ビデオ「青山スタンダードって何？」上映

5. 本学のＦＤ活動について　　全学ＦＤ委員会副委員長　杉谷　祐美子教授

6. 本学の教育支援体制について
   (1)　教育研究システムについて　　情報メディアセンター所長　宮川　裕之教授
   (2)　事務組織について　　事務局長　鈴木　寛也
   (3)　学事暦、授業、成績評価等について　　学務部　部長　髙野　悦子
   (4)　研究制度及び研究費等について　　研究推進部　部長　山口　和彦
   (5)　施設設備利用について　　庶務部施設課　課長　菊地　大介

7. 閉会挨拶　　学長　仙波　憲一教授

以上

5.　本学のＦＤ活動と教育研究システムについて
　　全学 FD 委員会副委員長　説明用スライド資料

青山学院大学のFD活動

青山学院大学全学FD委員会

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

1. 基本方針

◇FDとは？
Faculty Development＝教員の職能開発
「授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な取り組み」
◇教育力の向上は大学の責務

◇青山学院大学は教育を大変重視
単なる授業改善にとどまらず、さまざまな教育支援を組織的に展開

2

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

本学のFD活動が重視している点

◇大学を構成する教員、職員、学生、社会の4者が協力して、組織的に教育の改善を行う
◇学生にとって、また教職員にとって「個々が安心して教育目標に向かって取り組むことのできる環境作り」を実現する
◇ FD、SD相互のバランスをとりながら、教職員が協力して教育力の向上に努める
※ SD（Staff Development）＝職員の職能開発

⇒ 教員、職員が一体となった教育改善へ

3

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

2. FD活動のスタート

◇2003年度後期から全学自己点検・評価委員会で、「授業評価アンケート」を実施し、2004年度後期より「授業改善のための学生アンケート」としてスタート

◇2005年度にFDプロジェクトチームを発足

◇2008年10月、大学HPにFD活動のページを新設して、これまでの活動を外部に公表

4

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

3. FDプロジェクトチームの実績

［2005年度～2007年度］

- 「授業アンケート」の運用
- シンポジウムの開催
- 授業公開の実施
- 「教員アンケート」報告書の作成
- プロジェクトチーム活動報告書の刊行

5

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

4. FD組織の発足

発足の経緯

2008年4月　大学設置基準改正　第25条の3によるFDの組織的活動の義務化
（専門職大学院は2003年度、大学院は2007年度、学部は2008年度より義務化）
2008年10月　FD推進委員会発足
2009年3月　全学FD委員会設置
2009年3月　青山学院大学FD規則制定

6

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

本学のFD組織

全学FD委員会

FD推進委員会
内容：ＦＤ活動の啓蒙・企画・立案・実行
・授業改善、教育改善支援、啓発活動
構成員：副学長（委員長）1名
学長指名委員（教員より）7名　※副委員長1名を選出
学長指名委員（職員より）6名

全学教務委員会
内容：教学に関する全学的な調整
＜例＞学事暦、授業時間の設定、卒業延期制度
構成員：副学長（2名）、宗教部長、青スタ副機構長、学科主任（各学部より1名）学務部長、相模原事務部学務課長

7

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

FD推進委員会の役割

- 学長のもとに、少人数で機動的な組織を設置する
- 若手教職員の構想力によって企画立案を進める
- FD活動の啓蒙
- 学部のFD活動を活性化する起動力に
⇒ 全学FD委員会の構成員

8

5. これまでのFD活動

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

2009年度の主要な活動

- 授業アンケートの見直し
- 「教育改善・教育プログラム支援」制度の発足
- 次年度の新任教職員研修会プログラムの検討
- 各学部におけるFD活動の事例紹介
- 他大学との連携、交流
- 全国私立大学FD連携フォーラムへ加盟
- 関東圏FD連絡会への参加

9

2010年度の主要な活動

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

- 新任教職員研修会の開催
- 「教育改善・教育プログラム支援」制度の実施
- 全学的な学生意識調査の実施
- 授業シラバスの学外公開開始
- 授業アンケートの集計結果の学外公開
- 「FD letter」の発刊
- 「実践的FDプログラム」上映会の開催
- 他大学との連携、交流

10

2011年度の主要な活動

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

- 新任教職員研修会の開催
- 「教育改善・教育プログラム支援」制度の実施
- 全学的な学生意識調査の実施
- 授業アンケートの集計結果の学外公開
- 授業改善アンケートのための教員アンケートの実施と分析
- 「FD letter」の発刊
- 学生FD活動「しゃべり場」の後援
- 他大学との連携、交流
- シラバスのWeb公開

11

2012年度の主要な活動

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

- 新任教職員研修会の開催
- 「教育改善・教育プログラム支援」制度の実施
- 全学的な学生意識調査の実施と集計結果の外部公開
- 授業アンケートの集計結果の学外公開
- FDキャラクター FDEago の投入
- FD Tip の紹介
- FD Board の設置
- 「心に残る授業」をテーマとした「Happyくらす作品コンクール」の実施
- 学生FD活動「しゃべり場」の後援
- 他大学との連携、交流

12

2013年度の主要な活動

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

- 新任教職員研修会の開催
- 「教育改善・教育プログラム支援」制度の実施
- 全学的な学生意識調査の実施と集計結果の外部公開をテーマとしたFDフォーラムの開催
- 授業アンケートの集計結果の学外公開
- 「心に残る授業」をテーマとした「Happyくらす作品コンクール」の実施と受賞者との座談会開催
- 学生FDスタッフと教職員の交流会実施
- 学生FD活動「しゃべり場」の後援
- 他大学との連携、交流、包括協定締結
- FDハンドブックの制作

13

2014年度の主要な活動

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

- 新任教職員研修会の開催
- 「教育改善・教育プログラム支援」制度の実施
- 授業アンケートの集計結果の学外公開
- 「心に残る授業」をテーマとした「Happyくらす作品コンクール」の実施と受賞者との座談会開催
- 学生FDスタッフと教職員の交流会実施
- 学生FD活動「しゃべり場」の後援
- 他大学との連携、交流、セミナーへの参加
- FDハンドブックの改訂
- 学外の講師による「FD講演会」開催
- 教員のための英語研修プログラム開催

14

6. FD活動の紹介

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

教育改善・教育プログラム支援制度による採択テーマ

教育の質を高めるためのプロジェクトを学内公募し、採択されたものに補助金供与

2009年度

・シラバスと講義録の統合情報に関する高度活用システムの構築
・「科学・技術に関する意識データベース」の構築
・各種資格（司書・社会教育主事）教育プログラムの評価モデルの開発
・ティーチング＆ラーニング・ポートフォリオに基づく総合的教育支援
・大学生に対するリーガルリスク教育

2014年度

・生命系講義とバイオインフォマティクスの融合型教育プログラム構築
・海外からの留学生のキャンパスライフに関する問題点の把握と、多言語表記の推進～英語と日本語の併記を中心として

15

全学的な学生意識調査

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

- 調査の目的
  - 大学はカリキュラムや学生支援のあるべき姿を検討
  - 学生は学生生活の目標設定、学びと進路のつながりを意識
- **学年進行に伴って卒業時調査を含めた経年比較が可能**
  - 1年 新入生の現状把握
  - 2年 学生の満足度・成長感把握
  - 3年 学生の満足度・成長感把握、就職への動機づけ
  - 4年 学生が身につけた力・モチベーションの変化の把握、満足度・成長感把握
- **学生個人へのフィードバック**
  - 個人結果報告書の返却、フォローアップ講座
- 結果「学生の意識調査からみる青山学院大学の学生像」（⇒大学HP）

16

学生FD活動「しゃべり場」

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

- 学生FDスタッフ
  - 学生の視点から大学の授業や教育のあり方を考える学生団体
  - FD推進委員会への報告、全学FD委員会との交流、関東圏学生FD連絡会や全国学生FDサミットでの活動

全学しゃべり場「学生生活について感じること」（2014年6月）

学生・教員・職員での意見交換 ⇒ 大学へ意見提出

17

「心に残る授業」をテーマとした「Happyくらす作品コンクール」

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

- 授業を通して得た発見や感動、体験、成長などのよい思い出を表現した作品を学生から募集
- 2014年度審査結果　優秀賞1作品、佳作1作品、学生FDスタッフ特別賞1作品

～優秀賞作品紹介～

心に残る授業―私と韓国語

文学部史学科　3年　酒井 優清

…

この2つのことをとにかく続けた。すると、とんでもない変化が起きた。自然と授業へ行くのが楽しみになっている自分に気付いたのだ。そのきっかけは「早く明日にならないかな。明日のインテンシブ・韓国語の授業がとにかく楽しくて」と私が友人に言ったときであった。これは、自然に出た言葉であった。そこには、かつて授業におびえていた私は存在しなかった。いつの間に、このような変化が起きたのか、私にもよくわからない。しかし、私が自分に向かって言えることはただひとつ。「よかったな」と。こうして、私は1年間、インテンシブ・韓国語を続けることができた。最後の授業では皆で、記念写真を撮ったが、そこには4月のこわばった私の顔はなかった。あるのは、ただ笑顔があふれる私の顔であった。

大学の授業は、学問を究めるだけの場ではない。教員も学生も常に変化する環境の中で、自分自身を成長させる場である。私たちには多くの選択肢が与えられている。どんなに先生が厳しくても、どんなに単位を取るのが大変であっても、そんなことは関係ない。自分の興味や関心に従って、自分を成長させる授業を選ぶことが大切である。

…

（大学HPより一部抜粋）

18

FDハンドブックの制作

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

青山学院大学
FD ハンドブック

本学の教育に関する各種情報、授業改善アイディア、「授業改善のための学生アンケート」の活用法等をまとめたFD ハンドブック

青山学院大学　全学 FD 委員会

青山学院大学 FD活動マスコット
【FDEago（エフディーゴ）】

19

FDハンドブックの目次

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

第１部　青山学院大学の教育に関する基本情報 …2
授業時間 学生数 教職員数 …2
教室数 開講授業数 学生平均履修科目数 …3
第２部　授業改善のアイディア …4
授業改善のアイディアについて、「授業改善のための学生アンケート」設問・回答一覧 …4
「授業改善のための学生アンケート」実施状況 …5
1 授業のシラバスの構成 …6
2 授業のデザイン …7
3 シラバスの作成 …8
4 教材の選択・作成 …10
5 基礎の授業 …11
6 多様な授業方法 …12
7 授業の展開 Ⅰ・Ⅱ …14
8 授業のアイディア Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ …16
9 授業の秩序 …19
10 学生への対応 …20
11 学生とのインタラクション …21
12 ICT の活用 …22
13 試験と採点 …23
14 授業評価の活用 …24
15 授業改善のために …25
第３部　青山学院大学の教育に関する制度及び設備・サービス … 26
1 成績評価 …26
2 試験 …27
3 休講・補講 …28
4 教学関連事務 …28
5 教室設備(通常教室・演習室) …30
6 無線 LAN の利用(学内) …32
7 授業支援システム(LMS) …33
8 Aoyama-Portal …34
9 学生へのソーシャルメディア利用に関する注意喚起 …35
10 障がいのある学生への支援 …35
11 教材・補助プリントの印刷 …36
12 講師控室 …36
13 ラウンジ・学生の自習用スペース …37
14 教育補助員(TA) …38
13 FD 活動について …38
第４部　青山学院大学の教育内容 …40
1 青山学院教育方針・青山学院大学の理念 …40
2 キリスト教教育 …40
3 青山スタンダード科目 …41
4 各学部の教育方針―教育研究上の目的と 3 つのポリシー …42

20

7. 今後のFD活動に向けて
近年の大学政策にみるFD

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

◇「全学的な改革サイクルの確立のため、ワークショップを中心に「プログラムとしての学士課程教育」という基本的な認識の共有や教育方法に関する技術の向上に資する充実したFDを実施する。そのために、専門家（ファカルティ・ディベロッパー）の養成や確保、活用を図る。」

◇「・・・単に授業内容・方法の改善のための研修に限らず、広く教育の改善、更には研究活動、社会貢献、管理運営に関わる教員団の職能開発の活動全般を指すものとしてFDの語を用いる場合もある。」

中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」2012年8月28日　**専門性を高め、幅広く展開**

◇補助事業等の要件として、「学長を中心とした事業実施体制の整備、全教職員へのFD・SDの徹底等を求めるなど、既に様々な先行的な取組が行われている。」　**全学的な取組に**

中央教育審議会大学分科会「大学のガバナンス改革の推進について（審議まとめ）」2014年2月12日

21

本学の姿勢

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

◇「FDの実施自体を目的とするのではなく、FD活動を通じて**「学生に修得させる能力を明確にして体系的な教育課程を提供するとともに、学修の成果を厳格に評価する」**ことをめざしています。」

◇「**個々の教員がおこなっている教育改善の蓄積は、潜在的にたいへん大きなものがあるはずです。**これらの豊富な資源を**可視化**するとともに、情報システムを利用しながら、**組織的に体系化**することがいま求められています。教員と職員が協働しながら、より豊かな、質の高い教育の実現をめざして行きたいと思います。」

（大学HPより）

※学内・外の研修会やセミナー等に関する案内、FD活動に関する情報等は、大学HPやポータルにて発信

（http://www.aoyama.ac.jp/outline/effort/fd/）

22

○　2015 年度　第 2 回大学新任教職員研修会次第

日　時　　9月14日（月）13：00 ～ 16：00
場　所　　大会議室（青山キャンパス　総合研究所ビル12階）

司会進行　　学務部教育支援課　竹田　治世

開会祈祷　　大学宗教部長　伊藤　悟教授
開会挨拶　　学務及び学生担当副学長
　　全学FD委員会委員長　長谷川　信教授

プログラム
講師：杉原　真晃　先生
聖心女子大学　文学部教育学科　准教授

⑴「学生の主体的な学習をいかにして引き出すか」についての理論・実践事例

⑵ ワークショップ：青学での実践的課題を語り合う

以上

青山学院大学 新任教職員研修会
2015年9月14日

学生の主体的な学習をいかにして引き出すか

聖心女子大学文学部教育学科
杉原真晃
msugihara@u-sacred-heart.ac.jp

はじめに：教育再生実行会議 第三次提言（2013.5.28）

知識・情報・技術が社会のあらゆる領域での活動の基盤となる知識基盤社会にあっては，大学が担うべき役割が一層大きくなっており，その教育・研究機能を質・量ともに充実していく必要があります。

【中略】

大学の機能強化の取組に当たっては，【中略】初等中等教育から高等教育までの一貫した取組，文理共通したリベラルアーツの充実，日本文化についての深い理解が求められます。また，「世界水準の教育研究の展開拠点」，「全国的な教育研究拠点」，「地域活性化の中核的拠点」など，大学教育の質・量の充実を図る中で，それぞれの大学が持つ強みをいかしつつ，大学の多様性や地域の特性を踏まえた取組が行われる必要があります。

はじめに：教育再生実行会議 第三次提言（2013.5.28）

改革の観点

1. グローバル化に対応した教育環境づくりを進める。
2. 社会を牽けん引するイノベーション創出のための教育・研究環境づくりを進める。
3. 学生を鍛え上げ社会に送り出す教育機能を強化する。
4. 大学等における社会人の学び直し機能を強化する。
5. 大学のガバナンス改革，財政基盤の確立により経営基盤を強化する。

はじめに：持続的・実質的な教育改善・開発に向けて

本日の目的

テーマ：

「学生の主体的な学習をいかにして引き出すか」

目的：

- 学生の主体的な学習をいかに引き出すのかについての意識を高める，理論や実践事例を知る
- 授業や業務における不安，課題，工夫，楽しみ等について考える
- 参加者間でアイデアを交換・共有し，学生の学び・成長をともに考える仲間をつくる

本日の内容

(1)「学生の主体的な学習をいかにして引き出すか」についての話を聞く。

(2) 青山学院大学での実践的課題を語り合う。
授業における，学生の主体的学習についての課題

例）・学生の学習意欲をどう高めるのか
・私語をどのようにコントロールすればよいか
・学生生活全体においていかに主体的・能動的にさせるか

など

学生の主体的な学習をいかにして引き出すか

1. 主体的な学習が求められる社会的事情　【約20分】
2. ディスカッション　【約20分】
3. 主体的な学習を引き出す教育方法　【約10分】
4. 主体的学習を引き出すための工夫　【約30分】

＜休憩＞　【約10分】

5. ディスカッション　【約50分】
6. 発表会　【約30分】

1. 主体的学習が求められる社会的事情

(1) 中央教育審議会答申（2012.8.28）
「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて
～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～」

(2) 教育再生実行会議 第七次提言（2015.5.14）
「これからの時代を生きる人たちに必要とされる資質・能力
～求められる人材像～」

(1) 中央教育審議会答申（2012.8.28）

我が国は未曾有の災害である東日本大震災に見舞われたほか，政治，経済，社会，文化，その他多方面にわたり，当時よりも更に大きな構造的変化に直面している。グローバル化や情報化の進展，少子高齢化などの社会の急激な変化は，社会の活力の低下，経済状況の厳しさの拡大，地域間の格差の広がり，日本型雇用環境の変容，産業構造の変化，人間関係の希薄化，格差の再生産・固定化，豊かさの変容など，様々な形で我が国社会のあらゆる側面に影響を及ぼしている。さらに，知識を基盤とする経営の進展，労働市場や就業状況の流動化，情報流通の加速化や価値観の急速な変化などが伴い，個人にとっても社会にとっても将来の予測が困難な時代が到来しつつある。

9

(1) 中央教育審議会答申（2012.8.28）

将来の予測が困難な時代において高等教育段階で培うことが求められる能力（学士力）

- 答えのない問題に解を見出していくための批判的，合理的な思考力等の認知的能力
- チームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担う，倫理的，社会的能力
- 総合的かつ持続的な学修経験に基づく創造力と構想力
- 想定外の困難に際して的確な判断ができるための基盤となる教養，知識，経験

10

(1) 中央教育審議会答申（2012.8.28）

生涯にわたって学び続ける力，主体的に考える力を持った人材は，学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から，教員と学生が意思疎通を図りつつ，一緒になって切磋琢磨し，相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り，学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的，倫理的，社会的能力を引き出し，それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義，演習，実験，実習や実技等を中心とした授業への転換によって，学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ，生涯学び続ける力を修得できるのである。

11

cf. アクティブ・ラーニングとは

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり，学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。

中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（用語集）（2012年）

12

cf. アクティブ・ラーニングとは

発見学習，問題解決学習，体験学習，調査学習等が含まれるが，教室内でのグループ・ディスカッション，ディベート，グループ・ワーク等によっても取り入れられる。

中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（用語集）（2012年）

13

cf. アクティブ・ラーニングとは

発見学習，問題解決学習，体験学習，調査学習，グループ・ディスカッション，ディベート，グループ・ワーク，のほかにも・・・。
ピア・インストラクション，個人のワーク，質疑応答，等も含まれる。

そのためのツール・環境としての，
クリッカー，ワークシート，ミニッツ・ペーパー，可動式の机・椅子，モバイル・タブレットPC，無線LAN，図書館，ラーニング・コモンズ，LMS，SNS 等。

14

(2) 教育再生実行会議 第七次提言（2015.5.14）

「これからの時代を生きる人たちに必要とされる資質・能力
～求められる人材像～」

・主体的に課題を発見し，解決に導く力，志，リーダーシップ

・創造性，チャレンジ精神，忍耐力，自己肯定感

・感性，思いやり，コミュニケーション能力，多様性を受容する力

15

(2) 教育再生実行会議 第七次提言（2015.5.14）

小・中・高等学校から大学までを通じて，課題解決に向けた主体的・協働的で，能動的な学び（アクティブ・ラーニング）へと授業を革新し，学びの質を高め，その深まりを重視することが必要

16

cf. 学びの質・深まり

主体的な学習のあり方，目標の例

・浅い学習・深い学習 （Biggs and Tang, 2007）

・協同学習 （Johnson and Johnson, 1991）

→各大学，各学科，コース等で検討・共有

17

cf. 深い学習と浅い学習の理解のレベル (Biggs and Tang 2007)

振り返って熟考する（reflect）
離れた課題に適用する（apply: far problems）
仮説を立てる(hypothesize)
原理に結びつける（relate to principle）
身近な課題に適用する(apply: near problem)
客観的理由をあげて説明する，解説する（explain）
自分なりの理由をあげて主張する，論じる(argue)
関連づける(relate)
中心となる考えを理解する(comprehend :main ideas)
状況や特徴を述べる，記述する(describe)
言い換えていう(paraphrase)
文章を理解する(comprehend: sentence)
確認する，名前をあげる（identify, name）
記憶する(memorize)

18

cf. 協同学習 (Johnson and Johnson 1991)

	古いパラダイム	新しいパラダイム
知識観	教員が知識を学生に移し，記憶・再現させる	学生が知識を発見・構築・変換するような環境を教員が創る
学生観	受身的な器（教員の知識で満たされる）	自分の知識を積極的に構成・発見・生成する主体
授業の目的	学生を分類・選別すること	学生の能力と才能を開発すること
人間関係	学生間，教員と学生の間で非人間的な関係	学生間，教員と学生の間で人間的なかかわりあい
学習環境	競争的・個別的な学習	クラスでは協同学習，教員間では協同チーム

19

1. 主体的学習が求められる社会的事情

高次のアクティブ・ラーニング

⇒ 知識活用・課題解決を目的としたもの

一般的アクティブ・ラーニング

⇒ 知識の定着・確認を目的としたもの

（河合塾, 2013）

20

2. ディスカッション：青山学院大学の学生の強み・弱み

わたしが知っている，青山学院大学生の・・・，

(a) 素晴らしいと感じる学生像と，その具体的エピソード

→ 10分程度。1人2分程度×グループメンバー数

(b) 問題だと感じる学生像と，その具体的エピソード

→ 10分程度。1人2分程度×グループメンバー数

21

3. 主体的な学習を引き出す教育方法

3-1. 主体的な学習を引き出す方法の全体像

3-2. アクティブ・ラーニングのメリット，デメリット

22

3-1. 主体的な学習を引き出す方法の全体像

主体的に学び続ける学生を育成するために必要な検討事項

①制度，カリキュラム，授業，課外活動の検討

②授業者の役割の検討

③学習に影響を及ぼす諸要因の検討

④人員，施設・設備，予算，組織構造の検討

26

①制度，カリキュラム，授業，課外活動の検討

・制度：単位認定，卒業要件，GPA制度，CAP制，
教員・学生報償制度，授業アンケートの運用　など

・カリキュラム：講義と演習・実習との連携，授業選択，
教養教育・専門教育・キャリア教育の関連　など

・授業：受講人数，学習目標，教授・学習方法，
学習環境，授業時間外学習，評価方法　など

・課外活動：クラブ・サークル，ボランティア，自主勉強会，
インターンシップ　など

27

②授業者の役割の検討

・研究者，専門家（research, profess）
・教授者，伝達者（educate, transmit）
・学習者の理解者（listen, understand, counsel）
・学習の支援者（advise, coordinate, coach）
・学生と協働者（collaborate, communicate）

28

③学習に影響を及ぼす諸要因の検討

・教育技術
・教育内容に関する知識
・学習者の学習プロセス
・学習環境
・学習者同士の学び合い
・教員の倫理観，学習観

29

④人員，施設・設備，予算，組織構造の検討

・少人数教育の充実のための人員補強
・可動式机・椅子のある教室，モバイル端末の貸出等，学習環境の整備
・TA・SA等の学習サポート体制の整備
・ラーニング・コモンズの設置
・LMS，e-learning 等の充実 （cf. 反転授業）
・給料アップ
・経営と教育の対話

27

3-2. アクティブ・ラーニングのメリット，デメリット

メリット

・知の活用や問題の発見・解決のために，ある特定の知識・技能が必要なことが実感できる
・学習者の学習意欲の向上，知識の定着，知の応用や問題解決の促進をもたらす
・学生同士，学生と教員のコミュニケーションが盛んになり，学習進捗度・理解度の把握とそれによる授業計画・内容の修正が行われやすい
・知識を活用・応用する能力が向上する
・自ら学び続ける習慣や能力が身に付く

など

28

3-2. アクティブ・ラーニングのメリット，デメリット

デメリット

・教員によるファシリテーションが容易ではない
・活動的になったが学びが深まっていないこともある
・学生と教員間で学習目標が共有されない場合がある
・教えるべき内容が多くて，活動を取り入れる時間的余裕がない
・教員の負担が高い，偏る
・学生の負担が高い，偏る

など

29

4. 主体的学習を引き出すための工夫

4-1. 学生の主体的学習を意識した授業計画
4-2. 学生の主体的な学習を引き出す授業実践事例

30

4-1. 学生の主体的学習を意識した授業計画

(1) シラバスの構造

◇授業名
◇授業担当者名，開講日時，対象学年等
◇学習目標・到達目標
◇講義概要
◇授業計画
◇評価方法
◇授業時間外学習の質・量
◇教科書，参考書

31

4-1. 学生の主体的学習を意識した授業計画

(2)「学習」を軸にしたシラバス

・読者は「学生」。学生が読んで次のことがわかる記述が大切。
  ・何を学ぶのか，どのような知識技能・能力が身につくのか
  ・どのような学習活動をおこなう必要があるのか（聞く，書く，調べる，議論する，体験する等）
  ・どのような知識技能・能力が評価の対象となるのか
  ・成績評価の対象となる活動（試験，レポート等）に，いつ頃，どのように備えればいいか
  ・授業時間外の学習をどの程度必要とするか　など
・学生が重視する項目は，
  ・成績評価にかかる内容と水準，方法（「評価方法」）
  ・学習内容，学習形態（「講義概要」「授業計画」）

32

4-2. 学生の主体的な学習を引き出す授業実践事例

4-2-1. 授業の概要

4-2-2. 学生の学びの質にかかる課題

33

4-2-1. 授業の概要

科目Ⅰ:「教育方法論」

◆カリキュラム上の位置づけ

・専門科目(教職関連科目)
・中学校・高等学校教員免許必修科目

◆受講者

・1～4年生(平成27年度 約180名)

◆授業構造

・講義中心。数回，授業内で演習課題(事例検討)
・前回の内容について確認テストを冒頭に行う
・資料を事前に読んでくること(予習)が前提

34

4-2-1. 授業の概要

＜学習目標＞

学力，学習意欲，学習技術などを高めるための各種理論に基づく教育の方法について検討する。

また，中学校・高等学校の現場で起きうる諸課題を事例で知り，それに対する実践の在り方についても検討する。単に方法論を学ぶだけでなく，その目的や価値を問うことも行う。

そして，問題を発見する力，情報を収集・分析する力，論理的に考え・表現する力，公共性を身に付け，現在，そして未来のより良い社会・より良い教育を創りだしていく基盤を形成する。

35

4-2-1. 授業の概要

＜授業内容＞

1. オリエンテーション，学習とは何か
2. 学力と学び方
3. 学習意欲の育て方
4. 時間の活用，学習環境の活かし方
5. 学力と学習を問い直す

⋮

36

4-2-1. 授業の概要

科目Ⅱ:「教職入門」

◆カリキュラム上の位置づけ

・専門科目(教職関連科目)
・小学校教員免許・幼稚園教員免許必修科目

◆受講者

・1～3年生。(平成27年度 約100名)

◆授業構造

・講義中心。数回，授業内で演習課題
・最後の3回で調査・発表
・資料を事前に読んでくること(予習)が前提

37

4-2-1. 授業の概要

＜学習目標＞

わが国における教員の役割・使命や教職に関する現状および課題，そして歴史的変遷等を理解し，求められる資質・能力をふまえながら自らの理想の教員像を創り出す。それにより，教育職の専門性に迫る手がかりを得ることを目指す。

38

4-2-1. 授業の概要

＜授業内容＞

1. オリエンテーション，教員の役割と使命，職務内容
2. 多様な教職像とその歴史的変遷
3. 子供理解と文化内容理解に根ざした教育・保育方法
4. 保護者・地域社会との連携
5. 教職の課題1:まじめな教師と誠実な教師

⋮

39

4-2-2. 学生の学びの質にかかる課題

・主体的・能動的に学習しない
　・予習をしてこない
　・授業中に私語や居眠りをする

・理解の水準、知識の活用の水準が高くない
　・学んだ知識を活用せずに経験則で考察する

→その学び方を，(a) 知らない場合(知識)
　　(b) うまくできない場合(技能)
　　(c) 意欲が高まらない場合(意欲)

40

(a) 知らない場合（知識）

＜授業内＞

・学習方法を教える，実践させてみる

・求められる学習の水準を説明する

＜授業外＞

・学習方法を実践させる

・ ICT，Teaching Assistant 等を活用する

・モデルとなる資料を参照させる

41

(b) うまくできない場合（技能）

＜授業内＞

・学習方法について繰り返し実践させる

・学生が相互に評価・改善し合う機会を重ねる

・求められる学習の水準を何度も説明する

＜授業外＞

・学習方法を繰り返し実践させる

・ ICT，Teaching Assistant 等を活用する

・モデルとなる資料を何度も参照させる

42

(c) 意欲が高まらない場合（意欲）

＜授業内＞

＜授業外＞

→対応を考える前に，

なぜ，「やろうとしない・やる気を持たない」のかを検討

43

(c)意欲が高まらない場合（意欲）

学習意欲を高めるための「ARCS」モデル （Keller, J. M., 2010）

A：Attention（注意）

R：Relevance（関連性）

C：Confidence（自信）

S：Satisfaction（満足感）

44

ex.「ARCS」モデルから見る情意的要因：Attention（注意）

知覚的喚起

・図解で示されないので理解しにくい。

・アイコンタクトがないので自分事と思わない。

・他に気になることがある。

探求心の喚起

・ただ知識が並べられるだけで思考する機会がなく受け身になる。

・所詮は「教員が知っている」から待っていれば答えが与えられると思う。

変化性

・授業の展開が単調で退屈，眠くなる。

45

ex.「ARCS」モデルから見る情意的要因：Relevance（関連性）

目的志向性

・授業内容や学習活動の意義（何に役立つのか，どのように活かすことができるのか）がわからない。

・能動的に学ばなくてもデメリットが生じない。

興味・動機との一致

・教員が頭に描く学生の実態・ニーズと自分のそれとが異なる

・そもそも興味がない。反感を持っている。

親しみやすさ

・身近な・具体的な話がなく，抽象的な話に終始するので，理解が困難となる。

46

ex.「ARCS」モデルから見る情意的要因：Confidence（自信）

学習要件

・学習の目標や内容の見通しが示されず不安になる。

・学習の目標や内容の見通しを示されても，日が経てば／活動自体に意識を持つことで忘れてしまう。

成功の機会

・これまで成功体験が少なく，「難しい・できない」とあきらめている。

・「わからない・できない」ことが恥ずかしくて学習に積極的に取り組めない。

・獲得した知識・技能による成功体験を味わう機会がない。

個人的なコントロール

・教職員の指示に学生が従うだけで，「やらされている」感覚を強く持ってしまう機会が多い。

・学習にかかる環境や内容の要求に教育者側が応えてくれない。

47

ex.「ARCS」モデルから見る情意的要因：Satisfaction（満足感）

内発的な強化

・暗記ばかりでつまらない。

・理解できていない学生を対象にした授業展開のため，理解できている学生にとってはつまらない。

外発的な報酬

・批判ばかりで賞賛が得られない。

・浮いてしまうのではないかと周りの視線が気になる。

・「満足できる」活動が身近にある（サークル，アルバイト等）。

公平感

・かつて言っていたことと異なる授業日程・内容や評価方法を行う。

・私語や遅刻に対する対応が日によって，人によって異なる。

48

(c) 意欲が高まらない場合（意欲）

「教育方法論」「教職入門」における，
学生の学びの質にかかる課題

・予習をしてこない

・授業中に私語や居眠りをする

・学んだ知識を活用せずに経験則で考察する

49

(c) 意欲が高まらない場合（意欲）

予習をしてこない

①予習をしてこなくても大きな問題が生じない

②予習をしてくることに対するメリットを感じない

③他にやりたいことがあり，予習をする時間がない

50

(c) 意欲が高まらない場合（意欲）

予習をしてこない

①予習をしてこなくても大きな問題が生じない

⇒・予習をしてきた学生の発言を他学生に聞かせ，
求められている水準と自身の現状とのギャップを
体験させる

・他学生とのピア・エデュケーションやグループワーク
を導入し，予習してこないとワークがすすみづらくな
るようにする

・半強制的に学生に資料を読んだ感想を発言させる

51

(c) 意欲が高まらない場合（意欲）

予習をしてこない

②予習をしてくることに対するメリットを感じない

⇒・予習をしてきたことを誉める

・他学生とのピア・エデュケーションやグループワーク
を導入し，予習してくると学びが深まる経験をさせる

52

(c) 意欲が高まらない場合（意欲）

予習をしてこない

③他にやりたいことがあり，予習をする時間がない

⇒・個別に声をかけ，事情を聴く

ex.・アルバイトやサークル活動が忙しい

・教師になるかどうか迷っている

・他の授業の課題に時間をとられる

53

(c) 意欲が高まらない場合（意欲）

授業中に私語や居眠りをする

④一方向的な講義だけでは，学生が集中しなくなる

⑤私語や居眠りをおこなっても大きな問題が生じない

54

(c) 意欲が高まらない場合（意欲）

授業中に私語や居眠りをする

④一方向的な講義だけでは，学生が集中しなくなる

⇒・途中で休憩を入れる

・学生からの質問・発言の機会を設ける

・学生同士のディスカッションを導入する

55

(c) 意欲が高まらない場合（意欲）

授業中に私語や居眠りをする

⑤私語や居眠りをおこなっても大きな問題が生じない

⇒・私語や居眠りがなぜダメなのか考える機会を設ける

・授業内外で学んだことを活用するワークを導入する

・個別に声をかけ，事情を聴く

56

(c) 意欲が高まらない場合（意欲）

学んだ知識を活用せずに経験則で考察する

⑥経験則で語れてしまうので，学んだ知識を活用するメリットが感じられない

57

(c) 意欲が高まらない場合（意欲）

学んだ知識を活用せずに経験則で考察する

⑥経験則で語れてしまうので，学んだ知識を活用するメリットが感じられない

⇒・経験則でまずは考察したうえで，あらためて学んだ知識を活用する機会を設ける

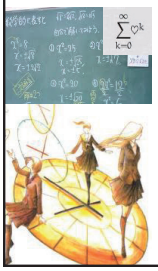
・学んだ知識を活用した多様な考察に触れるグループワークを設ける

・自身の大学での学びをデザインする課題を設ける

58

cf. 知識を活用する機会：事例検討

あなたは、中学校2年生の数学の教科担当です。
2学期のある日、成績中位の女子生徒が、
次のように言ってきました。



「合同とか平行四辺形とかよくわからないし、だいいち、中学校の数学なんて、大人になって役に立たないでしょ。なんで勉強しなきゃいけないの！」

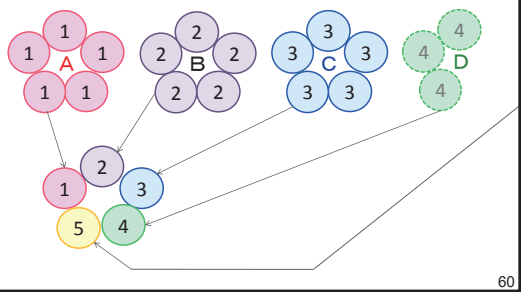
どのように対応すればよいでしょうか？

（赤井悟、柴本枝美著『教師力を鍛えるケースメソッド123～学校現場で生じる事例とその対応～』ミネルヴァ書房，2014年より）

59

cf. 学んだ知識を活用した多様な考察に触れるグループワーク

ジグソー法



60

cf. 自身の大学での学びをデザインする課題

・1週間の生活実態表（スケジュール帳様式）の作成

→学習・生活目標の設定と生活改善計画表の作成

→その後の1週間の生活実態をふまえた，さらなる生活改善の工夫の考案

（問題解決法（IDEAL）によるプロセス）

61

cf. 問題解決のプロセスとしての IDEAL 法

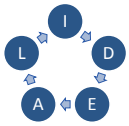
I：Identify problem（問題を同定する）

D：Define problem （問題を定義する）

E：Explore alternative solutions
（解決のための方略を探究する）

A：Apply solutions （方略に基づいて実践する）

L：Look at effect of solutions
（実践の効果を評価する）



（Bransford et al, 1984）

62

5. ディスカッション：青山学院大学生の課題についての要因分析と対応策の検討

テーマ：

青山学院大学生の課題（主体的な学習に関するもの）について，

・なぜ，主体的な学習を行わないのか（知識，技能，意欲）

・それに対して，どのような対応が有効だと考えられるか

→本日知った内容やこれまでの経験から考察してみる。

63

参考文献

Biggs, J., and Tang, C., Teaching for Quality Learning at University, 3rd edition, Open University Press, McGraw-Hill, 2007.

Bransford, J. & Stein, B. (1984). The IDEAL Problem Solver: A guide for improving thinking, learning, and creativity. New York: W.H. Freeman.

Johnson,D.W., Johnson,R.T., Smith,K.A.（関田一彦監訳）『学生参加型の大学授業ー協同学習への実践ガイド』玉川大学出版部，2001年.

河合塾『「深い学び」につながるアクティブラーニング—全国大学の学科調査報告とカリキュラム設計の課題』東信堂，2013年.

Keller, J. M.（鈴木克明訳）『学習意欲をデザインするーARCSモデルによるインストラクショナルデザイン』北大路書房，2010年.

64

4.　授業改善のための学生アンケート

本学では、2003年度より、授業内容･方法に関する学生へのアンケート調査「授業改善のための学生アンケート」（以下、本アンケートと略）を全学的に実施している。全学FD委員会の発足に伴い、2009年度からは全学FD委員会が本アンケートを実施している。

【実施概要】

○　実施目的

「大学が、学生により良い授業を提供し、授業改善を図るための手段」として、学生によるアンケートを実施する。

○　実施概要

本アンケートは、全学共通の質問・回答項目にて、演習科目及び実験・実習科目を除く、全ての科目を対象として実施している。

一部の科目を除き（※）、マークシート調査によるアンケートを実施している。各学期末の授業時間内、授業担当者の教室からの退室を前提とし、無記名による17問の選択式回答及び1問の自由記述式回答から成るアンケート調査を行っている。学部・学科及び授業担当者により、独自に質問を追加することが可能となっている。アンケートの回収は受講生の協力によって行われている。

本アンケートの結果は、当該科目の成績評価への影響がない時期に各授業担当者へ報告される他、一定の集計を経て全教職員及び学生に開示される。その際、学部によっては科目単位での結果開示を実施している。

※　2015年度後期、一部の科目において、試験的にWEBアンケート調査による本アンケートを実施している。

○　その他

本アンケートの集計結果の一部は、本学WEBサイト(http://www.aoyama.ac.jp/)に掲載している。

「授業改善のための学生アンケート」設問項目

A. 授業への取り組みに関する質問

1. あなたがこの授業を履修した理由は何ですか。（複数回答可）
   ［回答］授業内容に興味があったから、教員に魅力があったから、空き時間があったから
   単位がとりやすいから、必須科目だから
2. あなたはこの授業にどの程度出席しましたか。
   ［回答］ほとんど出席した、3分の2程度出席した、半分程度出席した、3分の1程度出席した
   ほとんど出席しなかった
3. あなたは授業内容を理解するため積極的に取り組んだと思いますか。［※］
4. 1回の授業につき、あなたは予習・復習を平均してどのくらいしましたか。
   ［回答］3時間以上、2時間、1時間、30分以下、全くしていない

B. 教員（授業内容・教授方法）に関する質問

5. この授業は「講義内容」（シラバス）を基本にして授業が行われましたか。［※］
6. この授業の難易度はどうでしたか。
   ［回答］とても難しい、やや難しい、適切、やや易しい、とても易しい
7. この授業の進行速度は適切でしたか。
   ［回答］速すぎた、やや速かった、適切、やや遅かった、遅すぎた
8. 教員の説明の仕方は分かりやすいものでしたか。［※］
9. 教科書や配布資料は授業内容を理解するうえで効果的でしたか。
   ［回答］強くそう思う、そう思う、どちらともいえない、そう思わない、全くそう思わない
   この授業では教科書・配布資料を使用しなかった
10. 黒板やプロジェクター等の使い方は効果的でしたか。
    ［回答］強くそう思う、そう思う、どちらともいえない、そう思わない、全くそう思わない
    この授業では黒板・プロジェクター等を使用しなかった
11. この授業に対する担当教員の熱意が感じられましたか。［※］
12. 授業時間内外における質問への対応は適切でしたか。［※］
13. 補佐教員（助手、TA）のサポートは適切でしたか。
    ［回答］強くそう思う、そう思う、どちらともいえない、そう思わない、全くそう思わない
    この授業には補佐教員がいなかった

C. 授業の成果に関する質問

14. あなたは、この授業の開講時に示された到達目標を十分に達成したと思いますか。［※］
15. この授業の内容は興味深いものでしたか。［※］
16. この授業の総合評価を5段階で評価してください。
    ［回答］とてもよい、よい、どちらともいえない、悪い、とても悪い
17. この授業を履修して、自分のためになったことは何ですか。（複数回答可）
    ［回答］新しい知識・技能が身に付いた、新しいものの見方が身に付いた、
    関連分野をさらに学びたくなった、問題発見・解決能力が付いた
    人間形成に役立った、コミュニケーション能力が向上した

D. 担当教員による個別質問 （13問まで設定可）

E. 自由記述回答

・この授業の良かった点、改善すべき点等について書いてください。
・担当教員による個別質問 （希望教員のみ）

※ 設問3・5・8・11・12・14・15は共通の回答
［回答］強くそう思う、そう思う、どちらともいえない、そう思わない、全くそう思わない

2015年度 「授業改善のための学生アンケート」実施状況

	学部・研究科等		前期 学部 対象科目数	前期 学部 回収科目数	前期 学部 実施率	前期 研究科 対象科目数	前期 研究科 回収科目数	前期 研究科 実施率	後期 学部 対象科目数	後期 学部 回収科目数	後期 学部 実施率	後期 研究科 対象科目数	後期 研究科 回収科目数	後期 研究科 実施率
青山キャンパス	青山スタンダード	(専任)	122	111	91.0%	-	-	-	101	83	82.2%	-	-	-
		(兼任)	388	302	77.8%	-	-	-	364	309	84.9%	-	-	-
	文学	(専任)	67	57	85.1%	46	33	71.7%	163	138	84.7%	47	25	53.2%
		(兼任)	147	123	83.7%	0	0	0.0%	295	214	72.5%	0	0	0.0%
	教育人間科学	(専任)	30	28	93.3%	3	2	66.7%	36	32	88.9%	3	2	66.7%
	(研究科は心理のみ)	(兼任)	26	12	46.2%	0	0	0.0%	85	75	88.2%	0	0	0.0%
	経済学	(専任)	77	61	79.2%	1	1	100.0%	78	60	76.9%	1	0	0.0%
		(兼任)	36	25	69.4%	0	0	0.0%	114	92	80.7%	2	0	0.0%
	法学	(専任)	77	67	87.0%	2	2	100.0%	73	63	86.3%	0	0	0.0%
		(兼任)	21	16	76.2%	0	0	0.0%	107	91	85.0%	0	0	0.0%
	経営学	(専任)	95	91	95.8%	9	8	88.9%	90	85	94.4%	3	1	33.3%
		(兼任)	116	101	87.1%	7	0	0.0%	130	113	86.9%	3	0	0.0%
	国際政治経済学	(専任)	94	80	85.1%	22	15	68.2%	86	72	83.7%	9	6	66.7%
		(兼任)	136	105	77.2%	9	1	11.1%	134	102	76.1%	7	2	28.6%
	総合文化政策学	(専任)	36	32	88.9%	2	0	0.0%	34	29	85.3%	0	0	0.0%
		(兼任)	37	27	73.0%	0	0	0.0%	37	31	83.8%	0	0	0.0%
	社会情報学	(専任)	-	-	-	26	1	3.8%	-	-	-	14	7	50.0%
		(兼任)	-	-	-	15	2	13.3%	-	-	-	3	2	66.7%
	教職課程科目	(専任)	0	0	0.0%	-	-	-	0	0	0.0%	-	-	-
		(兼任)	0	0	0.0%	-	-	-	0	0	0.0%	-	-	-
	計	(専任)	598	527	88.1%	111	62	55.9%	661	562	85.0%	77	41	53.2%
		(兼任)	907	711	78.4%	31	3	9.7%	1,266	1,027	81.1%	15	4	26.7%
相模原キャンパス	青山スタンダード	(専任)	31	27	87.1%	-	-	-	32	27	84.4%	-	-	-
		(兼任)	104	96	92.3%	-	-	-	96	88	91.7%	-	-	-
	理工学	(専任)	152	138	90.8%	38	29	76.3%	153	142	92.8%	34	25	73.5%
		(兼任)	92	86	93.5%	5	4	80.0%	91	86	94.5%	8	7	87.5%
	社会情報学	(専任)	80	76	95.0%	29	9	31.0%	79	69	87.3%	15	10	66.7%
		(兼任)	33	31	93.9%	0	0	0.0%	37	32	86.5%	2	2	0.0%
	地球社会共生学	(専任)	11	11	100.0%	-	-	-	15	14	93.3%	-	-	-
		(兼任)	4	4	100.0%	-	-	-	15	13	86.7%	-	-	-
	教職課程科目	(専任)	0	0	0.0%	-	-	-	0	0	0.0%	-	-	-
		(兼任)	0	0	0.0%	-	-	-	0	0	0.0%	-	-	-
	計	(専任)	274	252	92.0%	67	38	56.7%	279	252	90.3%	49	35	71.4%
		(兼任)	233	217	93.1%	5	4	80.0%	239	219	91.6%	10	9	90.0%
合計			2,012	1,707	84.8%	214	107	50.0%	2,445	2,060	84.3%	151	89	58.9%

(マークシート)		(専任)							903	777	86.0%			
		(兼任)							1,478	1,220	82.5%			
(WEBアンケート)		(専任)							37	37	100.0%			
		(兼任)							27	26	96.3%			

＊ 前期は前期開講科目、後期は通年科目および後期開講科目を対象とした。
＊ 演習科目及び実験・実習科目を除く。ただし、各学部等の判断により実施する場合もある。
＊ 実施率は小数点第2位以下を四捨五入した。

5. 学生 FD スタッフの活動

学生FDスタッフ活動とは、学生が大学における授業改善のために行う諸活動を指す。本学では2011年度よりFD推進委員会の直下組織として学生FDスタッフの位置づけが確立され、学生の視点による教育の質の改善に取り組んでいる。本学の授業を「学生が本当に求める授業」にするため、さまざまな活動や企画を通して、学生視点で授業や教育のあり方を追求している。

具体的な活動としては、全学的なしゃべり場や学生FDスタッフと教職員との交流会を学内で開催している。学生･教員･職員の3者が集い、大学の授業改善について意見を交わすことで、学生にとって、また教職員にとって「個々が安心して教育目標に向かって取り組むことのできる環境作り」の実現を目指している。

学外においても、東洋大学、法政大学、立教大学、國學院大学及び本学によって構成される関東圏学生FD連絡会に所属し、積極的に活動している。全国規模で開催される学生FDサミットにも例年参加し、他大学での学生FDスタッフ活動や教育改善への取組から学びを得て、その知識と経験を本学のFD活動に活かしている。

○　2015 年度学生 FD スタッフ活動一覧

◆しゃべり場企画

名称	開催日時	場所	対象	テーマ	備考
しゃべり場	2015年5月22日（金）・29日（金）	17404教室	学生、教職員	「新・学生生活について」	学生FDスタッフ主催
しゃべり場	2015年7月17日（金）	17509教室	学生	・青スタについて（制度、授業内容について） ・授業を取る時の抽選という制度について ・「英語の青山」と呼ばれているが、本当に英語の教育に力が入っているか？などといった授業に関係すること等	学生FDスタッフ主催

◆学外イベントへの参加

名称	開催日時	場所	対象	テーマ	備考
【JPFF】学生FDスタッフ・ピアサポーター交流会	2015年6月13日（土）	法政大学市ヶ谷キャンパス	学生	学生の交流を通じ、「高等教育の質保証」に関する情報収集及び学生目線からの今後の本フォーラムの活動の一助を目的とし、法政大学様主催による「学生FDスタッフ・ピアサポーター交流会」を開催いたします。	学生スタッフ1名参加
岡山大学 i＊See2015	2015年8月27日（木）、28日（金）	岡山大学	学生、教職員	Let's Think about Clobalization！　～学生にとって本当に必要なグローバル化とは～	学生スタッフ1名、職員1名参加
学生FDサミット2015夏	2015年9月2日（水）、3日（木）	追手門学院大学	学生、教職員	『学生FDしていますか？―本当に大学が“よく”なっている！？―』	学生スタッフ3名、職員2名参加
学生FDサミット2016春	2016年3月12日（土）、13日（日）	日本大学	学生、教職員	「キャンパスを彩る三原色」	学生スタッフ1名、職員1名参加

◆その他活動

名称	開催日時	場所	対象	テーマ	備考
青山祭出展	2015年10月31日（土） 10:00-16:00 11月1日（日） 10:00-15:00	17510教室		青山祭における学生FD活動のPRと、その動線としての「川島なお美」写真展の開催	

6. 教育改善支援制度

2009年度より学内公募による「教育改善・教育プログラム支援制度」を実施している。2015年度より名称を「教育改善支援制度」と装いも新たに、FDならびにSD推進の一環として更なる制度の活用を推進している。

この制度は、本学で行われる教育の質的向上をめざす取組みや新たな教育プログラムの開発を支援することにより、教育の改善・改革を進めることを目的としている。教員からの学部・学科や研究科単位での申請や、職員からの所属部・課単位での申請、あるいは青山スタンダード教育機構や各種センター、委員会での申請といった教職協働、学部横断的なグループを単位とし、採択されたプログラムに対して予算補助を行っている。

【実施概要】

［実施の目的］

本学の教育現場において実践され、成果を得られるような「教育内容の質的改善」や「教育プログラムの導入・実施」などの取り組みが期待される。また、得られた成果は全学で共有し、発展的に活用するとともに、将来的には学外GPなどへの発展によって、本学の社会的評価が高められるような取り組みが期待される。

［採択件数］　2～4件程度

［予算配分予定額］　総予算500万円程度（申請額）

使途について

※　懇親会等での飲食代としての使用は不可

※　物品購入費としての使用は、できる限り避けること

※　同テーマの助成金との併用は認めない

［「申請グループ・単位」の考え方について］

申請の単位は、学部・学科、研究科など既存の組織に限定せず、教員や職員、学部・学科等を横断したグループでも可能である。ただし、本制度の目的を「本学で行われる教育の質的向上をめざす取組みや新たな教育プログラムの開発」としているため、学外者は含めない。

［プログラムの採択・予算配分額の審査および実行後の評価］

大学執行部が選定した、約3名程度の他大学の高等教育の専門家等を外部評価委員が、プログラムの採択、予算配分額の審査、及び実施後の評価を執り行う。

［審査の基準］

・本制度の目的にふさわしい企画であること

・実効性をもち目標を達成する可能性があること

・本学の特徴を生かした企画であること

・予算的に妥当な計画であること 等

［採択後の義務］

期限内に定められた報告書を提出すること

成果について学内発表する機会を設けること

ホームページ、刊行物によって成果を公表すること

［スケジュール（2015年度）］

（2015年3月4日（水））	募集開始
2015年4月24日（金）	応募締切
2015年4月27日（月）～5月18日（月）	評価委員会による審査・配分額の査定
2015年5月下旬	プログラム代表者へ採用・不採用の連絡、採用の場合は決定配分額の連絡、各プログラムの活動開始
2016年2月29日（月）	活動終了、各プログラムより活動報告書及び決算報告書の提出
2016年3月中～下旬	評価委員会による活動成果の審査及び結果講評
2016年6月1日（水）	各プログラムの成果報告会を開催し、取り組み内容を公表

○　2015 年度 「教育改善支援制度」 採択事業一覧

代表者氏名	佐藤　剛（庶務部　経理課）
事業計画テーマ	ラーニングコモンズやグローバル化に向けた教職員共同のPDプログラムの構築
メンバー	坂田　哲人、西村　香、松本　治美、有薗　聡美、鴨志田　佳代、原口　渉、佐々野　桂佑、野末　俊比古、大足　恭平
支援金額	750,000円
採択理由	職員発案のPDプログラムとして重要である。また、教職員が一体となって取り組む企画として意義が高い。第一の課題では、出張先において実のあるディスカッションを期待したい。第二の課題については職員個人の英語力アップの効果をどう評価できるかも検討していただきたい。
結果コメント	多様な先進的実践校への調査を実施し分析を行っているなど、プロジェクトの効果があがっている。教職員が学生に対して異なる視点で協働する活動の第一歩として評価でき、全学的な関わり方の素地が期待できる。予算も計画通り執行された。 研究費のすみ分けは重要だが、グローバル化に係る外部補助金を獲得できたことは評価できる。

代表者氏名	宮川　裕之（社会情報学部　社会情報学科）
事業計画テーマ	産学連携による情報システム人材育成プログラムの開発
メンバー	飯島　泰裕、原　潔、松澤　芳昭、鈴木　敏男
支援金額	1,000,000円
採択理由	理念と目的は評価できるが、達成目標が曖昧であるので単年度の計画を明確にしていただきたい。J07-ISの次のモデルカリキュラムを視野に入れて、そこで必要なカリキュラムとLUを検討していただきたい。教材開発費の全体像が見えにくいので再検討されたい。また事務スタッフの人件費は、この取り組みにおいては相応しくない。
結果コメント	コンソーシアムの形成、フォーラムの開催は実施できており、評価できる。青山情報システムアーキテクト育成プログラム（ADPISA）における知識体系と学習要素は他組織からのデータ転記のみで、学習目標も未完成であり、これらの点は残念である。活動成果である教材は、方向性は評価できるが、印刷物は誤字脱字等のチェックがされておらず、より正確を期してほしい。期限間際の発注ならびに報告書の提出の締切については留意されたい。

代表者氏名	宮原　勝一（経済学部　現代経済デザイン学科）
事業計画テーマ	電子教材を利用した経済学教育の効果測定
メンバー	矢吹　初、高　準亨、水上　英貴、中村　隆之、吉岡　祐次
支援金額	1,080,000円
採択理由	内容についてはかなりわかりやすく論理的にまとまっており、実現可能性の観点では評価できる。ただし成績比較のアンケートについては意味のあるものになるように実施を期待したい。また予算が高額にのぼっており、特に6年分申請している電子教材費用が問題である。単年度分での再検討をお願いしたい。
結果コメント	マンキューラーニングと電子教科書を併用して、難易度の高い問題を電子教材化している点は評価できる。さらにアンケートなどによる効果測定およびシステムの持続的改善を期待したい。またこれらの研究効果が学外へも公開されており、所有権についても本学に置かれ今後活用できる点は評価できる。予算執行については正確に記載されたい。

代表者氏名	薄上　二郎（経営学部　マーケティング学科）
事業計画テーマ	海外留学生の直面するキャンパスライフの問題点の把握と利便性の向上―英語・日本語標記の推進を中心として―
メンバー	平塚　広義、安田　洋史、橘田　正造、近藤　嘉智、植田　麻実
支援金額	670,000円
採択理由	昨年度の成果ならびに評価を反映させており、予算額も適正である。全面的に評価できるが目標はすべて達成してほしい。なお、予算配分の中で出張旅費も再検討されたい。
結果コメント	限られた予算を効果的に執行されたことは評価したい。 大学内での問題の把握、先進事例の調査、英語・日本語表記による成果物の改定など、重要かつ有益な取り組みが進められた。ただし、ユニット8とユニット9に関しては、日本語表記のスライドを完成することを期待する。さらにヒアリングならびに現地調査など、年度前半期から実施されることを期待する。

代表者氏名	諏訪　牧子（理工学部　化学・生命科学科）
事業計画テーマ	生命系講義とバイオインフォマティクスの融合型教育プログラム構築
メンバー	宮野　雅司、阿部　文快、田邉　一仁、平田　晋三、西尾　泉、三井　敏之
支援金額	1,500,000円
採択理由	継続的なテーマであり、昨年度の成果を踏まえたプロジェクトとして期待できる。実行可能性は高いと思われるが、イラスト購入費用を昨年度の実績で見直していただきたい。さらに今後、望む学生が育成できているのか、どのような効果が出ているのか、測定する視点も持ち合わせていただきたい。
結果コメント	生命科学系講義とバイオインフォマティクス融合型教育カリキュラムについて、科目間の相互関係を見直しながら、新たなトピックの関連付けを容易にしている点は高く評価できる。e-ラーニングシステムで用いる新たな教育コンテンツを作成し、教材も構築して昨年度の反省や学生の意見を生かしていることも評価できる。学生による動作確認も計画的に実施されており、本プロジェクトはほぼ完了した。これからの授業での活用を期待したい。

○　2015 年度「教育改善支援制度」採択プログラム活動内容

（2016年6月1日開催　2016年度第１回青山学院大学ＦＤフォーラム
～ 2015年度教育改善支援制度成果報告会 ～　報告内容より）

・事業計画テーマ「産学連携による情報システム人材育成プログラムの開発」

1

2015年度
教育改善支援制度

ラーニングコモンズやグローバル化に向けた教職員共同のPDプログラムの構築

2

プロジェクトメンバー

- 代表　佐藤 剛（庶務部経理課）
- 副代表　坂田　哲人（情報メディアセンター）
  西村　香（学術情報部）
  松本　治美（学術情報部）
  野末　俊比古（教育人間科学部）
  大足　恭平（情報メディアセンター）
  有薗　聡美（政策企画部）
  鴨志田　佳代（政策企画部）
  原口　渉（庶務部）
  佐々野　桂佑（相模原事務部）

3

PD（PROFESSIONAL DEVELOPMENT）とは、専門的能力の開発である。

PDプログラムとは、職能［専門的能力の］開発プログラムを言う

・職能（大学に務める者。部署での特別な能力）
・職能訓練は時間がかかる。
・優先的に取り組むべき能力。
→
教学の視点と事務の視点で、共同で職能開発

4

PDプログラム実施計画

文部科学省の動向
補助金の公募
補助金の流れに合わせて、プログラムを作成。
補助金申請
補助金採択・不採択

・専門的能力の選定・開発
・ｱｸﾃｨﾌﾞﾗｰﾆﾝｸﾞへの理解
・語学力の向上
・各プログラムの取り組み
目標達成（補助金申請）
効果の検証
サイクル

5

アクティブラーニングとは

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。
学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。
発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

6

アクティブラーニングへの理解

・目標
（改革総合支援事業）
教育研究活性化事業への補助金申請

・職能［専門的能力の］開発プログラム

他大学の視察
千葉・明治・法政・玉川学園・同志社・立命館
青山学院大学の特徴の確認
補助金申請（青山学院大学にあったラーニングコモンズの設置）

7

他大学の取り組み事例

1.すべてを揃えた大型ラーニングコモンズ
同志社・玉川学園・明治

・ラーニングコモンズありきで、大型の建物を建設している。
・エリアによって、活気（複数）と静寂（単独）など、多くのバリエーションを備えている。
・正門に近い（入りやすい）ところにある。

2.特徴を活かした小型のラーニングコモンズ
法政・立命館

・既存建物にラーニングコモンズを設置。
・立命館茨木キャンパスは建物のいたるところにラーニングコモンズがある。
・場所は選ばず。
・エリアは小さいが、少人数での学習に効果的な什器（ホワイトボードやPCを含む）が揃っている。

8

PDプログラムの成果

・補助金は不採択
・8号館1階　図書学習室にラーニングコモンズに備わるべき、什器を配置した。

・授業の改善・変化が必要。→今後、検証を→**語学のライティングセンターが必要になる。**

9

職員の英語能力向上プログラム

・目標
（改革総合支援事業）
教育研究活性化事業への補助金申請

・職能［専門的能力の］開発プログラム
能力があるのに、なぜ英語が話せなくなるのか？
↓ 理由は？

・継続的な学習をする環境がない
・語学学習に対する費用的な負担がある
・業務によって英語の使用頻度に差がある
・残業時間や業務量の増加が余暇を減少させ、学習意欲を妨げている
・英語から離れているため、始めるに際して「恥ずかしさ」がある

10

これは、タブレットしかない！！

サーフェスプロ（マイクロソフト）

VS

ipad（アップル）

持ってもらわないと、意味がない。

11

ソフト・アプリの選定

・スーパー英語の断念　（　VS　ipad　）

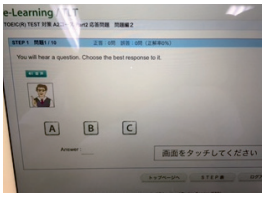
ニュートン・ソフトとの出会い
・ipadに対応・学習時間を管理・小テストの充実

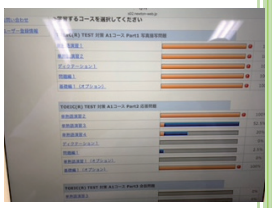
通勤に最適なアプリ群
・英単語・熟語・英会話など

12

やっぱり、青山スタイルで・・・

ipad ⇒ 約130名が申し込み





13

PDプログラム成果

改革総合支援事業の採択

600万円弱の補助金を獲得
130台のipadを購入
1月下旬より、英語力向上プログラム開始

14

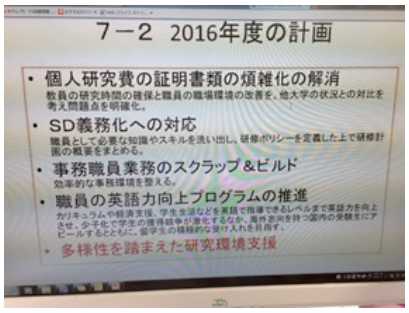
補足

学院特別案件に採択
ソフトの費用を学院で継続
130名が英語資格試験を受験
（受験料全額補助）

⇒学院として、承認されました。

15

知らないうちに・・・学長基本方針2016



16

ご静聴ありがとうございました。

・事業計画テーマ「ラーニングコモンズやグローバル化に向けた教職員共同のPDプログラムの構築」

1

産学連携による情報システム人材育成プログラムの開発

宮川裕之*1、飯島泰裕*1、松澤芳昭*2、原潔*3、鈴木俊男*4

*1:社会情報学部教授、*2:社会情報学部助教、
*3:社会情報学部客員教授、*4:社会情報学部附置リエゾンラボ特別研究員

2

報告項目

1. IS専門家の仕事はどのように変わってきたのか
2. 情報系企業が直面する課題と人材育成 － フォーラムの開催
3. 試行講義の実施
4. 教育内容の検討
5. 成果物

3

報告項目

1. IS専門家の仕事はどのように変わってきたのか
2. 情報系企業が直面する課題と人材育成 － フォーラムの開催
3. 試行講義の実施
4. 教育内容の検討
5. 成果物

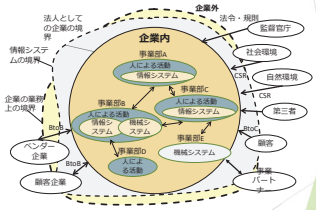
4

情報システム専門家に求められる能力

- 第1期－ハードウェアの性能によって他社との差別化ができたコンピュータの黎明期
  - コンピュータを作る能力
- 第2期－アプリケーションによって差別化ができた時代
  - 利用者からのデータ処理の要望に応じてコンピュータプログラムを作成する能力
- 第3期－情報そのものが差別化要因となる時代
  - 顧客の満足度を高めるための「情報の仕組み」、「人間活動」を構想する能力
  - 情報技術の領域に加え、経営学、社会学、心理学などの幅広い知識が求められる
  - 「開発者と利用者が一緒になって情報システムをデザインする」という姿勢

5

情報システムとその環境



6

情報システム部門の抱える主要な課題

企業の情報システムは、日本では長年にわたりシステム開発の多重の下請け構造により実現されており、ビジネスのアジリティが要求される現在においては、ステークホルダー間の価値の不一致が構造的不幸を引き起こしている。
また、情報システムの社会における役割が重要になるに従って社会的責任（CSR）と事業リスクの関連性が高まってきている。

- ◆ 既存技術の継承と新技術への対応
  - ・生産性向上
  - ・品質向上
  - ・イノベーション
- ◆ ビジネス要求の多様化と速い変化
  - ・問題形成と問題解決
  - ・スタートアップのマネジメント
  - ・顧客満足の向上
- ◆ 社会的な要求と制約
  - ・安心・安全
  - ・ひと・社会・自然に対する優しさ
  - ・持続力・復活力

7

報告項目

1. IS専門家の仕事はどのように変わってきたのか
2. 情報系企業が直面する課題と人材育成 － フォーラムの開催
3. 試行講義の実施
4. 教育内容の検討
5. 成果物

8

ADPISAフォーラムの開催
9月12日（土）

- 趣旨：
- ビジネス変化に即応する情報システムのニーズが高まっている現在、情報システムの企画・開発・運営に携わる現代のIS専門家は、情報技術のみならず経営・組織に関する幅広い専門性や組織を取り巻く環境の動向を的確に捉えて情報システムの設計に取り入れる力が求められます。
- ユーザ系企業にあっては適切な情報システムの構想立案を、また、システムベンダ系企業にあっては顧客への魅力ある提案ができるIS専門家育成のための社会人向け教育プログラムの実施ならびに参加企業と協働してIS専門家育成に関するマネージメントサイクルを運営することを目的として、領域融合による実践能力育成を指向する青山学院大学社会情報学部リエゾン・ラボは、青山☆情報システムアーキテクト育成プログラム（ADPISA）プロジェクトを立ち上げました。
- そのプロジェクト活動の第1弾として、ユーザ系企業やシステムベンダ系企業が抱えている課題、IS人材像やその育成などについて意見交換することを目的として以下のとおり本フォーラムを開催することにしましたので、ぜひ、ご参加の上、ご意見を賜りたくお願い申し上げます。
  - （フォーラム案内より抜粋）

9

- プログラム：14:00-17:00
- ご挨拶（14:00）
  - 青山学院大学社会情報学部学部長・リエゾン・ラボ長　稲積宏誠
  - ADPISAプロジェクトリーダ　宮川裕之
- 特別講演（14:15）
  - 業務システム開発におけるITマネジメント
    - 菊島靖弘氏（（独）情報処理推進機構　SECリサーチフェロー、元東京海上日動システムズ　取締役、人事院CIO補佐官）
  - 「未来の“あたりまえ”を創る」会社への変革
  - ～イノベーション人財育成（プリンシパルプロジェクト）のご紹介～
    - 白井久美子氏（日本ユニシス株式会社 人事部人財イノベーション室長、博士(工学)、日本プロジェクトマネジメント協会 副理事長、国際P2M学会（IAP2M）監事・評議委員）
- ISアーキテクトの人材像とその育成（16:10）　宮川裕之
- ADPISA・コンソーシアムの紹介（16:40）　原潔
- 情報交換会：17:30-19:00

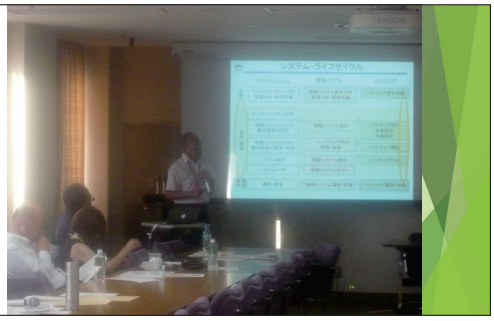
10

11

12

13

14



15

フォーラム　アンケート

- 超上流・上流工程の人材育成の課題
  - IS人材育成ができていない
  - 説得ある提案のできる人が少ない
  - キャリアプランと教育体系が一致していない
  - 技術の向上に偏ってしまう
  - 人材育成の重要性は認識しているが育成する仕組み自体が無い
  - 実業件に課題を見出して学ばせることが大切
  - 施主の能力不足
  - 教育プログラムそのものが無い
  - 体系化された教育プログラムが無い
  - 教育にかける時間とコストが無く継続できない
  - 上流の基礎的な考え方は業務に関わらず習得すべきだが業務多忙で時間が取れない
  - OJTの限界（体系化されていない、教える先輩が多忙）
- ADPISAへの要望
  - 講座・座学中心ではなくワークショップ形式で教育して欲しい
  - アカデミックな世界とビジネスの世界はもっと融合・協力すべき
  - 人材育成の部門担当者を交えて具体的な相談をしたい

16

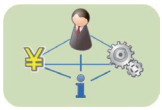
報告項目

1. IS専門家の仕事はどのように変わってきたのか
2. 情報系企業が直面する課題と人材育成　－　フォーラムの開催
3. 試行講義の実施
4. 教育内容の検討
5. 成果物

17

S01：情報システムアーキテクト特論

ADPISA試供講座
情報システムアーキテクト概論



2016年4月9日（土）

青山学院大学社会情報学部附置リエゾンラボ
ADPISA

18

本試供講座の内容

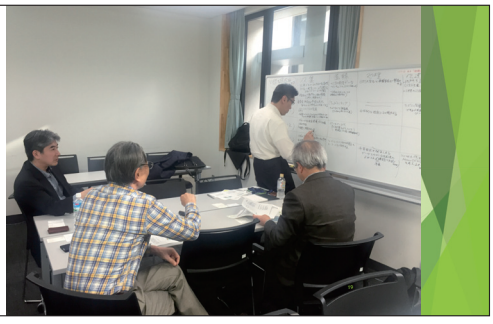
□　出現する未来の変化に自律的に考え行動できるIS人材の育成を目指すADPISAが、開講を準備している講座の一つ「情報システムアーキテクト特論」の内容の一部をご紹介します。

◇　歴史的に情報システムがビジネスに与えた役割/効果を確認しながら、現代の視点での課題を議論します。

◇　今後ビジネスに貢献する情報システムを実現する「ISアーキテクト」の役割について議論します。

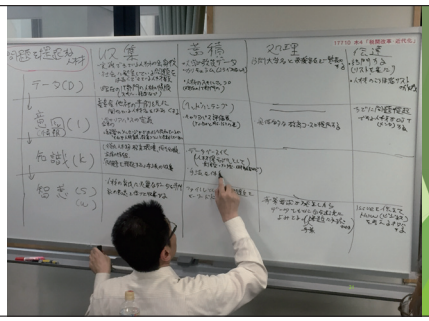
◇　「ISアーキテクト」が担う、ステークホルダのニーズを定義し、ソリューションを推奨し、実現を監理し、エンタープライズにチェンジを引き起こすための専門活動を理解します。

19



20

21



22

試行講義　アンケート

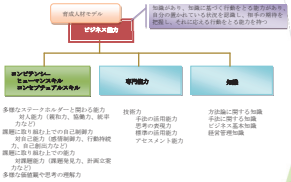
- 演習は非常におもしろかったが、本日のテーマとの関係が少しわかり難かった
- ISアーキテクトの業務、必要な意義が理解できた
- 必要な人材であり、育成できれば非常に有用と思う
- ワークショップ形式は良かった、いろいろな意見に触れて参考になった
- データ、意図、知識、技能の違いの理解が深まった
- 全体像が判って良かった
- 質問が随時できるのが良かった
- 情報システムアーキテクト＝ビジネスアーキテクトという認識を確認できた
- 現状のITに関わる問題点が整理できている点がよかった
- 情報システムアーキテクトの概念がわかった
- ディスカッションができるところが良かった
- E-ラーニングによる事前学習を組み合わせると良いのでは

23

報告項目

1. IS専門家の仕事はどのように変わってきたのか
2. 情報系企業が直面する課題と人材育成　→　フォーラムの開催
3. 試行講義の実施
4. 教育内容
5. 成果物

24



25

情報システムアーキテクト育成の参照体系

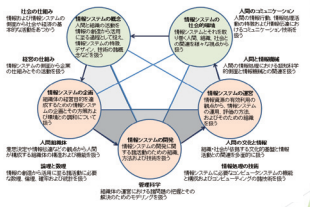
情報システムアーキテクトは、高度な技術者倫理と専門性を有し、特に情報システムの視点で企業活動などの人間活動を捉える能力ならびに情報システムによる価値創造を構想し実現することのできる知識、スキル、コンピテンシーを有する人材。

ADPISAにおける情報システムアーキテクト教育の基本的な考え方は、

- 「人間活動と情報技術の調和」
- 「異なる専門領域の融合：個別専門領域のシステム化」
- ISのマインドセットをベースに、情報技術の進化や社会状況の変化に対応すべく、必要な学習項目を再定義した上で情報システムアーキテクトを育成すること。

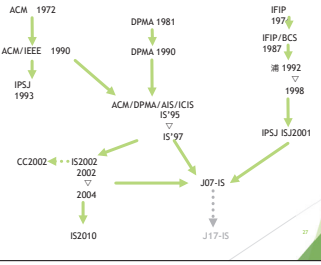
26

情報システム学の体系



27

ISカリキュラムモデルの流れ



28

別資料

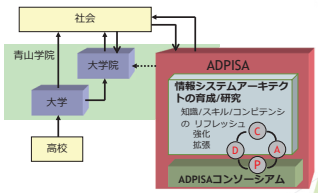
29

教育プログラムの詳細

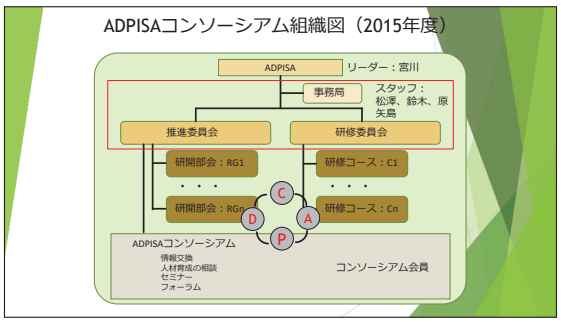
- 別資料を参照

30

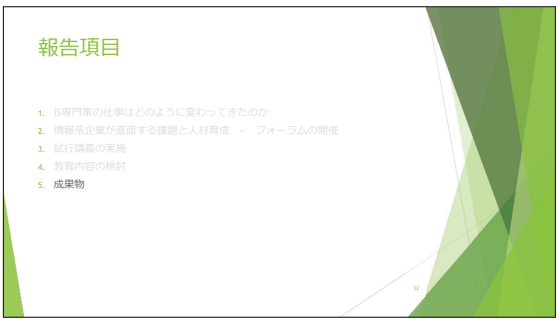
社会情報学部附置リエゾンラボ ADPISA



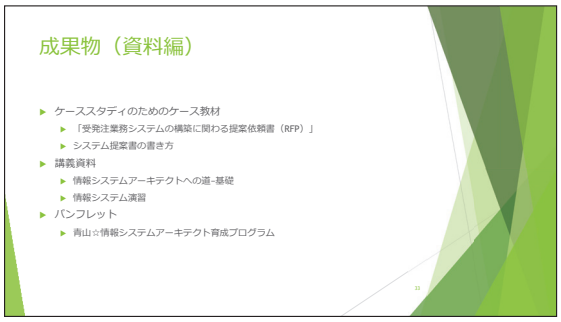
31


ADPISAコンソーシアム組織図（2015年度）
ADPISA
リーダー：宮川
事務局
スタッフ：
松澤、鈴木、原
矢島
推進委員会
研修委員会
研開部会：RG1
研修コース：C1
研開部会：RGn
研修コース：Cn
C
D
A
P
ADPISAコンソーシアム
情報交換
人材育成の相談
セミナー
フォーラム
コンソーシアム会員

32


報告項目
1. IS専門家の仕事はどのように変わってきたのか
2. 情報系企業が直面する課題と人材育成 － フォーラムの開催
3. 試行講義の実施
4. 教育内容の検討
5. 成果物

33


成果物（資料編）
ケーススタディのためのケース教材
「受発注業務システムの構築に関わる提案依頼書（RFP）」
システム提案書の書き方
講義資料
情報システムアーキテクトへの道-基礎
情報システム演習
パンフレット
青山☆情報システムアーキテクト育成プログラム

34

青山☆情報システムアーキテクト育成プログラム
Aoyama ☆ Development Program for Information Systems Architect
(ADPISA)
情報システムアーキテクトの育成と研究
ご清聴ありがとうございました
青山学院大学　相模原キャンパス
社会情報学部相模リエゾンラボ
青山☆情報システムアーキテクト育成プログラム
〒252-5258
神奈川県相模原市中央区淵野辺5-10-1
URL：http://mjagawa.ii.aoyama.ac.jp/adpisa/
E-Mail：adpisa@ii.aoyama.ac.jp

・事業計画テーマ「電子教材を利用した経済学教育の効果測定」

1

青山学院大学
AOYAMA GAKUIN UNIVERSITY

2015年度教育改善支援制度成果報告会
電子教材を利用した経済学教育の効果測定

経済学部 現代経済デザイン学科　宮原 勝一
経済学部 経済学科　矢吹 初

地の塩、世の光
The Salt of the Earth, The Light of the World
青山学院 スクール・モットー

1

2

事業の背景 ①

- 2013年度 経済学部附置経済研究所の産学共同研究プロジェクト
  - 新教育支援システムの構築とその運営に関する研究
    1．アンケート調査に基づく学生意識の現状把握と傾向分析
    2．テキストマイニングによる学生意識の分析
    3．経済学教育ツールとしてのタブレット端末活用実験
- タブレット端末活用実験の参画企業（役割）
  - 株式会社東洋経済新報社が、紙媒体の書籍を電子化
  - 京セラ丸善システムインテグレーション株式会社が、電子化された書籍を配信し、教育支援に関連するデータを提供
- ここでは、講義等で使用することを目的とした書籍を電子化しており、電子教科書と称している。

2

青山学院大学

3

事業の背景 ②

学生カルテ（単に、電子化された情報）ではなく、
横断的なビッグデータによる分析

入試データ
成績データ
学生意識調査
学生生活データ

入学者確保

学力向上
学生生活支援
就業力向上
法人経営

電子教科書実験は、学生に予習・復習の機会を与え、
学力向上や**知識の定着（学びの実質化）**を目指すもの

3

青山学院大学

4

事業の背景 ③

- 期　間
  2013年9月24日（火）～2014年1月28日（火）
- 対象授業
  公共経済学Ⅰほか
- 対象書籍
  - スティグリッツ 公共経済学[第2版]（上）公共部門・公共支出
  - スティグリッツ 公共経済学[第2版]（下）租税・地方財政・マクロ財政政策
    （共に　J・E・スティグリッツ著、藪下史郎訳、東洋経済新報社刊）
- その他
  - ArcGISのマニュアル

4

青山学院大学

5

配信の方法 ①

株式会社東洋経済新報社　KYOCERA/丸善MARUZEN　青山学院大学

学生には、
iPad mini 35台、**Nexus7 35台**を貸与

事前に貸与・配信希望の有無を調査し、
抽選により機種を決定
（用紙提出者130名、希望者117名）

［BookLooper(KMSI)の画面］

5

青山学院大学

6

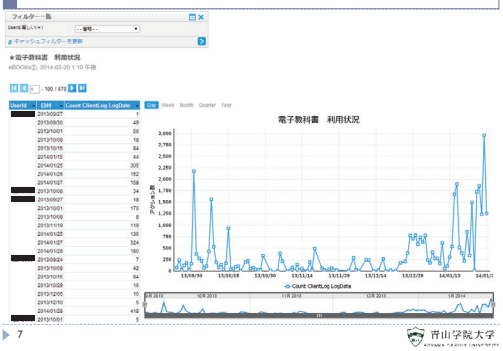
配信の方法 ②

6

青山学院大学

7

定期試験までの使用状況



7

青山学院大学

8

2014年度・2015年度の教科書配信

- 対象授業
  経済学科：ミクロ経済学Ⅰ、マクロ経済学Ⅰ（選択必修科目）
  現代経済デザイン学科：ミクロ経済学講義、同演習（いずれも必修科目）
- 対象書籍　　経済学科　　現代経済デザイン学科
  - マンキュー 経済学Ⅰ ミクロ編（第3版）
  - マンキュー 経済学Ⅱ マクロ編（第3版）
  - スティグリッツ ミクロ経済学（第4版）
  - スティグリッツ 公共経済学[第2版]（上）公共部門・公共支出
  - スティグリッツ 公共経済学[第2版]（下）租税・地方財政・マクロ財政政策

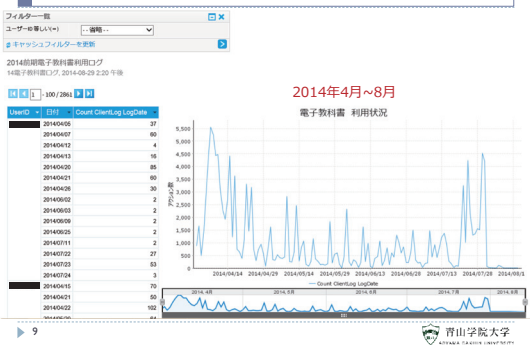
  すべて、東洋経済新報社刊
- その他
  - ArcGISのマニュアル

8

青山学院大学

9

定期試験までの使用状況



9

10

シカケ・副教材の作成

2015年度は、**一部の講義**で
manaba関連サービスの
マンキューラーニングを利用

manaba利用者：192名
manaba非利用者：195名
※対象の電子教科書が利用
可能な経済学科のみ

マンキュー経済学Ⅰ　ミクロ編
マンキュー経済学Ⅱ　マクロ編
マンキュー入門経済学　3編の
テストバンク（1章あたり100問ほどの設問）を
e-learning化

10

11

マンキューラーニングとは

株式会社　東洋経済新報社

教科書に即したテストバンク
一冊につき最大2,200問

×

株式会社　朝日ネット

manaba

クラウド型授業支援システム

マンキューラーニング　supported by manaba

経済学基礎科目の新しい学びのカタチ

11

12

マンキューラーニングの内容

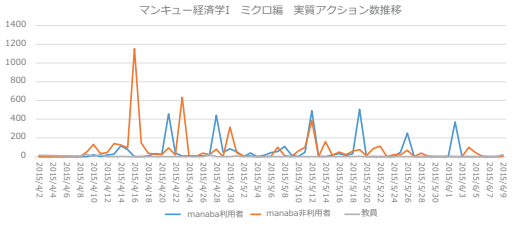
≪課題の種類≫
一章ごとに計4種の課題を設定。

- プレテスト章問題
  - 全10問のミニテスト
- 章テスト
  - 全15問で構成された、
    難易度が高い問題も含むテスト
- 記述式問題
  - 一章あたり1~3問程度の記述式問題
  - 回答内容は手動で教員が採点
- ドリル問題
  - 全70問のテストバンクのうち20問を
    ランダムで出題する、ドリル形式問題
  - リアルタイム採点、複数回受験が可能

12

13

電子教科書のアクション数



実質アクション数：電子書籍を開いて1ページ3秒以上、30分以下留まっていることを条件とした利用状況

『マンキュー経済学Ⅰ　ミクロ編』を対象
母数
・manaba利用者：2015年度経済学科入学manaba利用者192名
・manaba非利用者：2015年度経済学科入学manaba利用者195名　・教員：BookLooper利用者25名

13

14

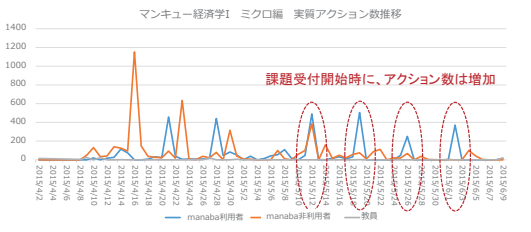
マンキューラーニングの取組状況

# コースコード	# コース名	# 人数	# 課題種別	# 課題名	# 受付開始	# 受付終了
A	入門の科目	45	小テスト（自動採点）	ミクロ1章　プレテスト10問	2015/5/12 10:30	2015/5/19 10:30
A	入門の科目	45	ドリル	ミクロ1章　ドリル問題	2015/5/12 10:35	2015/5/19 10:35
A	入門の科目	45	小テスト（自動採点）	ミクロ2章　プレテスト10問	2015/5/12 12:40	2015/5/19 11:40
A	入門の科目	45	小テスト（自動採点）	ミクロ2章　章テスト15問	2015/5/12 12:45	2015/5/19 11:45
A	入門の科目	45	ドリル	ミクロ2章　ドリル問題	2015/5/26 10:50	2015/5/26 12:30
A	入門の科目	45	小テスト（自動採点）	ミクロ3章　プレテスト10問	2015/5/12 12:45	2015/5/26 12:45
A	入門の科目	45	小テスト（自動採点）	ミクロ3章　章テスト15問	2015/5/12 12:45	2015/5/26 12:45
A	入門の科目	45	ドリル	ミクロ3章　ドリル問題	2015/5/26 10:50	2015/5/26 12:30
A	入門の科目	45	小テスト（自動採点）	ミクロ4章　プレテスト10問	2015/6/11 10:55	2015/6/17 10:55
A	入門の科目	45	小テスト（自動採点）	ミクロ4章　章テスト15問	2015/6/11 11:00	2015/6/17 11:00
B	ゼミ	15	小テスト（自動採点）	マクロ1章　プレテスト10問	2015/5/8 16:22	
B	ゼミ	15	小テスト（自動採点）	マクロ1章　章テスト15問	2015/5/15 16:41	
B	ゼミ	15	ドリル	マクロ1章　ドリル問題	2015/5/8 16:23	
B	ゼミ	15	小テスト（自動採点）	マクロ2章　プレテスト10問	2015/5/15 16:52	
B	ゼミ	15	ドリル	マクロ2章　ドリル問題	2015/5/15 16:53	
C	ミクロを使う科目	232	ドリル	ミクロ4章　ドリル問題	2015/5/12 13:01	
C	ミクロを使う科目	232	ドリル	ミクロ経済学Ⅰ(4 章)	2015/5/26 10:49	2015/7/14 23:55
C	ミクロを使う科目	232	ドリル	ミクロ経済学Ⅰ(5 章)	2015/6/2 12:45	2015/7/14 23:55
D	ゼミ	24	ドリル	入門1章　ドリル問題	2015/5/26 15:55	

14

15

電子教科書のアクション数（再掲）



実質アクション数：電子書籍を開いて1ページ3秒以上、30分以下留まっていることを条件とした利用状況

『マンキュー経済学Ⅰ　ミクロ編』を対象
母数
・manaba利用者：2015年度経済学科入学manaba利用者192名
・manaba非利用者：2015年度経済学科入学manaba利用者195名　・教員：BookLooper利用者25名

15

16

電子教材を利用した経済学教育の一連の流れ

2014年度
本事業の参画者が、
マンキューラーニング（manaba）を
モニター試用

2015年度
本事業の参画者
が、
マンキューラーニ
ングを利用

EREのe-learning
化に向けた検討

EREのe-learning教材の開発

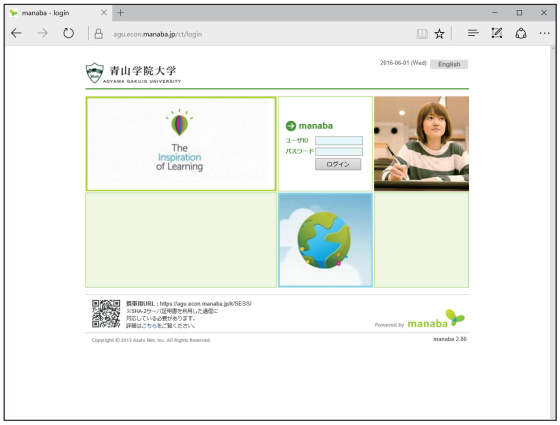
（2013年度より）

経済学部1年生対象・電子教科書配信

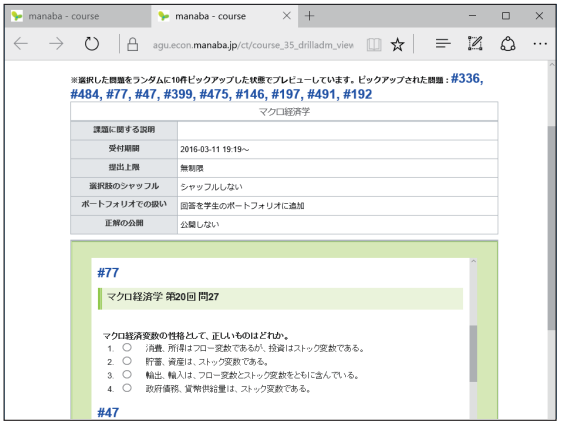
ERE（ミクロ・マクロ）の無料受験

16

17

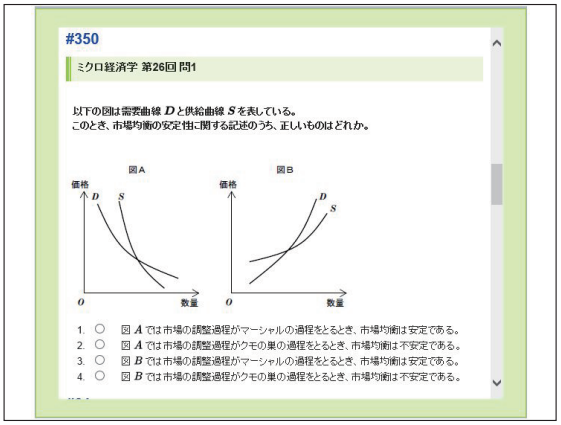


18

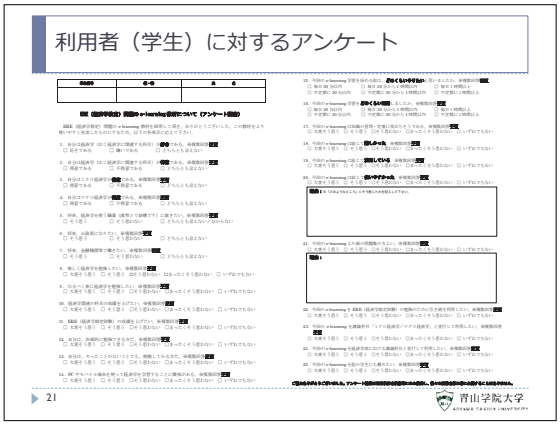


19

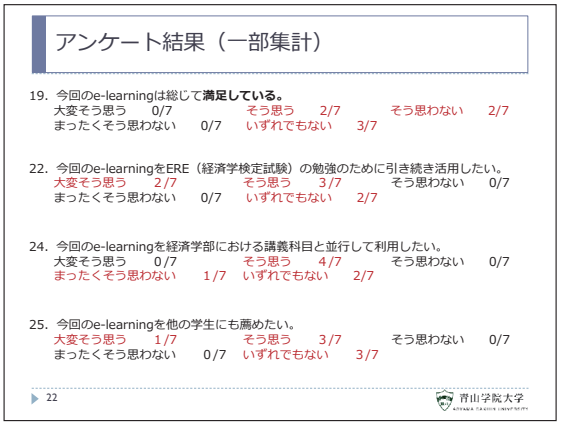
20



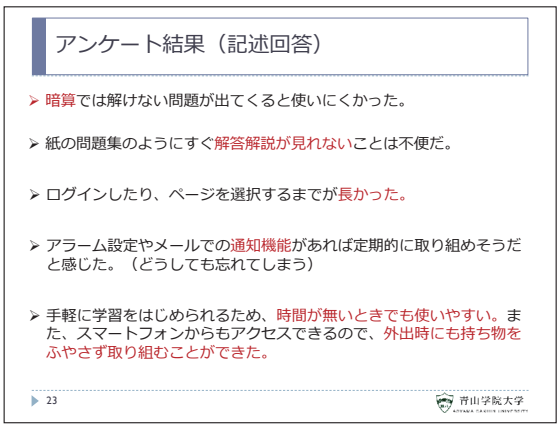
21



22



23



・事業計画テーマ「海外留学生の直面するキャンパスライフの問題点の把握と利便性の向上
―英語・日本語標記の推進を中心として―」

1

海外留学生の直面するキャンパスライフの
問題点の把握と利便性の向上
―英語・日本語表記の推進を中心として―

2016年6月1日
第10会議室

薄上二郎（青山学院大学経営学部）
平塚広義（前経営学部、現地球社会共生学部）

2

発表内容

- プロジェクトの目的
- 活動内容
- SMIPRPとは
- 留学生へのインタビュー調査
- 取り組みの先進事例
- ビジュアルハンドブックの概要
- ユニット7（AED）の概要
- まとめと今後の取り組み課題

3

プロジェクトの目的

- 第1に、海外からの留学生（SMIPRP留学生）が、キャンパスにおいて、直面する言語的障壁による問題の実態を明らかにすること
- 第2に、昨年作成した「留学生のためのビジュアルハンドブック」の内容を見直し、よりわかりやすく使いやすいように改定すること
- 第3に、2014年にできなかった言語的障壁を低減するための英語・日本語表記による新たな成果物の作成。

4

活動内容

- インタビュー調査／現地調査の実施
  （名古屋大学、早稲田大学）
- 言語的障壁を低減しキャンパスライフにおける利便性を向上させるために、英語表記によるビジュアルハンドブックの改定（2016度版の作成）。
- ハンドブックの内容を一部スマホ化

5

SMIPRPとは

- SMIPRP は、戦略経営・知的財産権プログラムの略称。世界各国の税関等で指導的役割を担うことを期待される将来のリーダーのために、世界税関機構（WCO：World Customs Organization）のスポンサーシップの下で提供される1年間の修士課程コースである。
- 2011年4月に開講し、過去5年間の卒業生は、アジア、中東、中南米、アフリカ、欧州からの30ヵ国、約50名になる。年間10名の受け入れ。

6

SMIPRPの特徴とは

- すべての講義は英語で実施（100%英語）
  （日本語能力を合否判定基準にしていない）
- 10名全員が、社会人留学生
  （税関職員25歳～40歳前後）
- WCO（世界税関機構）／財務省関税局との連携プログラム
- 毎年3月中に、オリエンテーション実施

（約2週間の異文化適応期間を設けている）

7

学生へのインタビュー調査（1）

- 毎年3回（4月、9月、2月）に実施。
- プログラムへの満足度は高いものの、同じような要望が毎回でている。

例

(1)キャンパス内の英語表記が少ない

学内の建物の番号／案内版が日本語のみ

(2)日本人学生との交流が少ない

(3)居住環境の改善要望（アパートが狭い）

8

学生へのインタビュー調査（2）

(4)地震などの自然災害が発生したとき、キャンパス内、通学途中、住居内での対応がわからず不安である。

(5) フィットネスセンターの利用方法をよく理解できない。

9

留学生対応の特徴

(1)時間がかかる
・多くの不満や改善要望は誤解によるものが多く、確認やフィードバックが必要
(2)お金がかかる
・英語のネイティブチェックが必要（学則、ルール）
(3)問題解決には、他部門との協力体制が必要
・国際交流センター、図書館、情報センター、施設課、安全対策課、その他外部機関など

10

先進事例調査

インタビュー調査／現地調査の実施

(1) 効果的な解決方法のヒントを探る

(2) 潜在的なリスクの洗い出し

(3) 重点課題の確認

11

名古屋大学国際教育研究センター

実施日：2016年1月21日
目的：
キャンパス内の日英表記の現状把握
留学生ハンドブックの開発・改定方法について
留学生サポート体制の調査

12

名古屋大学の多言語表記の例

多言語表記の例

多言語表記の例

13

名古屋大学：ヒアリング調査で分かったこと

- オリエンテーションの資料が充実
- ハンドブックの改定と開発
  紙とウェブベースの両方で対応
  ウェブベースは適宜改定
  ハンドブックは2年に一度改定
  （日英並列で表記）
  図書館のサポート体制が充実
  （留学生が留学生をサポート）

14

日本語と英語が併記（左側が日本語、右側が英語）

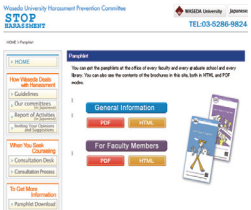
15

名古屋大学図書館内の案内

16

早稲田大学ハラスメント防止室

実施日：2016年2月23日
目的：
ハラスメント防止室における留学生対応
多言語対応



17

ハラスメント防止の例

18

早稲田大学:
ヒアリング調査で分かったこと

- 留学生からの相談は増加傾向
- 本人がハラスメントと認識するなら相談を受ける
- 翻訳のための特別の予算措置はないが、余裕をもって予算計画を立てている。
- 英語の苦情申し立て書と英語での対応ができる体制
- 大学独自で、英語の教職員用ハラスメント防止VRT作成

英文の苦情申し立て書

19

2016年ビジュアルハンドブック

- ヒアリング調査とフィールドワーク調査の結果を踏まえて、留学生向けの9ユニットから構成されるビジュアルハンドブック(2016年版)を作成した。
- ユニットに共通する特徴は、次の3つである。

20

2016年ビジュアルハンドブック

(1)留学生の利用頻度が高い施設、利用してもらいたい施設など、留学生の行動に重点を置いた記述を施した。

(2)写真やイラストを多く取り入れて、手順(ステップ)などをわかりやすく示す工夫をした。

(3)今後の改定に備え、内容をチェックしやすいように、英語と日本語を併記した。

21

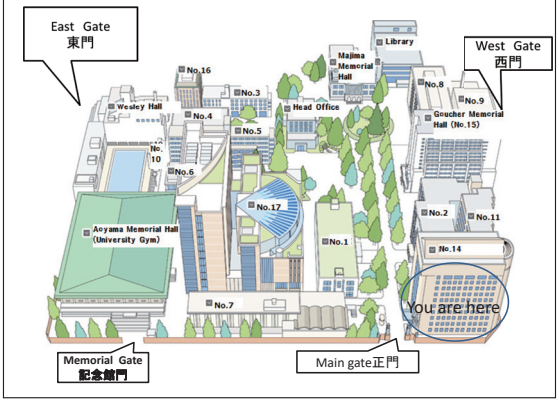
改定のポイント

・誤解を受ける表現改定
・わかりにくい英語表現の修正
・イラストなどの修正や追加
・知的財産に関わる内容の使用確認など

22

English and Japanese
Campus Life Guidebook
英語日本語
キャンパスライフガイドブック
Unit 1
ユニット1
Campus Map
キャンパスマップ
2016 Edition
2016年度版
Edited by Aoyama Gakuin University SMIPRP
青山学院大学SMIPRP編集

23



24

Muslim Prayer Space
(イスラム教徒お祈りスペース)

On the 2nd floor of Goucher Memorial Hall (Building 15), there is a partitioned space for Muslim Prayers
15号館2階には、イスラム教徒のお祈りスペースが設けられています。

Use stairs to go up to the 2nd floor. Go along the path to hit the partitioned space for Muslim prayer. 階段を使って2階に行きます。そのまま奥に進みます。

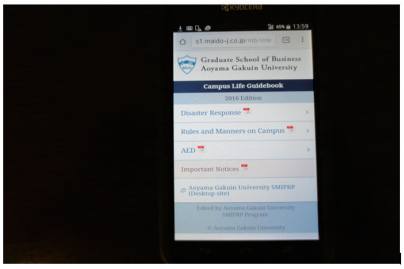
25

ビジュアルハンドブック

ユニット1：キャンパスマップ
ユニット2：食堂と購買会
ユニット3：キャンパス内のごみ箱利用のルール
ユニット4：災害への対応（スマホ対応）
ユニット5：キャンパス内のルールとマナー（スマホ対応）
ユニット6：PROQUESTの使い方
ユニット7：AEDの使い方（新規作成）（スマホ対応）
ユニット8：LDAP Setting（新規作成）
ユニット9：フィットネスセンター（新規作成）

26

スマホ対応のメニュー画面



27

良くある質問と回答(1)

Q1：留学生に日本語をもっと教えた方が良いのでは？

A1：3月下旬に5日間の集中講座、前期15回、後期15回の日本語講座を実施

Q2：もっと既存の国際交流センターの資料、英文パンフレット、英語のウエブページを活用してはどうか

A2：参照している。すべての活動を網羅しているのは使いにくい。

28

良くある質問と回答(2)

Q3:使用頻度は、コストパフォーマンスは？

A3：主にオリエンテーションで使用。

リスクマネジメント上必要。使用頻度は低くても、留学生に伝えておくべき情報である。

（特に、災害情報やAED、学内規則など）

29

English and Japanese
Campus Life Guidebook
英語日本語
キャンパスライフガイドブック
Unit 7
ユニット７
Automated External Defibrillator (AED)

2016 Edition
2016年度版
Edited by Aoyama Gakuin University SMIPRP
青山学院大学ＳＭＩＰＲＰ編集

30

Automated External Defibrillator (AED)
AEDについて

AED is a rescue kit for giving emergency relief to someone, who is unconscious, or has stopped breathing.

意識・呼吸のない急病人にはAED（体外自動除細動器）を使用して応急救護を行ってください。

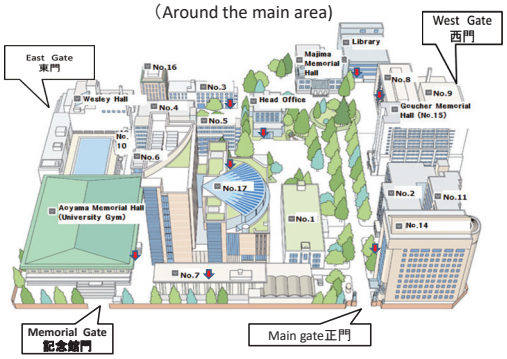
AED kits are placed in many places around campus.

AEDはキャンパス全域に設置されています。

31

Where are the AED kits?　設置場所

（Around the main area）



32

Automated External Defibrillator (AED)
AEDについて

When you find somebody unconscious or not breathing, seek help from a nearby guard, student, or any person available at all. Ask them to call 119.

できるだけ早く近くの警備員、または学生に連絡し、119番に連絡してください。

33

Automated External Defibrillator (AED)
AEDについて

AED is an approved product by the Pharmaceutical Affairs Law in Japan
AEDは薬事法認定製品です。

No permission nor payment is needed for using an AED kit. Voice instruction will start as soon as you open the kit box. It will guide you all the way through.

利用に許可もお金も必要もありません。キットを開けると始まる音声ガイドに従って操作してください。

34

What is AED?
AEDとはなにか

Let's take a closer look into what an AED is. Let us follow the information Tokyo Fire Department provides on their website and learn how we can make use of the AED.

AEDとは何か、どう利用するのかを東京消防庁の情報に沿って説明します。

35

http://www.tfd.metro.tokyo.jp/eng/firstaid/index.html

- Emergency Preparedness
  - Emergency Call
  - Fire Fighting
  - Fire Prevention
  - First Aid
  - 10 Ways to prepare for an earthquake.
  - 10 Tips for Earthquake Safety
- PREPARE FOR EARTHQUAKES
- INFORMATION
- The Rescue Techniques Training Course
- To New Tenants or Tenants who Plan Construction
- PREPARE FOR EARTHQUAKES
  - Certified Fire Safety Building Indication System
  - Do you have a fire alarm installed in your home?
- FIRST AID
- Fire Protection Management and Disaster Protection Management
- Pocket Manual of Fire Protection Management
- WEBSITE POLICY

36

Let's Start!
はじめましょう

37

What is AED?
(Automated External Defibrillator)

- The AED is a medical device that analyzes the person's heart rate and detects abnormality which needs defibrillation (electric shock).
- The AED is portable and easy to operate. Push a button or open the lid. The voice will start explaining how to proceed.

- AEDは、患者の心拍を分析し、必要に応じ電気ショックを与えるための装置です
- ボックスを開ける、ボタンを押す等でAEDをスタートし、流れてくる音声指示に従います

38

What is AED?
(Automated External Defibrillator)

- If the device determines that defibrillation is not necessary, it will not operate.
- Defibrillation - The definitive treatment for an abnormal heart rate caused by a sudden cardiac arrest.

- 電気ショックの必要ない場合は、ボタンを押しても装置は作動しません
- 電気ショックとは、突然の心臓停止が引き起こす不整脈への最終的治療法です

39

Step 1: Talk to The Person
(声をかける)

1. Talk to and pat the victim on the shoulder.

1. 肩をたたきながら声をかける

40

Step 2: Call for Help（助けを求める）

2. If the victim is NOT conscious, yell for help.
Ask people nearby to dial 119 and get the AED.

2. 反応がなかったら、大声で助けを求め、
119番通報とAED搬送を依頼

41

Step 3: Check his/her breathing
(呼吸を確認)

3. See if the victim is breathing.

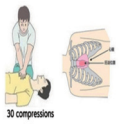
Check the chest and stomach for normal breathing. [Within 10 SECONDS]

3. 呼吸を確認する

42

Step 4: Perform Cardiac Compression
(心臓マッサージを行う)

4. In case of no breathing,start cardiac compression. [30 TIMES]



Where? Middle of the chest

4. 普段どおりの呼吸がなかったら、すぐに胸骨圧迫を30回行う

43

Step 5: Perform Artificial Respiration (Mouth-to-mouth Breathing) (人口呼吸)

5. Give 2 breaths after cardiac compression.

- Give 2 breaths. [About 1 SECOND at a time]
- See the chest is rising.

- IF you don't want to do mouth-to-mouth...
- IF you don't have a mouthpiece...
- IF the victim has blood or vomit in their mouth...

▼

Continue ONLY compressions.

* You can't, or may well not, be infected without a mouthpiece. However, it is recommended.

5. 胸骨圧迫の後、人工呼吸を2回行う

- 口対口の人工呼吸がためらわれる場合
- 一方向弁付人工呼吸用具がない場合
- 血液や嘔吐物などにより感染危険がある場合

人工呼吸を行わず、胸骨圧迫を続けます。

※ 人工呼吸用マウスピース等を使用しなくても感染危険は極めて低いといわれていますが、感染防止の観点から、人工呼吸用マウスピース等を使用したほうがより安全です。

胸骨圧迫30回と人工呼吸2回を繰り返して行います。

44

Step 6: Turn on AED (AEDをスタート)

6. When you've got AED at hand...

Turn it ON.

Some devices can be automatically turned ON with their lid opened.

6 AEDを入手

45

Step 7: Place the two pads
(パッドをあてる)

7. Place the pads on the chest.

The pictures on the pads show where they should go.
See that the chest is NOT wet. (If wet, wipe with a towel.)

* If you find smaller pads, use them for chilren at the age of up to 6 or so.

7. 電極パッドを胸に貼る

46

Step 8: Wait for AED's analysis
(AEDの分析を待つ)

8. AED tells you to give electric shocks.

Stay away from the victim while AED is at work.

8. 電気ショックの必要性は、AEDが判断する。

47

Step 9: Press the shock button
(ボタンを押す)

9. Press the shock button.

See that the victim is NOT touched by anyone.
Then,press the flashing shock button.

9.ショックボタンを押す

48

Step 10: Follow AED's audio instruction
(AEDの指示に従う)

Shock button

Press the button and follow the message.

Continue the CPR process until an ambulance unit arrives, or the victim shows movement including normal breathing.

ショックボタン

心肺蘇生とAEDの手順は、救急隊に引き継ぐか、何らかの応答や目的のあるしぐさ(例えば、嫌がるなどの体動)が出現したり、普段通りの呼吸が出現するまで続けます。

49

Methods of Compression and Breathing
心臓マッサージと人工呼吸の方法

CPR

Give 30 compressions and 2 breaths.

COMPRESSION	where?	Lower part of breastbone (i.e.,middle of the chest)
	How?	With both hands (or one hand for children)
	Depth	Give a 5-cm push at least. (Up to how big the victim's body is:child — 1/3 of the chest elementary schooler(upper grade) — 5 cm)
	Speed	100 times/m at least
BREATHING	How much?	Until the chest rises.
	How long?	About 1 second
	How many?	2 times

50

Useful Link

- Check the videos below to learn more about how to use AED
- http://www.aed-life.com/information/use_movie/aed2100_use.html
- http://www.aed-life.com/information/use_movie/aed2100.html

51

まとめ(1)

第1に、海外からの留学生（SMIPRP）が、キャンパスにおいて、直面する言語的障壁による問題の実態を明らかにした

- ・名古屋大学、早稲田大学の事例を視察
- ・直面する問題点や取り組みは共通
- ・SMIPRP学生からは毎年同じような要望
  （もっと英語表記を増やしてほしい）

52

まとめ(2)

第2に、2014年に作成した「留学生のためのビジュアルハンドブック」の内容を見直し、よりわかりやすく使いやすいように改定した。

- 内容の見直し、3つのユニットの新規開発

第3に、2014年にできなかった言語的障壁を低減するための英語・日本語表記による新たな成果物の作成する。

- 一部ハンドブックのスマホ化

53

今後の取り組み

- ビジュアルハンドブックの継続的改定
- 特に重要な内容（災害など）はスマホ化
- SMIPRP学生向け防災訓練の実施
- オリエンテーションでの活用
- AEDの使用訓練

54

- ご支援ありがとうございました。

・事業計画テーマ「生命系講義とバイオインフォマティクスの融合型教育プログラム構築」

1

生命系講義とバイオインフォマティクスの融合型教育プログラム構築

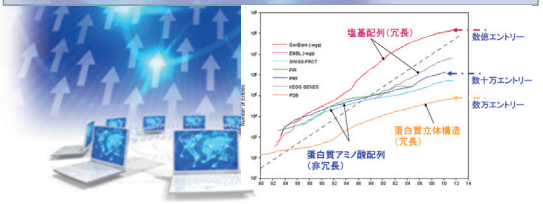
2016 年　6月1日　総研ビル第10会議室

諏訪牧子（代表者）、宮野雅司（副代表者）、
阿部文快、平田普三、田邊一仁、西尾泉、三井敏之

2

生命科学と生命情報

ゲノム配列情報やタンパク質立体構造情報、遺伝子発現　情報、医療情報など、生命系の大規模・異質・多階層・多次元のデジタル情報（生命系ビッグデータ）が急増中。



生命科学はこれらの膨大な情報を総合的に扱い生命現象の全容を捉えて行く学問に急速に移行しつつある。

3

今後、生命科学に必要とされる人材

生命科学分野を広く、深く理解した上で大量の生命情報解析を自在にできる人物。

その習得が困難

生命科学分野やバイオインフォマティクス分野が広範囲であり多様化・高度化が速すぎる

人材養成を目指した教育プログラムが必要

4

本学生命系講義の課題

①基礎から最先端知識までをバランスよく教育したい。
=>現状では、重複箇所がある反面、必要な部分が抜けている。

②広範囲な分野で、全体像と学習箇所の位置づけがつかみ辛く知識が有機的に結びつかない。
=> 学習時間の絶対量が不足

③大学で初めて生物学に触れる学生が多く、学力差。
=> 100人規模の教室では、教育効果が上がらない。

授業を補う、効果的な自習の支援が必要

e ラーニングによる繰り返し自己学習が効果的
生命情報自体の特性と、バイオインフォマイクスの特性は
e ラーイニングと相性よし。

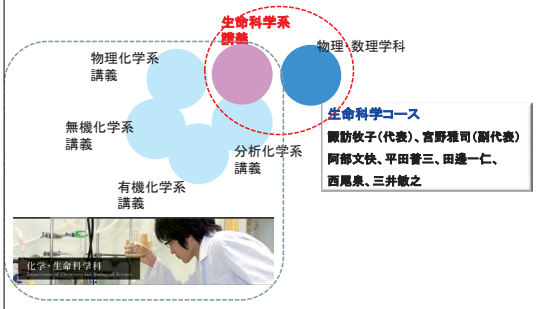
5

課題1）　生命科学系講義とバイオインフォマティクス融合型教育カリキュラムの策定

課題2）バイオインフォマティクスと融合した、生命科学教育支援教材の開発
a）教育コンテンツの作製
b）e-ラーニング教材の構築

6

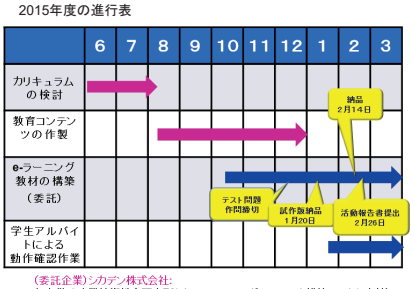
プロジェクトチーム



7

プロジェクト期間　2014年度、2015年度

2015年度の進行表



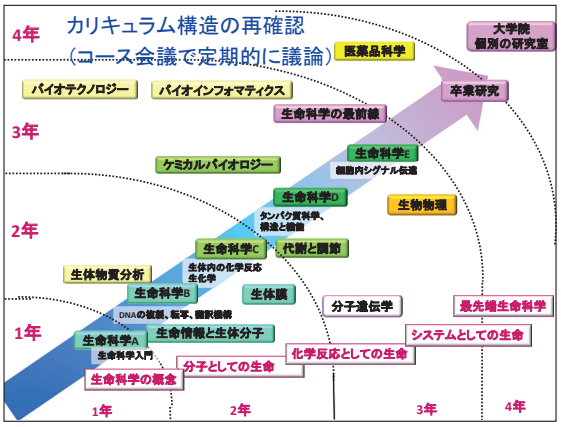
（委託企業）シカデン株式会社:
各大学や産業技術総合研究所などでe-ラーニングシステムを構築してきた実績）

8

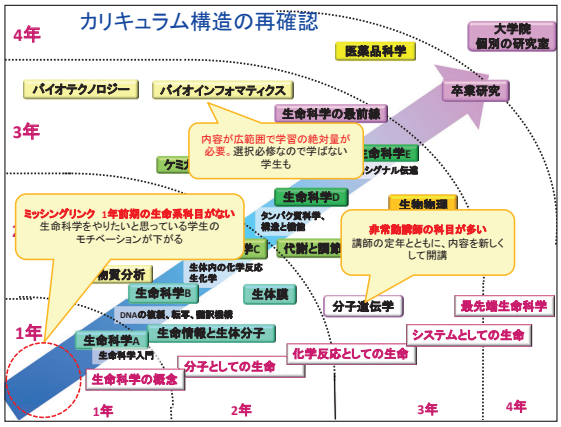
課題1

生命科学系講義とバイオインフォマティクス融合型教育カリキュラムの策定

9



10



11

課題　2）バイオインフォマティクスと融合した生命科学教育支援教材の開発

12

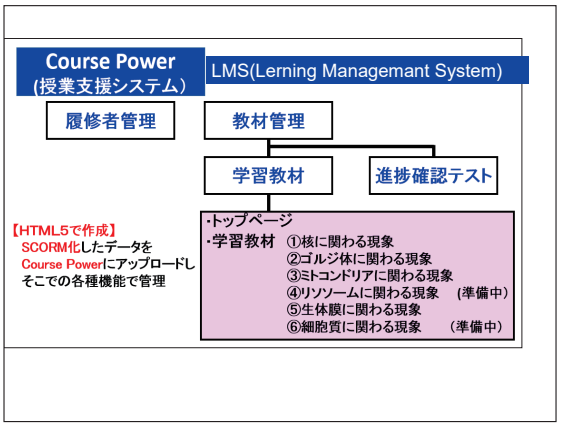
昨年度からの変更点

Leaning Management System（LMS)の変更

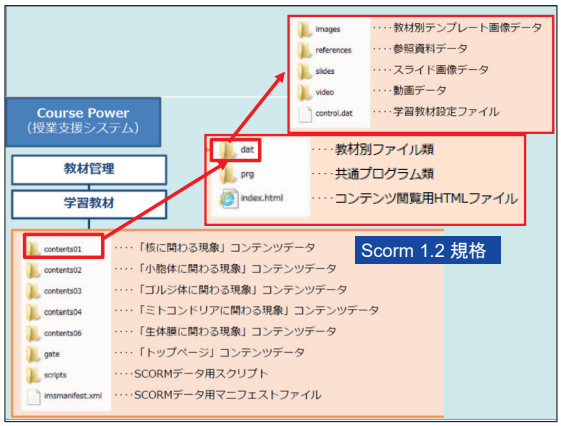
2014年度 moodle → 2015年度 Course Power

オープンソース	F社製　本学の講義管理で使用
教員のサーバーで管理	大学のサーバーで管理
セキュリティ管理が不安	セキュリティ管理は完璧
学習の評価部分は新たに作りこむ必要あり。	既存のテンプレートを利用できる。
変更する場合ソースコードの深い理解が必要。企業に委託する必要性	変更する場合、情報メディアセンターの支援があるはず。
教員のみによる変更が困難	教員側からの変更が可能。

13



14



15

a) 教育コンテンツの作製

Garland Sciens 社
訳本　南江堂

生命科学系の講義では、共通した教科書(Essential Cell Biology (c) Garland Science)を使っている。

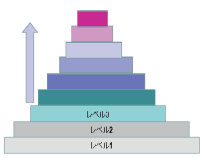
コンテンツは、この本を購入した場合のみに利用できるイラストとビデオを含んでいるため、 教科書購入者のみに、ログイン権限を与える。

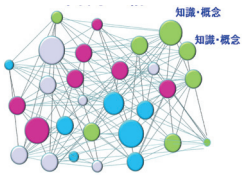
www.classwirecom/garlandscience
に利用目的を連絡。

16

分野の構造特徴

物理、数学など　　生命科学





内容をレベルごとに切り分けるのは難しい。
トピックごとに分けたとしても、各々が、
初歩レベルから大学院レベルまでつながっている。

積み上げ型学習よりも。コンテンツ間の相互リンク型学習にした。

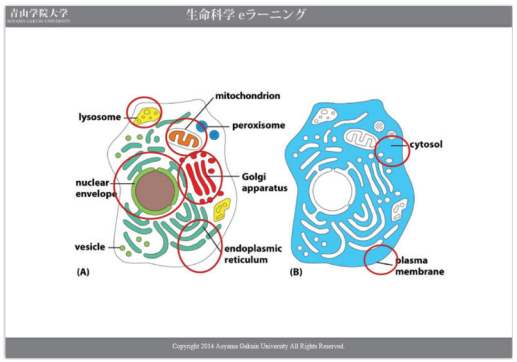
17

a) 教育コンテンツの作製

スライド　231枚

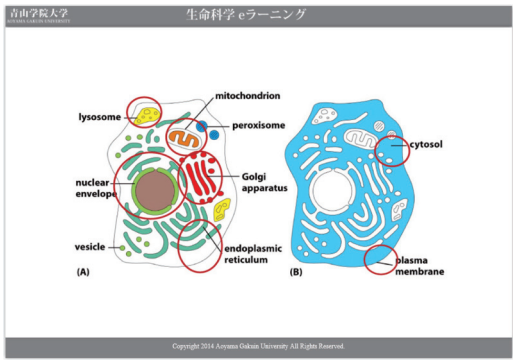
ビデオ　　20枚

18



19

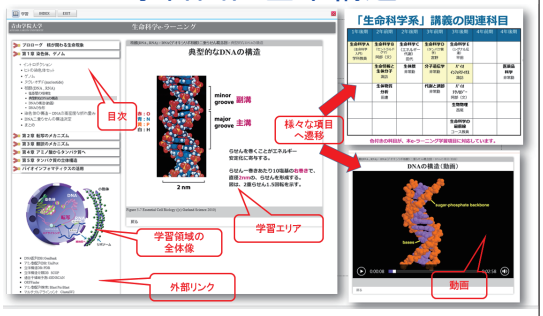
20



21

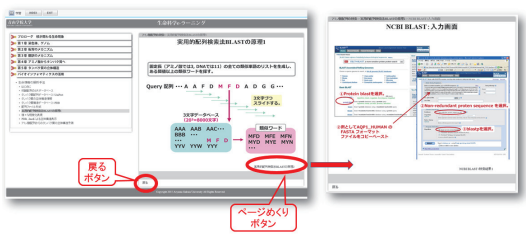
22

学習画面基本構造



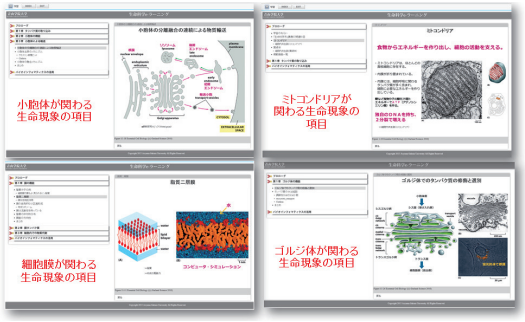
23

バイオインフォマティクスの活用



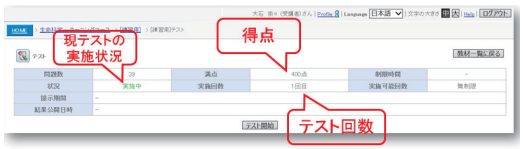
24

他の項目の講義も追加



25

確認テスト

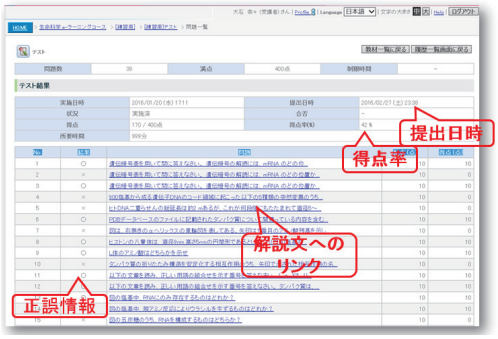


26

確認テスト　問題例

27

確認テスト結果確認



28

e-ラーニングシステムの評価

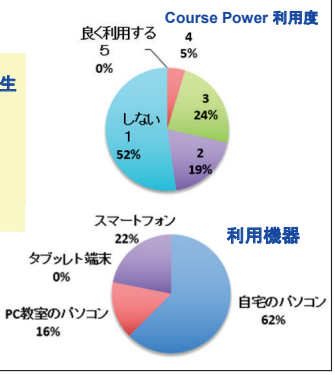
29

解答者情報

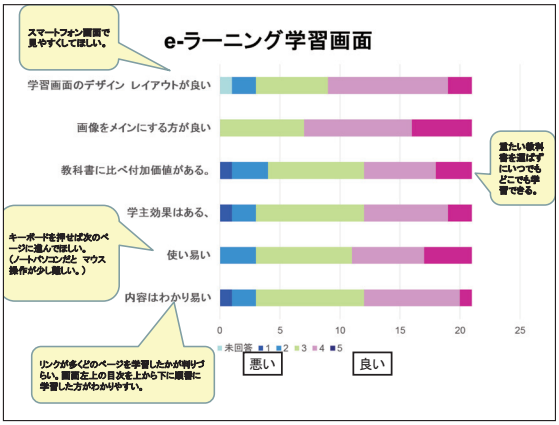
参加教員の研究室の学生

学部4年	14
修士1年	4
修士2年	2
博士後期	2

計21人

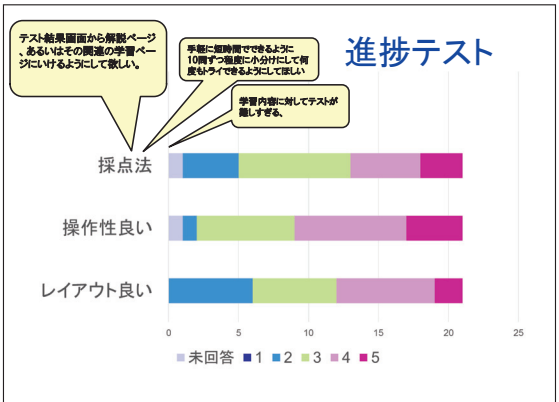


30



31

進捗テスト



32

改善提案コメント

◆もう少し他の教科書を参考に（essentialを読めばすむように感じる）『面白い』部分も加えて欲しい。教科書と差別化しニュースなどの話を入れて欲しい。コラムなどで遺伝子治療薬に軽くふれるなど）

◆長すぎて、あきてしまう感覚があった。各章を短くしたり、記入型のテストを用いるなどの工夫をした方が集中できる

◆授業と関連付けられれば基礎知識は定着する。ただ生物を1から勉強する人にとっては難しすぎる。

◆生命科学の所学者や、久しぶりに勉強する人に効果があると思う。初学者にとってはアミノ酸、細胞小器官の名前や役割など覚える必要があるので　その場で暗記ができる学習があれば良い。

◆生命系の先生方全ての講義を包括したり研究の紹介なども入れて欲しい。

33

まとめ

課題 1）生命科学系講義とバイオインフォマティクス融合型教育カリキュラムの策定

現行の生命科学系講義の体系を再確認し、必要な部分のカリキュラム変更を行った。

課題2—a) 教育コンテンツの作製

120枚程度の教育コンテンツを新たに追加し、総計231枚のスライドコンテンツと20枚のビデオコンテンツとなった。これらのキーワード・項目等のリンクを張った。

課題2—b) e-Leaning教材の構築

- **オープンソースのmoodleから本学で導入中のCourse Power向けに再構築。**
  ＝＞結果教員各自が随時更新することを容易にし、学生の進捗度合も明示・評価できるようになった。
- **細胞内の各小器官に関する学習内容を追加した。**
- **学生アルバイトによる本システムの評価から、まだ多くの改善点が残されていることが判った。**

34

【外部評価委員会全体会　最終講評結果コメント】

生命科学系講義とバイオインフォマティクス融合型教育カリキュラムについて、科目間の相互関係を見直しながら、新たなトピックの関連付けを容易にしている点は高く評価できる。e-ラーニングシステムで用いる新たな教育コンテンツを作成し、教材も構築して昨年度の反省や学生の意見を生かしていることも評価できる。学生による動作確認も計画的に実施されており、本プロジェクトはほぼ完了した。これからの授業での活用を期待したい。

35

今後

★学生側からの改善指摘を取捨選択。テクニカルに改善できるものであれば内容をブラッシュアップする。
★生命科学コースで、e-ラーニングのカリキュラム作り運用、更新体制作りの議論を継続する。

今後も、e-ラーニングPJは継続する！（一番伝えたいメッセージ）
ただ、2016年度は予算申請していない。
◆講義の道具としてはほぼ完成したので、後は教員側の運用の問題になるので。
◆内容の修正等は教員側でも可能になった。もし技術的困難が生じればメディアセンターにご相談できるはずと踏んでいるので。
◆来年度の次期教育研究系システムのリプレース案が、まだ不透明。
今年、業者に委託して作りこんで良いものか悩ましいので。

7. 学生意識調査

2010年度より学生の学習に対する期待や姿勢、大学における成長感等に関する調査を全学的に実施している。

【実施概要】

○　実施目的

１年生（４月実施）

（学生にとって）　学生生活の目標設定・学びと進路のつながりを意識するきっかけとする

（大学にとって）　新入生の現状把握。PDCAサイクルの起点のデータとする

２年生（４月実施）

（学生にとって）　学生生活の振り返りをもとに、２年次以降の目標の再設定をするきっかけとする

（大学にとって）　１年間の学生生活の満足度・成長感を把握し、教育改善につなげる

３年生（４月実施）

（学生にとって）　就職活動のための自己分析のツール。結果を元に自己PRと志望動機の作成をする

（大学にとって）　学生の満足度・成長感を把握し、教育改善につなげる

４年生（３月実施）

（大学にとって）　４年間で学生が身につけた力・モチベーションの変化の把握、満足度・成長感を把握し、入学～４年間の総括データとする

○　実施概要

［実施方法］

１～３年生は４月、４年生は後期（12月～３月）に実施する。

マークシート方式のアンケート調査で、設問内容は学年によって異なり、1年生は「学修成果」の調査と「学業及び学生生活に関するアンケート」、2・3年生は「基礎学力調査」と「学業及び学生生活に関するアンケート」を実施している。所要時間は約90分。

4年生は「学業及び学生生活における満足度調査」に関するアンケートで、所要時間は約30分。4年生についてはWEBアンケート調査も実施している。

［実施結果］

アンケート委託業者による回答の集計と分析をおこない、各学生（1～3年生）へフィードバックする。その際、前年以前に受検している場合は経年の変化も掲載する。

［集計結果のフィードバック］

１～3年生については､各自へ回答結果と分析結果をまとめた「集計結果シート」を用いた外部講師によるフォローアップ講座（進路指導）を実施している。

また、全実施結果および分析結果を学部教授会にて報告、学部運営の参考としているほか、全教職員対象の報告会を開催し、学院関係者で情報を共有している。

○　2015 年度　学生意識調査の実施状況

1年生

学部	学生数(2015/5/1)	受検者数	受検率
文学部	822	783	95.3%
教育人間科学部	332	329	99.1%
経済学部	555	522	94.1%
法学部	503	484	96.2%
経営学部	537	516	96.1%
理工学部	632	620	98.1%
国際政治経済学部	296	291	98.3%
総合文化政策学部	269	249	92.6%
社会情報学部	225	219	97.3%
地球社会共生学部	225	225	100.0%
合計	4,396	4,238	96.4%

2年生

学部	学生数(2015/5/1)	受検者数	受検率
文学部	793	562	70.9%
教育人間科学部	355	291	82.0%
経済学部	628	213	33.9%
法学部	531	371	69.9%
経営学部	542	268	49.4%
理工学部	643	389	60.5%
国際政治経済学部	319	187	58.6%
総合文化政策学部	267	197	73.8%
社会情報学部	211	161	76.3%
合計	4,289	2,639	61.5%

3年生

学部	学生数(2015/5/1)	受検者数	受検率
文学部	715	389	54.4%
教育人間科学部	301	222	73.8%
経済学部	482	148	30.7%
法学部	509	226	44.4%
経営学部	511	136	26.6%
理工学部	741	361	48.7%
国際政治経済学部	291	96	33.0%
総合文化政策学部	258	76	29.5%
社会情報学部	243	158	65.0%
総計	4,051	1,812	44.7%

4年生

学部	学生数(2015/12/1)	受検者数	受検率
文学部(※)	901	669	74.3%
教育人間科学部(※)	346	268	77.5%
経済学部	599	423	70.6%
法学部	573	434	75.7%
経営学部	670	478	71.3%
理工学部	669	553	82.7%
国際政治経済学部	361	260	72.0%
総合文化政策学部	333	233	70.0%
社会情報学部	243	168	69.1%
文学部第二部	11	5	45.5%
経済学部第二部	1	0	0.0%
経営学部第二部	2	1	50.0%
合計	4,709	3,492	74.2%

※　文学部心理学科は教育人間科学部に含む。
※　受検率は小数点第2位以下を四捨五入した。

8. ＦＤ講演会

本学でＦＤ講演会は、年間で前期・後期各1回、計2回開催している。

前期はＦＤ委員会においてアンケートを実施し、一番関心の高かった「アクティブラーニングの取り組み」について講演会を行うこととし、関西大学教育推進部准教授森朋子先生を講師として迎え、「アクティブラーニングを成功させるための授業デザイン―学習研究の知見から」をテーマに講演を行った。なお、本講演会は学外関係者にも広報し、多数参加の申し出があり、アクティブラーニングの関心の高さを窺うことができた。

後期は、本学学生に目を向け、授業内における支援を中心に講演会を企画。学生相談センターとの共催により、「学生の抱える課題～本学学生相談センターの視点から～」と題して、学生相談センター所長、副所長よりセンターの現状について、専任カウンセラーによる青山・相模原キャンパス学生相談報告の後、質疑応答、活発な意見交換が行われた。

○　青山学院大学 2015 年度 第 1 回 FD 講演会

日　時　　6月17日（水）14：30 ～ 16：00
場　所　　第19会議室（青山キャンパス　総研ビル11階）
司会進行　　全学FD委員会　副委員長　杉谷　祐美子　教授

1．開会祈祷

大学宗教部長　伊藤　悟　教授

2．開会挨拶

全学FD委員会委員長
副学長　長谷川　信　教授

3．講演

「アクティブ ラーニングを成功させるための授業デザイン―学習研究の知見から」

講師　　森　朋子先生（関西大学　教育推進部准教授）

4．質疑応答と意見交換

5．閉会挨拶

全学FD委員会委員長
副学長　長谷川　信　教授

以上

1

アクティブラーニングを成功させるための授業デザイン
ー学習研究の知見からー

関西大学
森　朋子
morit@kansai-u.ac.jp
（アドレス変更になりました！）

2

報告の流れ

- 自己紹介
- 学習研究の視点
- アクティブラーニング
- 深い学習を促す授業デザイン
- はじめませんか？
- まとめ

3

自己紹介

● 学習研究，学習理論
実践的教育学，教育方法学

認知科学，心理学，社会学の調査手法
- 定量的アプローチ（学生調査，成績分析など）
- 定性的アプローチ（記述分析，観察，インタビュー調査など）

いずれも現場での「実践知」が対象！

「わかる」プロセスの解明 ― 基礎研究

「教える」の場面を作る
「学ぶ」の場面を作る ― 応用研究

デザイン実験
1. データにより現場の課題を発見
2. 学習理論を用いて教育・学習をデザイン
3. 効果を調査
4. 改善点を発見
5. デザインを改善
6. 効果を調査…

4

学習研究の視点

5

21世紀に必要な学びとは

●産業社会以降（行動主義）
・科学的な知識を正確に把握（更新の必要なし）
・ 与えられた問題・課題を効率よく解く
・解のある問題解決：目標に向けて学習段階を設計することが可能

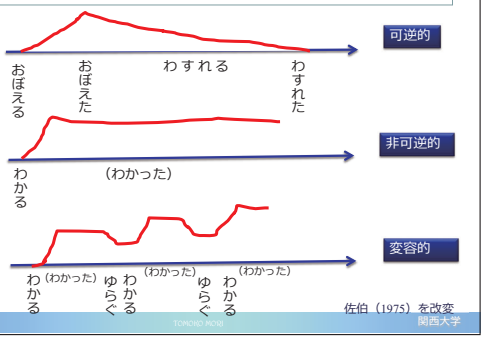
●知識基盤社会（社会的構成主義）
・何が課題か自ら設定し，存在しない知識を他者と共に創造する
・課題を達成したら，次の課題を見出し、前進していく
（必要に応じて知識の更新・創造。知識創造パートナーとしての他者）
・解の見えない問題解決：協調知識創造型での授業設計

Portable（可搬性）でDependable（信頼性が高い），そしてSustainable（持続可能）な知識を！(三宅 2006)

第19回大学教育研究フォーラム　益川(2013)を一部改編

6

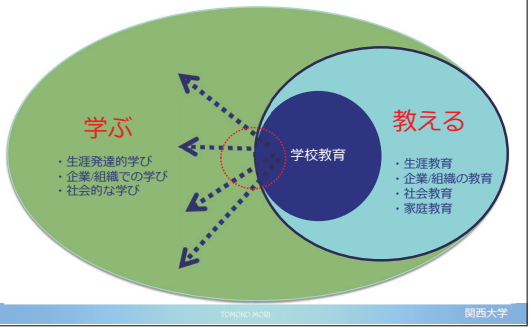
「よい学習」の変移



佐伯（1975）を改変

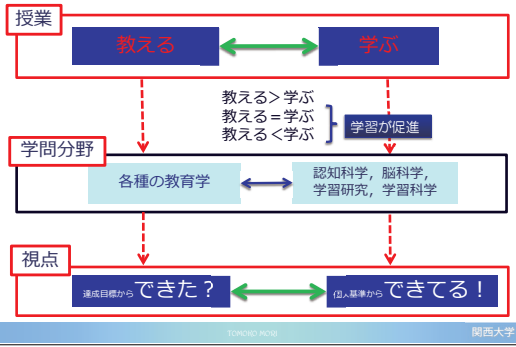
7

「教える」と「学ぶ」の関係



8

学習研究の立ち位置１



9

学習研究の立ち位置２

実践的教育学

教授研究 ⇔ 学習研究

「教える」ことに主眼　「学ぶ」ことに主眼

教育方法学，教育社会学，教育心理学，学校社会学，学習科学，認知科学，環境デザイン学

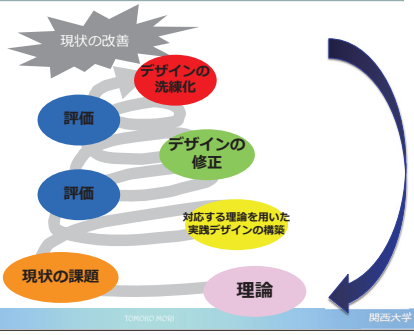
1. 基盤となる理論がある
2. 現実の教育現場での課題を対象
3. 現実の教育現場をフィールドにしている
4. 調査方法，分析方法を試行錯誤している
5. 評価方法を試行錯誤している
6. 実践現場の改善を目的としている

実践 ⇔ 理論

理論と実践の往還

10

調査の方法（デザイン実験）



11

FDと学習研究

もしも…FDの最終的な目的＝教育改善→学生の学びの質向上

FDの目的＝教員が変わる⇒学びの質向上

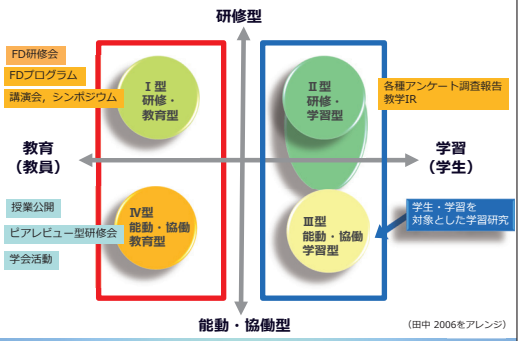
教員のコミュニティ対象　間接的関与

FDの目的＝学びの質向上⇒教員が変わる

学生の学び対象　直接的関与

12

大学改革の中の位置づけ



（田中 2006をアレンジ）

13

反転学習プロジェクト

個別の授業研究（シングルケース）を同じ調査枠組みで調査・分析し，その中からメタ理論を構築（関西大学，京都大学，東京大学）

2014年より複数大学の学習研究者，実践者が協働でプロジェクト

メタ理論

関西大学　山梨大学　島根大学　大阪工業大学　大阪大学　大阪府立大学　北九州市立大学

東京大学情報学環・反転学習社会連携講座HPより

関西大学「21世紀を生き抜く行動人Lifelong Active Learningの育成」HPより

14

学習研究とは

- 分野は問いません
- 学習理論を基盤とする授業デザイン
- 結果を複数のデータで評価すること
- その課題を次の授業デザインに活かすこと
- 洗練化するまでそのサイクルを回すこと

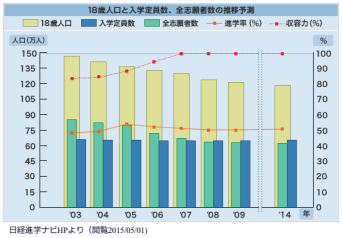
→すべての授業担当者を学習研究者に！

15

アクティブラーニング

16

大学に全入時代がやってきた



日経進学ナビHPより（閲覧2015/05/01）

大学が「選抜」する時代から，進学希望者が「相互選択」する時代へ

↓

以下の内容を喪失

①「高校教育の質保証」（大学合格を動機づけとした学習効果）

②「大学の入口管理機能」（大学合格が基礎学力の証明となる）

③大学進学希望者は一定の基礎学力を有する

17

大学教育改革の流れ

●ラーニングアウトカムの重視
- ✓教育から学習への転換
- ✓教育方法の見直し→アクティブラーニング

●個人から組織へ
- ✓「課程」という考え方の強化
- ✓共通プログラム　→FD（ファカルティ・ディベロップメント）

●エビデンスベースの教育改革
- ✓内部質保証システムの構築
  →IR(インスティテューショナル・リサーチ)

18

学生の思考はアクティブ？

●教師だけ一番アクティブ
●教師の顔色をうかがう「振り返り」
●フリーライダーが出るグループワーク
●構造化しすぎるグループワーク
●講義では学生の思考が
アクティブにならないとの思いこみ

やる気度合いで学びが二極化・学習の格差
→これでも講義よりマシ？
教員の授業力に依存
→FDって言われてもなぁ…

19

アクティブラーニングの定義

一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表する等の活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。（溝上 2014）

アクティブラーニングの例
- ✓ 講義：ミニッツペーパー，大福帳，レスポンスアナライザー
- ✓ プロジェクト型学習：サービスラーニング，プロジェクト学習，課題解決型学習，協同・協調学習
- ✓ 知識構築型：ディベート，リーディング・アサインメント，ジグソー法

20

アクティブラーニングの目的

1．仲間作り型
- 大学内での共同体の構築
- 大学と社会の連携
- 初年次教育に多く導入

2．能力育成型
- 共同体の構築の中でコンピテンシー育成
- 問題解決型
- 知識を活用
- 教養教育，専門教育の双方で展開

3．深い学習型
- 他者を活用する
- 知識定着型
- 専門教育の基礎に導入

21

深い学習を促す授業デザイン

22

（森的）学習が促進する条件

1. いろいろな他者によって解答に
   バリエーションがある（吟味）
2. 自らの理解と他者の理解の間に
   葛藤や躊躇がある（理解の深化）
3. 同レベル他者の発言を鵜呑みにしないことを利用
   （批判的思考力）
4. 自らの活動を振り返る（メタ認知）
5. 学習に一定の時間をかける（学習時間の確保）
6. 解決すべき課題がある（学習への動機づけ）

三宅(1997)，Brown(2000)，Wiggins&Mc Tighe(2005), Sauyer(2006)など学習/学習化学系の知見とフィールドワークでの実感を私見としてまとめたもの

23

授業デザインのコツ

- 「わかったつもり」をどのように作るか
- 「わかったつもり」を「わかった」にどのように導くか

→ 内化と外化の連動

アクティブラーニングは，外化が重要ですが，
もっと重要なのは，内化の質です

24

内化と外化

●学習サイクルの６つのステップ
（エングストローム 1994：松下2015より）

動機づけ→方向づけ→内化→外化→批評→コントロール

必要な知識を獲得する
その知識を実際に適応してコンフリクトの解決を試みる

●内化と外化の関係は一方通行？往還？
内化⇔外化

25

内化と外化のバリエーション

- ●大学レベル
  学士課程→授業外学習
- ●カリキュラム・レベル
  基礎科目→ゼミ，卒業研究
- ●科目レベル
  講義→演習，実習
- ●内化の中にこそ…
  「教える」⇔「学ぶ」
  内化⇔外化

●これらはすべて一方通行
●スパンが長い
●学生の理解の度合いを測れない
●構造は？

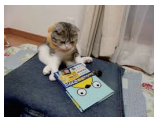
26

内化と外化の作り方例

内化の作り方	外化の作り方
●「学ぶ」	●教員へ外化
✓ 文献を読む	✓ ミニッツペーパー，
✓ 演習問題をやってくる	✓ レスポンスアナライザー
✓ 調べてくる	✓ レポート
	✓ テスト
●教える	
✓ 講義	●ピアへの外化
✓ eラーニング	✓ グループワーク
✓ 講義動画	✓ プレゼンテーション

27

リーディングアサインメント



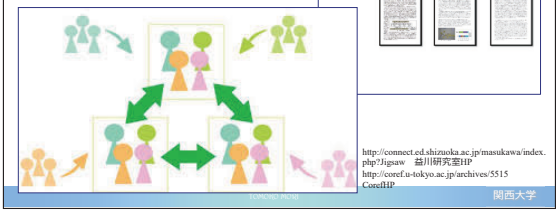
授業を受講するにあたって事前に読んでおくことが必須の各種参考資料および方法

写真：NHK
「ハーバード白熱教室」マイケル・サンデル教授が問いかけていること

28

ジグソー法

ジグソー法は，あるテーマについて複数の視点で書かれた資料をグループに分かれて読み，自分なりに説明を作って交換し，交換した知識を統合してテーマ全体の理解を構築する協調的な学習方法の一つ。(CorefHPより抜粋)



http://connect.ed.shizuoka.ac.jp/masukawa/index.php?Jigsaw 益川研究室HP
http://coref.u-tokyo.ac.jp/archives/5515 CorefHP

29

反転授業

JMOOC(一般社団法人日本オープンオンライン教育推進協議)にも，関西大学は講座を提供しています。

これまでの講義の良さとアクティブラーニングの効果を融合した最新の教育方法。
事前に動画化された講義を視聴し，知識を獲得。その上でグループワーク等のアクティブラーニングにおいて知識を定着，活用する。（FLIT HPより）

アクティブラーニングの「学び」っぱなしに「教える」を組み込む

30

反転授業のデザイン

- ●知識定着型
  クラス全員がある一定の知識・スキルを習得することを目的とする。
  特徴：従来の評価方法もOK
- ●能力育成型
  事前学習で学習した内容を用いて，さらに発展的な課題に取り組むことを目的とする。
  特徴：授業そのものの目的が変更
- ●その他…

31

知識定着型

授業名：基礎水理学
対象：1年生後期
授業区分：専門教育（基礎）
成績評価：3回のテスト

受講者数：66名（登録）
TA配置：1名
動画：昨年度のPPT教材を改良
毎回の予習時間：2.09h程度（平均）

教育活動	教育デザイン	学習活動と意義
事前学習１	●講義動画視聴（15分程度）	「教える」ことによる基盤となる知識のインプット
事前学習２	●該当箇所のノート作成	自らの知識の構築
事前学習３	●演習問題への取り組み	知識の確認
対面授業（4人1組の協調活動）	●演習の続き	他者、知識葛藤・醸醸、バリエーション、吟味
	●教員による個別チェック	
	●演習の解答説明/講義	吟味、知識の再構築

32

・教員と学生の豊富なコミュニケーション
・学生同士の豊富なコミュニケーション
・「考える時間」の確保
・授業最後の「教える」への渇望
・転移デザイン

学生の声
・他の授業より良い
・動画を何度も見た
・ノート作成がしんどい
・グループ学習がダレる
（授業後のインタビューより）

授業の風景 2013.12

33

能力育成型

授業名：ヒューマン・コンピューター・インタラクション
対象：1～3年生後期
授業区分：専門教育
受講者数：88名（登録）
成績評価：プロジェクト成果＋期末テスト

TA配置：なし
動画：昨年度のPPT教材を改良
毎回の予習時間：1.2h程度（平均）

教育活動	教育デザイン	学習状況
1～4回	●講義（資料をアップ）	主体性
5～7回	●プロジェクト1　アプリ作成（発表）	他者、知識葛藤・躊躇、バリエーション（吟味？）、楽しみ
8～12回	●講義（資料をアップ）	主体性
13～15回	●プロジェクト2　アプリ作成（発表）	他者、知識葛藤・躊躇、バリエーション（吟味？）、楽しみ
16回	●期末試験	

TOMOKO MORI　関西大学

34

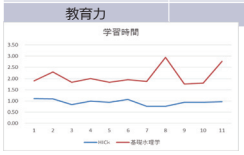
・プロジェクトの円滑な運用
・コースデザインのメリハリ
・創造性を発揮する場
・学習活動の盛り上がり
・教師力が必須

TOMOKO MORI　授業の風景 2013.12

35

結果のまとめ

	完全習得学習型	高次能力学習型
学習時間の確保	◎	○
デザインの転移性	◎	△
対面授業の活性度	◎	○
学生格差	小	大
学生の自主性	△	◎
単位取得度	難	普通
教育力	小	大



TOMOKO MORI　関西大学

36

はじめませんか？

TOMOKO MORI　関西大学

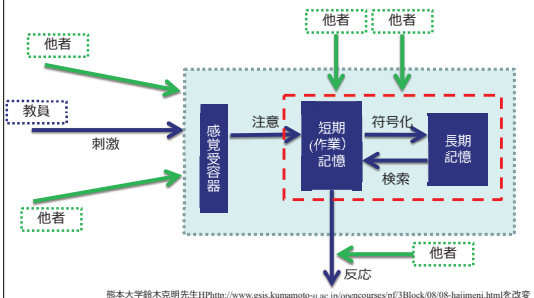
37

①前回の内容とつなげる

✓ 前の時間に何を学んだのか，配布資料やノートを見返す
✓ 隣同士で説明しあう
✓ 教員が講義する

TOMOKO MORI　関西大学

38



熊本大学鈴木克明先生HPhttp://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/opencourses/pf/3Block/08/08-hajimeni.html を改変

TOMOKO MORI　関西大学

39

②個人の学びに落とし込む

✓ 個人で考えた後にグループ内で共有する
✓ グループで議論したことを個人で整理する
✓ 「教える」も道具に

TOMOKO MORI　関西大学

40

グループ学習解釈の違い

●収束モデル（Rochelle Model）

コミュニケーションを取るという行為には合意の形が求められる。合意を形成する上での理解の中では自ずと知識の抽象化・概念化が行われる。

●多様性による統合モデル（Miyake Model ）

協調学習者同士が解決しようとする問題は同じであるが、その過程において一人一人が理解することは異なった物になる。

TOMOKO MORI　関西大学

41

グループ学習の3類型

類型	効果	還元先	総括的評価対象	解釈モデル	教員の介入
仲間づくり型	プロセス重視	集団	集団	収束	大
能力育成型	アプトプット重視	集団・個人	集団	収束	中
深い学習型	プロセス，アウトプット	個人	個人	統合	小

TOMOKO INOUE 関西大学

42

③内化ー外化ー内化

- ✓ 考えたあとでの「教える」は有効
- ✓ 外化ー内化を成功させるために，小さく内化
- ✓ 外化から内化へ

TOMOKO INOUE 関西大学

43

まとめ

- 内化こそその質が重要
- 内化こそ「教える」と「学ぶ」を入れ子に
- 個人の学びに落とし込む
- いつ教えるか，を考える
- カリキュラムで学びを考える
- （アクションリサーチの重要性）

TOMOKO INOUE 関西大学

○　2015 年度 第 2 回 FD 講演会

日　時　　12月16日（水）15：00 ～ 16：15
場　所　　第13会議室（相模原：B738会議室　TV会議）
司会進行　　全学FD委員会　副委員長　杉谷　祐美子　教授

1．開会祈祷

大学宗教主任　塩谷　直也　教授

2．開会挨拶

全学FD委員会副委員長
杉谷　　祐美子　教授

3．講演

「　学生の抱える課題　～本学学生相談センターの視点から～　」

①学生相談センターの現状について

学生相談センター所長
教育人間科学部　北村　文昭　教授

学生相談センター副所長
社会情報学部　稲積　宏誠　教授

②青山キャンパスにおける学生相談の報告

青山キャンパス学生相談センター
専任カウンセラー　葛生　　聡

③相模原キャンパスにおける学生相談の報告

相模原キャンパス学生相談センター
専任カウンセラー　正田　節子

4．質疑応答と意見交換

5．閉会挨拶

全学FD委員会委員長
副学長　篠原　　進　教授

以上

主催：全学ＦＤ委員会　　共催：学生相談センター

2015 年度第 2 回 FD 講演会「学生の抱える課題」～本学学生相談センターの視点から～要約
日時：2015 年 12 月 16 日（水）15 時～16 時
場所：第 13 会議室（相模原 B738 会議室）
共催：学生相談センター

まず塩谷直也大学宗教主任から開会祈祷があり、続いて杉谷祐美子全学 FD 委員会委員長より開会の挨拶があった。プログラムにおいては、まず「学生相談センターの現状」について、北村文昭学生相談センター所長、稲積宏誠同副所長より紹介があり、それらに引き続き、「学生相談センターの報告」について、葛生聡青山キャンパス学生相談センター専任カウンセラー、正田節子相模原キャンパス同専任カウンセラーより報告があった。終わりに、杉谷祐美子全学 FD 委員会委員長の司会進行により質疑応答の時間が設けられた。

開会祈祷で塩谷先生は、詩篇 133 編の 1 節「見よ、兄弟がともに座っている。なんという恵み。なんという喜び」を引用され「外部評価やランク付けに振り回される教職員や学生たちを守ってください。当たり前の何気ない営みが当たり前でないことに気付かせてください」と人々のプレゼンスや日々の地道な努力の尊さ、ありがたみに気づくよう導いた。

開会のあいさつにおいて、今回の企画のねらいについて杉谷副委員長は、下記のように説明をした。「今回は本学により密接に関わるような課題を取り上げたいということで、学内者の方々に限定して、教育の対象でもあり、学習の主体でもある学生、とりわけ本学の学生の実態に焦点を当てるということで、こちらのテーマにいたしました。」。「恐らく先生方どなたも、あるいは職員の方々も、例えば授業に欠席しがちな学生ですとか、あるいは課題提出や単位取得など、就学に困難が見られるような学生をこれまでご覧になってこられたかと思います。それが高じて、いつしか授業や大学自体に足が遠のいてしまうといったご経験も先生方はお持ちではないでしょうか。そうした学生の背後にある事情について、今回は理解を深めていきたいというのがねらいです。」

プラグラムに入り、学生相談センターにかかわる教員の立場から、まず北村所長は、塩谷先生の開会祈祷、杉谷先生の開会挨拶に呼応するかのように下記のように話し、次の稲積副所長につなげた。「存在すること、まずいることということと、それから大学がある種のパフォーマンスを求める、つまり人が存在しているということと、人がなすことということがうまく調和がとれるというのでしょうか。そういうことがまず大学全体にとって必要なことだと思います。」「居場所があったり、授業に出席ができたり、そういういるということ、プレゼンスなのかもしれませんが、そういう事柄が残念ながら、従来の大学というのは暗黙の前提」。「相当に人によって揺らぐ、価値付けというか、意味付けが変わっていく、そういう時代に私たち青山学院が何ができるのかということを、ここでやはり例えば FD という名を借りて、今日は皆さまと話を深めていきたい。」

同じく教員の立場から稲積副所長は、学生を社会に送りだしたものの内心とても悩んだ例を紹介しつつ、次のように話し、カウンセラーにつなげた。「ひと昔前だったら怒鳴り散ら

して、頑張れよとか、何をやってんだと言えたのが、今は何となくそのような言葉をはくことすら躊躇され、どのように叱咤激励していいのか悩んでみたりということもあります。分からないことだらけの状況になってきて、教員も職員も、だからといってはれものに触るような対応をしていてもしようがないわけで、さてどうするか明快な回答を専任カウンセラーから聞きたいなと思ってはみたものの、悩ましい話なので、結論が出るかどうかは分かりません。」

葛生カウンセラーは、学生相談センターの存在や役割をしってもらいたい思いからまず、毎年発行する年報を引用しつつ、学生相談センターの活動を紹介した。さらに今後解決できたら良いだろうと現在感じている学生相談の抱えるジレンマについて、障害学生支援を例に、以下のように投げかけた。

＜障害者差別解消法の施行で２０１６年４月から大学に求められる対応＞

１）障害者差別解消法

- 障害者への差別的取り扱いの禁止　⇒法的義務
- 合理的配慮の不提供の禁止　⇒国・地方公共団体に対しては法的義務
  民間事業者に関しては努力義務

※　施行後、３年後に見直しあり。

２）教職員対応要領の作成と公開

- 国立大学協会のひな形に従う
  http://www.janu.jp/news/whatsnew/20151113-wnew-skaisyou.html
- 私立大学は文部科学省の対応指針に従う
  https://www.jfd.or.jp/info/2015/sabekai/09-mext-shishin.pdf
- 事例的なものは学生支援機構がまとめている
  http://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/jirei/index.html

※　障害を抱えて悩む学生をはじめとするすべての学生にとって安心して学校生活を送ることができるための体制整備が国から求められている。具体的には、修学支援その他の学生生活上の相談を受ける窓口を設置し、コーディネートできる専門スタッフを配備し、合理的支援の必要の可否判断を責任もって担う委員会を設置し、ノートテイクなどの必要な支援を実際に行ったり、学生や教職員向けに理解を深める広報を行ったりするなど。

＜もし本学が本格的に取り組むとしたら、その体制整備のために必要となる要素＞

①　新規則制定（又は既存の規則の適用）：障害差別解消法及びその法律に関する文部科学省の指針及び雛形、本学の教育方針、これらに基づいて制定

②　「合理的配慮」であるかを判断する決定機関の設置（学長・副学長が最終責任者）

③　専門部署（わかりやすい窓口）の設置：窓口をいずれに置くにしても、学生生活部、学務部をはじめとする関係部署が互いに力を合わせる必要がある。
④　専門部署へコーディネーターやスタッフの配置（他大学の例：言語聴覚士、臨床心理士・特別教育支援士、事務職員で組織）
⑤　診断書のルール：診断書を支援の必須条件とするか否か。
⑥　ボランティアセンターとの連携（ボランティアの募集、養成、手配）。
⑦　学生相談センターとの連携（診断書が無いなどの理由で、障がい学生支援の専門部署で支援を受けることができないがなんらかの支援が必要な学生をこちらでフォローするなど、ニッチな部分を埋める役割が求められるだろう）

※国が求めている理念に基づいて、私学が実際に体制を作るとなると、それ相応のコストや覚悟が必要となる。私学ゆえに、大学の教育方針によって方向性が異なってくる。理念と実際のずれにジレンマを感じ悩んでいる私学が多いのが実態なのではないか。どのような立ち位置が本学らしいかが、今本学は問われている。現状では現場の個々の対応にまかされているため、日々悩ましい。

葛生カウンセラーは、上記のように障がい学生支援に関して本学が抱える課題を例に挙げ、さらに下記の通り、時代と共に変化しうる教育の孕む難しさをフロアーと共有しようとした。

「ある私立大学では、３年間どのような学生も受け入れる方針で、スタッフも充実させて取り組みました。それでも就学が続かない人もいたそうです。結果として６倍の手をかけたものの、効果が十分とはいえず、どのような学生でも受け入れるのは３年でとりやめました。能力的に難しい学生や、不本意だが家族にすすめられてきた学生を受け入れるには、それだけの覚悟と準備が必要です。効果が出にくい空しさにも直面するかもしれません。大学に入学して良かった、将来の見通しが立って良かったとすべての入学者に思ってもらえるのが理想です。しかし素質と環境をどう考えるかは、大学の問題。どうあるのが本学らしいか。すべての学生が脱落しないように、底なしの支援にしてしまってよいのか。例えばこちらから手を差し伸べるのが本学の学生支援の適切な在り方か。それとも大人としての技能を身に付けるには本人の努力も必要と考えるか。この人は障がいがある、この人は障がいはない、と面接やテストでラインを決めるのも難しいことです。基準があるようなないような、時代によってもかわりうるもの。教育の基本から“ずれないように”言動を選び取る。だから、学生相談は難しいです。」。

正田カウンセラーは、教職員の方々に学生相談センターを利用していただくための一つの手立てとして作成した「教職員向けリーフレット」をまず紹介した（資料１）。

＜資料１＞教職員向けリーフレット

I

少し様子が気になるのだけれど、、、
という学生がいましたら学生相談センター
という場で相談できることも
ご紹介いただければと思います

学生一人では行きづらそうな場合には
事前に予約をしていただいたり
お連れいただく形でもけっこうです

また、学生への対応の仕方など
コンサルテーションとして
教職員の皆様に学生相談センターを
ご利用いただくこともできます

教職員の皆様

こんな時って…!?

大学には様々な個性を持った学生が
集まってきます

大学生活に望むもの期待することも一人一人
違っているかもしれません

それぞれの学生が「自分に合った学生生活」を
過ごしていくためには
学生自身の努力と周囲のサポートのバランスが
大切になるのではないでしょうか

青山学院大学
学生相談センター

学生の個性はいろいろですが、一人一人に目を向けた時に

次のようなことはありませんか？

単独行動
人を避けて行動する
ようになった

最近見かけない
理由が不明のまま
最近学校で見かけ
なくなっている

別人のよう
以前と態度や表情が
明らかに違っている
ように見える

体調不良？
常に身体の不調を
訴えるようになった

急に学校へ来なくなった、以前と様子や態度が
著しく変わった、身体的な不調を強く訴えるなどの
場合でも精神的な要因が隠れていることもあり、
医療機関への関与が必要な場合もあります。

話が止まらない
ゼミなどでの発言が
極端に少ない
または
延々と話し続ける

頻繁な遅刻
遅刻や、約束したことを
忘れることが多い

単独行動
友達と関わらず
ほとんど一人で
行動している

過敏な反応
音や臭い、光などに
極端な反応する
ことがある

冗談なのに
会話中のユーモアが
理解できずに真顔で
いたり、怒りだしたり
することがある

落ち着かない
落ち着かない様子が
目立ったり、授業中
教室を何度も出入り
していることがある

自分の意見は、、、
特定の分野の知識は
豊富であるのに
自分自身の感想や
意見については言え
ないことがある

このような傾向が顕著に見られる場合「発達障害」による支障が
生じている場合も考えられます。
その場合、通常の対応や励ましだけでは良い方向への解決が
難しいこともあります。

相模原は理系の学生が多いキャンパスです。
・最近の学生は人間関係の持ち方があまり得意でない傾向にあること
・実験など、グループでの作業がほぼ必須になっていること
・数学が必須であるが数学で躓く学生が増えていること
などに加えて、教員を含める同じメンバーと研究室という同じ空間で一日の大半を過ごすことになる状況が、問題を顕著なものにしていくことがあることに触れつつ、その際の共通理解や連携の大切さについて以下のように述べた。
「相談を受ける時は、その語られることを外に漏らさないということが大前提であることは言うまでもありませんが、起こっていることの内容によっては現実的な対応が必要となるケースがあります。まずは学生さんの語る話を十分に聞いて、学生さんの側でできることには何があるのかを確認していくことから始まりますが、大学としての対応やいろいろな先生方の協力を得ていかないと解決が難しいケースも多いのが実情です。そういう意味では「どこ」「誰」と連携を取っていくことが解決に近づくことになるのかの判断は大切であり、連携の持つ作用が有益となる場合も多いと感じています。」
また、保護者の方からの相談を受けつつ解決の糸口を見出していく難しさについても下記のように紹介があった。
「保護者の方から、子どもが学校へ行かなくなっているのだけれどもというご相談を受けることが大変多くあります。その場合にも『御本人がどういうことで学校へ行きたくないとか、行かないとかおっしゃっていますか？』と伺っても『わからないです』と、『ではご家族から見て何か思い当たるようなことはおありですか？』と伺っても『ありません』とお答えになることが多く、起こっている問題の本質をすぐに捉えることが難しいことがあります。でも、わからないとばかりは言っていられませんので、親はできるはずだと思っていたことの何がどうできなくなっている状況なのか、本人が今できていることは何なのかなどを、保護者の方自身にも状況を再確認または再認識して整理していただくようなつもりで注意深く丁寧に伺うようにしています。その上で、今は休むことが必要なのか、ゆっくりでも進むことが必要なのか、或いは急いで動く必要があるのかなど、その状況の中で必要となるべきことの理由など保護者の方と理解を共有できるようにと考えていきます。また家族であることの心的距離の近さゆえに見えにくくなっていることや、別の角度から考えられる事柄についてをお伝えすることによって、緊張や不安が少し緩み、保護者の方自身が状況をあらためて見直すことができるということもあると思います。そのためにも、先走って指示をしたり、結論めいたことを安易に言ったりしないということにも実は注意を払っています。」

質疑応答では、下記のようないくつかのやりとりがあった。
①司会者：　学生相談センターの来談者数が、横ばいであるが、いろいろ問題を抱えている学生が増えているはずなのになぜだろうか。
Ｉ：　学生相談センターは自主来談を原則としているため、自分で相談にいこうと判断する学生は、逆にいうと、総体的に少なくなっているのではないかという判断です。ですから、

何か問題があるとしても、それを自分で解決するのではなくて、受け身的傾向が増しているために、そういう学生は逆にいうと来談しないということです。
②司会者：　ではどういう学生が自主的に相談に来るのか。
KU:　にっちもさっちもいかなくて、よほど困って来るという印象はあります。ただ、何を相談に行こうと準備して来るというよりも、問題がいくつも重なって不安が一気に高まり、なだれ込むような感じで助けてくださいと、そのような感じが多いのです。
③教員：　目の前の学生にとって、退学や転身といった進路変更が望ましいのではということが見通せた場合、教職員としてどこまで立ち入ったらよいか。大学の方針や自分の立ち位置について。
KI：　葛生氏が紹介をしたような障がい者の解消という合理的な配慮をするということが、青山学院全体、大学全体で合意されないと、一体何が合理的配慮なのかということを説明できないように、そういうことをきちんと明確にしていく時代なのだろうと思う。
④教員：　専門家としての支援上は保護者を巻き込むことが必要そうなのだけれども、本人の同意が得られない場合の工夫があれば教えてほしい。
S:　とにかく丁寧に説明する。それと、親御さんになぜ守秘が必要なのか、なぜ子どもはそれを言ってくれるなと言っているかというところを、本人の言葉ではなく、こちらが丁寧にお伝えをしていくことで、全体の解決を図っていくなどです。
I:　それと、親が本当に一緒に問題解決をしてくれる、チームになれる親なのか、親そのものも問題を抱えている親なのか、この後者のケースが結構多いような印象なのですが、恐らく最初の段階でそれを見極めることも大切になっているのだと思う。
⑤職員:　不本意入学の学生をみていると、高校生の段階で自分のことを自分で決めないと、納得の行く人生が歩めないということを高校の進路指導とか、大学の候補の段階で自分で決めようということを発信していくことの重要さを感じる。大学全体の問題なので、共通の、例えば青スタの中で自分が主体的になって課題に取り組んで、チームで何か解決をするとか、そのような経験をさせることを意識したものが必要かなと思っている。
I:　やる気のない学生のやる気を起こさせるというのは、大学の役目なのでしょうか。不本意入学の学生を本意にさせるということも、大学としてやらねばいけないことなのでしょうかというところの線引きというか、どこまでケアするかというところを考えるというのが本質的な問題として、まずあると思う。

自分で考えて、自分で取り組むということが、最終的に専門教育を進める上でも絶対必要なのだというコンセンサスがそれぞれの学部の中に成立し得るか。つまりいくら頑張って、高度な教育をしようとしても、そこができていなかったら、高度な教育になり得ないのだという意識をファカルティーメンバーが持つかどうか。そうすると、それがカリキュラムの中に組み入れられというようなことになるというか、システムの問題としては、そう行きます。

それからもっと広い意味で、大学としてどこまで責任を持つのかという指針は、これは学部レベルではなくて、大学としてやはり持つということで、その中で相談センターは何を担うのかということを考えるのが、僕たちの、こちらの立場だと、そういった枠組みなのだと

思います。
⑥職員：　交換留学、協定校だと思うのですが、そちらの大学のほうから、今、交換留学を考えている学生が障がいを持っているということで､本学でどういった支援をしていますかという質問が来ております。
S:　障がいという意味では、そういう案件はなかったと思います。留学生（とくに私費留学生）の方のご相談は何件かあります。

最後に、杉谷副委員長はまとめとして以下のように述べた。
「学生支援に対する大学の方針をどう固めていくかというお題と､さらには情報をどう共有し合うかというような、主にその 2 点が浮き上がってきたかと思う。」
さらに、本日の会の結びとして、篠原全学ＦＤ委員会委員長から、以下のように挨拶があった。
「せっかく親御さんからお子さんをお預りしながら､きちんと卒業させて出してあげられないというのは、もう学部以前の問題で一番重要。」「やはり大学全体でどのように取り組めるのか、非常に難しい問題だとは思うのですけれども、ただ一番大事なことなので、いろいろお知恵をお借りしながら、一番いい学生をとにかく支援していくような、恐らく今日、お話があったと思うのですけれども、相談に来る人がむしろ大丈夫なのですけど、来ない人が一番心配なのかなと思います。そういった面も含めて、いろいろ教えていただきたいと思いますので、どうぞこれからもよろしくお願いします。きょうは本当にありがとうございました。」

9. FDEagoプロジェクト

FD活動において、文章やメッセージでの呼びかけだけで、教員に教育の質を向上させるために改善すべき点を認識させ、意識を改革させることは難しく、その効果には限界がある。

そこで、本学のFD活動を推進するためのマスコットキャラクターとして「FDEago」（エフディーゴ）を作成し、2012・2013年度の２年間に期間を限定して、FD活動に関する周知の他、実験的な新しい企画を「FDEagoプロジェクト」として実施することにした。その企画のひとつが「Happyくらす作品コンクール」であり、2014年度以降も実施が続いている。

2015年度は作品テーマを「私を成長させてくれた授業」に改め、装いも新たに募集が行われた。

○　Happy くらす作品コンクール 2015

2015年７月３日

青山学院大学
Happy くらす 作品コンクール　2015
募集要項

青山学院大学
FD 推進委員会

学生のみなさんが青山学院大学でたくさんのことを学び、学生たちの成長を見て教職員も喜びを感じられるような、みんながハッピーになれる学びの場を作っていきたいという思いは、大学に集う全ての人が願っていることだと思います。そんな思いから青山学院大学での授業の思い出について、学生のみなさんに作品の形で表現していただいて、他の学生たちや教職員と広くその思いを共有してほしいと思っています。みなさんの声を聞かせてください。

1. テーマ

「私を成長させてくれた授業」

青学生のみなさんが、自分の成長を感じた授業の思い出を聞かせてください。講義を通して得た発見や感動、体験、成長などを作品にして応募してください。

2. 応募資格

青山学院大学の学部生・大学院生、校友（複数名での応募可）

3. 応募ジャンル

次の３つのいずれかから選んでください。

① 散文部門：　エッセーなど、文章で表現する作品。最大 2000 字。
② 韻文部門：　詩、俳句、短歌、川柳など、短い韻文で表現された作品。
③ 漫画部門：　漫画（四コマ漫画、ストーリー漫画など）（最大 A４サイズ用紙 10 枚相当。ただし、提出原稿の用紙サイズは自由）。

※応募作品は未発表のものに限らせていただきます。また、応募作品は他者の権利（著作権、肖像権等）を侵害しないように十分な配慮をしてください。

4. 応募方法

青山学院大学ホームページ（http://www.aoyama.ac.jp/outline/effort/fd/info/detail_20.html）から応募用紙をダウンロードし、必要事項を記入した応募用紙と作品のファイルを添付のうえ、agufd@aoyamagakuin.jp あてにご提出ください。紙媒体での提出を希望する場合には、以下の問い合わせ先に記載されている各キャンパス担当者に直接提出してくださっても結構です。

※応募作品数に制限はありません。一人で複数の題材による応募も可能です。

5. 公開等

①入選した作品は、青山学院大学ウェブサイト等 FD 関連活動の情報を提供する媒体において活用させていただきます。その点、あらかじめご承知おきください。

②入賞者の方々には、12 月中～下旬に授賞式および座談会を行う予定です。ご出席いただきますよう、お願いします。また、当日撮影した写真及び映像は、Happy くらす作品コンクールの広報活動および青山学院大学の FD 推進活動に使用いたしますので、あらかじめご了承ください。

6. 提出期限

2015 年 10 月 30 日（金）　必着

7. 選考

選考は大学 FD 推進委員会において厳格に行われます。「大学での講義のよい思い出を伝える、優れた作品になっているか」を主な選考基準とします。

応募作品の中から、ジャンルの区別なく優れたものを選考し、入選作品として下記の賞を授与します。

最優秀賞	副賞１万円分の図書カード
優秀賞	副賞５千円分の図書カード
佳　作	副賞３千円分の図書カード
学生 FD スタッフ特別賞	副賞３千円分の図書カード

選考結果は 2015 年 11 月末に大学のウェブサイトで発表するとともに、入選者個人に通知いたします。また、表彰式等の写真につきましては、各種広報媒体に掲載させていただく場合がありますので、予めご了承いただくとともに、ご協力をお願いいたします。

8. お問い合わせ

- 青山キャンパス　学務部教育支援課
  電話　03 - 3409 - 4165
- 相模原キャンパス　事務部学務課　教育支援担当
  電話　042 - 759 - 6003
- メール　agufd@aoyamagakuin.jp

以上

2015年度

Happyくらす作品コンクール入賞作品集

いずれも力作揃いで審査に苦慮しましたが、最優秀賞１作品、優秀賞１作品、佳作１作品、学生FDスタッフ特別賞が１作品が選ばれました。

今年度テーマ：「私を成長させてくれた授業」

講義の思い出、心に響いたクラス、自分を変えた授業、目の覚めた講義、元気の出た授業など、講義を通して得た発見や感動、体験、成長などを作品にして応募してもらいました！

授賞式次第

司会進行　　全学FD委員会　副委員長　杉谷　祐美子

１．開会挨拶　　学務及び学生担当副学長
全学FD委員会委員長　篠原　進

２．各賞授与

最優秀賞　　文学部日本文学科４年　黄　郁婷さん
優秀賞　　地球社会共生学部地球社会共生学科１年
ローチャナーシーラット・パンネートさん
佳作　　国際政治経済学部国際経済学科３年　木村　匠さん
学生FDスタッフ特別賞　　地球社会共生学部地球社会共生学科１年
ローチャナーシーラット・パンネートさん

３．座談会

Happyくらすコンクールとは

学生のみなさんが青山学院大学でたくさんのことを学び、学生たちの成長を見て教職員も喜びを感じられるような、みんながハッピーになれる学びの場を作っていきたいという思い。それは青山学院大学に集う全ての人の願いだと思います。
そこで、青山学院大学での授業の思い出について学生のみなさんに作品の形で表現してもらい、他の学生たちや教職員と広くその思い出を共有できる場として、昨年度より実施しているのがこのHappyくらすコンクールです。

コンクール実施概要

応募テーマは次の３つのジャンルのいずれかから選択。
第1ジャンル：　エッセーなど、文章で表現する作品。最大2000字。
第2ジャンル：　詩、俳句、短歌、川柳など、短い韻文で表現された作品。
第3ジャンル：　漫画（四コマ漫画、ストーリー漫画など）

応募作品の中から、ジャンルの区別なく優れたものを選考し、入選作品として下記の賞を授与します。
副賞として最優秀賞には副賞１万円分、優秀賞には副賞5千円分、佳作には副賞３千円分、学生FDスタッフ特別賞には副賞３千円の図書カードを進呈します。

2015.12.10　青山学院大学　FD推進委員会　無断転載を禁じます

能楽入門講座の喜び

黄 郁婷（ファンユティン）
（文学部日本文学科四年生）

夏休みに日本文学科の能楽入門集中講座がありました。私は台湾からの留学生で、お能のことは何も知らないのです。しかし、指導教員である日置俊次教授が能楽師の方々と二年間にわたる入念な準備をしてくださり、講座の企画をしてくださいました。それで思い切って参加してみたのです。何日間も続けて、能楽堂でお謡いを習ったり、お仕舞いを習ったり、おもて（能面）をかけてみたり、重い絹の装束を着てみたり、そして能「黒塚」の舞台公演を鑑賞したり、本当に濃密な時間を過ごすことができました。台風で電車が止まった日も、みんなずぶぬれになりながら参加していました。一瞬一瞬が発見の連続でした。心が震えました。その喜びを、二十首の短歌の連作にまとめてみました。

能楽入門講座

待ちに待った日置先生の能講座学生たちの顔が輝く
知らなかった文化の滔々たる流れおもての翳りにすこし怖くなる
「妖怪ウオッチ」は能の世界という先生　地縛霊といふ伝統を知る
台風の大雨の中濡れそぼち学生はだれも文句を言わず
しんとして学生たちが耳澄ます装束の金と赤の輝き
扇とは神を「をぐ」もの儀礼にも武器にもなると知る驚きは
「黒塚」の糸巻きまわる運命の糸にわたしもしばられている
角とがる般若の面に秘められた悲しみに気づく鬼とはわたしだ
にっぽんの文学と舞と音楽がひとつになって私を誘う
これからもきっとわたしはついていく能の世界の深い流れに
能楽堂の光る床板さまざまな面がならび叫んで笑う
ここはどこいまはいつだかわからない能面はただ暗くほほえむ
女子学生たちが面をかける一瞬に誰だかまるでわからなくなる
同じ服を着たままなのにその影はこの世のものとはもう思えない
異次元の世界が召喚されたのかぼうっと面が舞台に浮かぶ
能面は裏から見れば穴のあるただの木切れに過ぎないと知る
かけてみて見えないままに立ち上がる苦しい自分の息が聞こえる
きらきらと光る装束を羽織る肩あまりに重くてよろけてしまう
日置先生が猩々の面をかけている赤ら顔が妙に似合って見える
先生は面をかけても先生のままけれども秘密をのぞいた気がする

講評

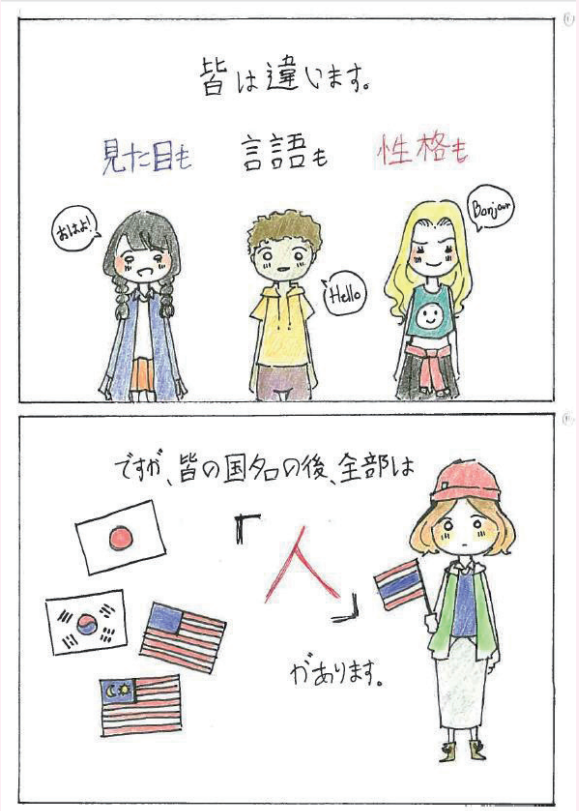
日本文化の奥深いところについて学べた喜びや感動が、ひしひしと伝わってくる作品である。表現する手段として短歌を連作している点も、大変すばらしい。日本語も大変流暢であり、留学生の作品とは思えない。

こんにちは。
私は「ミント」
と申します。
タイから来た留学生です。
青山学院大学で
勉強していることは
1ヶ月になりました。

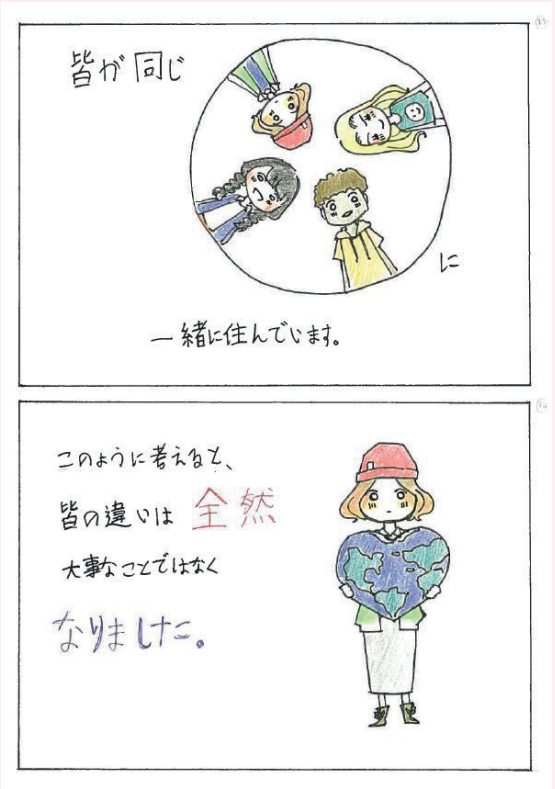
優秀賞＆
学生FDス
タッフ特別賞
ローチャナーシー
ラット・パンネート
さん

「地球市民」は何ですか。
私もまだ分かりません。
勉強し始めたばかりだから。
（笑）
しかし、この授業をとったので
気づいていないことを
気づかれた。

ここには授業がたくさんあります。
新たなことを色々勉強して、
楽しかった。
特に
「地球市民論入門」
という講義です。


皆は違います。
見た目も　言語も　性格も
おはよ!
Hello
Bonjour
ですが、皆の国名の後、全部は
「人」
があります。

私
「タイ人」
です。
日本に来てから、
「日本人」や「マレーシア人」や
「アメリカ人」や「韓国人」など
友達になりました。


皆が同じ
に
一緒に住んでいます。
このように考えると、
皆の違いは全然
大事なことではなく
なりました。

私達は全員
「人間」
なのだからですね。
この授業の中に、私は
「国の人」だけではなく、
「世界の人」だ
ということを勉強しました。

講評（優秀賞）

授業を通じて、さまざまな国の人たちがみな同じ地球に住む人間であり 、共通点のあることに気づき、思いやりの心がはぐくまれたことが伝わってきて、読者である私も心温まる思いがした。この様な内容を伝えるのに漫画という手段が適していているだけでなく、内容と可愛らしい絵とが調和しており、良い作品になっている。

講評（学生FDスタッフ特別賞）

自分が何に気付いて、どう成長したかテーマに沿っており、かつイラストを通して示している点が魅力的でした。

思えば人生最初の企業向けプレゼンテーションであった。高校までは勿論のこと、大学に入ってからリラックスした雰囲気でクラス内プレゼンテーションをやり過ごしてきた私には「責任」という2文字があまりにも大きいように思えた。約1か月で実社会レベルの課題解決・完全成果型のアウトプットを求められるその授業の名前は「キャリアデザイン基礎」。わずか半期という短期間で2社からビジネスのイロハを学び、学生生活の中で体現した非常に濃い授業であった。

まず初めに某介護施設を展開する企業からの課題解決に取り組んだ。介護業界を活性化させるための施策を検討し、若年層が積極的に高齢社会を支える仕組みづくりを提案せよというミッションを乗り越えるべくして動き出した。まずは予備知識がほとんどない状態において、私たちは介護施設の実地見学を行い現場の声に一つ一つ耳を傾けるところから始めた。どの課題を最優先に解決すべきか、若者にとって魅力的な施策は何かに焦点をあてて週3回、計25時間もの時間をミーティングに費やしたが、現実に発生している課題、とりわけ社会人が日々考え抜いても答えが見つからないような課題に答えを出すことはやはり難しかった。最終的にチームとしての最適解を導き出すことができ、学生からの高い評価をもらうことができたが、企業の方々からベストの評価を頂くことはできなかった。私たちの答えが中間発表時に高まった期待値を上回ることができなかったというコメントを企業の方からいただき、常にブラッシュアップした提案をすることの必要性を痛感した。

後半では某生命保険会社より課題をいただき、青山学院大学を仮想クライアントに見立てた新規保険商品の企画提案を行うことになったが、正直言うと非常に辛い日々が続いた。1社目ではアイデアベースでの議論を中心に行っていたのに対して、今回は保険という商品の特性上、収益性や事業の持続可能性などを考慮して数字の根拠に基づいたアウトプットを求められていた。中間発表においては「数字(収益)はとれるのか」「顧客が継続してその保険加入に至る根拠は何か」など厳しい質問を数多く頂き、最終発表に向けて議論が振り出しに戻ることとなった。それらを踏まえて過去数年分の財務諸表を集めて分析したり、300人の学生にアンケートを取ったり、また、何度も学務に足を運んで大学運営の現状把握

に努めたりと可能なことには何でも取り組んできた。この時、大学1，2年次に勉強した統計学や社会調査関係の知識、簿記、財務諸表の読み方など非常に多くの学びが生かされたこととなり、大学での勉強がビジネスにおいても通用することを実感した。同時に保険関係の書類や雑誌の特集記事など、ひたすら保険について勉強するきっかけが生まれ、非常に詳しくなったと思っている。一方のチームとしての活動は冬休みを挟むことにより集まって活動することが困難な状況となりSNSやドライブを用いた情報共有に切り替えたが、正しく意図が伝わらなかったりレスポンスがなかなか返らずに意志の統合に時間がかかったりするなど、ネットを介した情報共有の難しさを学んだ。結果的にビジネスレベルで提案できるだけの質に仕上げたつもりで最終プレゼンに臨んだものの、企業の方にとって求められているニーズを満たすことができなかった。プロセスではなく結果一つで評価されることの厳しさを直に体験するきっかけとなり、大変悔しい思いをすることとになった。

振り返ると半期は長いようで早く過ぎ去った。今回、比較的プロセスを重要視される大学の講義(きちんと出席したか、毎回課題は提出したか)と異なり、主に最終成果物のみで評価されることへのプレッシャーが逆説的にプロセスの改善に繋がった。もし私がこの授業を受けることがなければ社会人の仕事に対する熱意や厳しさ、ビジネスが社会にもたらす意義など大切なことを学ばないまま大学を卒業することになっていただろう。スケジューリング、課題・目的の認識共有、リサーチ、論理的思考、プレゼンテーションなどどれも社会では当たり前とされているスキルだが受動的な大学の講義ではなかなか身につける機会は訪れないので良い経験になった。昔の自分は自分自身が満足するような形でしかアウトプットの価値を高めてこなかった。しかし、この授業ほどチーム活動が生みだすアウトプットレベルの高さを痛感したことはなかった。チームで濃密な時間を過ごし、限られた時間で個々人が能力を最大限発揮できるタスクをこなすことにより、想像もしていなかった質の高い成果物ができることを過去の私に伝えてあげたい。そのようにたった半期の経験といえども過去の未熟な自分を明確に意識することができるのもこの授業の魅力であろう。最後に本授業を提供してくださった企業の方々、授業プランニングに携わった大学関係者の皆様には厚くお礼申し上げたい。自分のキャリア形成にこの学びが生かされるよう、今後も一層の努力をして残りの学生生活を過ごしたいと思う。

講評

企業から提示された課題を解決しようと能動的に取り組む過程で、社会人として働く際に必要とされる能力が育成されていった経験が、読者の興味をそそる文章で述べられている。企業からの課題を解決するためには、他の授業でこれまでに学んだことを活用する必要があった。このことから、社会人として働くために大学での学びが活きることに筆者が気付いた点が大変印象的である。

このコンクールを主催している“全学FD委員会”の“FD”って何？
“FD活動”って、学生も参加できるの？

FDとはFaculty Developmentの略で、授業改善のための組織的な取り組みをいいます。
青山学院本学では、 FD推進委員会直下の組織として学生FDスタッフが活動しています。
大学の授業を「学生が本当に求める授業」にするため、さまざまな活動・企画を通して学生視点で授業や教育のあり方を考えています。
学生FDスタッフは随時募集中ですので、ご興味のある方はぜひ教育支援課(agufd@aoyamagakuin.jp)まで、お気軽にお問い合わせください！

2015年度Happyくらすコンクールにたくさんのご応募をいただき、皆さんありがとうございました。
良い授業は教職員だけでは作れません。学生の声を反映させることで、大学の授業を「学生が本当に求める授業」にしてみませんか？
学生FDスタッフも随時募集中です！

10.　その他のFD活動

2014年度より、本学教員を対象とした「教員のための英語研修プログラム」を開催している。2015年度も7月1日（水）、12月2日（水）の計2回実施した。

また、全学部にて科目ナンバリングを実施し、2016年度入学生に開示した。

○　2015 年度　教員のための英語研修プログラム

2015年度も昨年に引き続き、教員のための英語研修プログラムを年間2回実施。講師は、英国の公的国際文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシルから招き、研修はすべて英語で実施した。昨年からすべて参加している教員もおり、ＦＤにおいて人気の高いプログラムとなっている。アンケートでも非常に質の高いトレーニングをすることができた、他学部の先生との交流が楽しい、などの意見も寄せられた。詳細は下記のとおりである。

（第１回目）
日　時：2015年7月1日（水）10：00 ～ 17：10
参加者：8名
内　容：「ゼミとディスカッショングループ」英語でゼミやグループでの討論で進行をコントロールし、
参加するすべての学生の意見をきちんとくみ取れるようにする。

（第２回目）
日　時：2015年12月2日（水）10：00 ～ 17：10
参加者：8名
内　容：「少人数クラスのプランニングとマネジメント」少人数のクラスをどのようにプランニングし、
効果的に行うかを学ぶ。

（アンケート）
● コースについて
Ｑ１．コースのレベルは適切でしたか。

回答		合計	
		7月1日	12月2日
難しい	難しすぎた	0	0
	やや難しかった	0	2
適切		7	3
簡単	やや易しかった	0	1
	易しすぎた	0	1
無回答		0	0
合計		7	7

コメント：ヒアリング力が未熟なので、たまに講師の指示内容がうまく理解できない
ことがありました（12/2）
：Small Class Managementの基本を知らなかったので、私にとっては今回の
研修レベルは適切だった（12/2）

Ｑ２．研修の長さはいかがでしたか。

回答		合計	
		7月1日	12月2日
長い	長すぎた	0	0
	長かった	1	2
適切		6	5
短い	短かった	0	0
	短すぎた	0	0
無回答		0	0
合計		7	7

Q３．研修の内容はご自身のニーズに合っていましたか。

回答		合計	
		7月1日	12月2日
肯定	常にあっていた	3	2
	大体あっていた	4	1
中間	時々あっていた	0	2
否定	あまり合っていない	0	2
	全く合っていない	0	0
無回答		0	0
合計		7	7

コメント：実際に使えそうな表現をいくつか学ぶことができた（7/1）
：輪講形式での研究指導が多いので、今回の研修内容は有意義だった（12/2）
：知らないことばかりだったので勉強になった（12/2）
：本研修は、語学科目の教員を対象としている印象をもった（12/2）

Q4．研修を受講して英語力/英語スキルが上がったと思いますか。

回答	合計	
	7月1日	12月3日
はい	7	4
いいえ	0	3
無回答	0	0
合計	7	7

コメント：表現の幅が広がった（7/1）
：知らなかったフレーズをたくさん学べた（7/1）
：間違った言いまわしなど指摘してもらえた（7/1）
：ディスカッションで使える表現を学べた（7/1）
：1人1人話す機会がきちんと設けられていた（7/1）
：フレーズだけではなくジェスチャーも非常に参考になった（12/2）

○　科目ナンバリング

本学の学士課程における全ての科目に、教育課程上の学修段階、学修順序、学修内容等を示すコード番号を付す「科目ナンバリング」を2016年度より実施するため、全学FD委員会にて作成した全学的なコード体系に基づき、青山スタンダード及び各学部において科目ナンバリングの作成が行われた。

科目ナンバリングによって、青山スタンダード及び各学部の教育課程における科目一つ一つの位置づけが示されることにより、各年度、さらには大学生活全体における修学計画を学生が検討する際等に、その参考となることが期待される。

2015年度末までに青山スタンダード及び各学部の全ての科目について科目ナンバリングが行われ、その結果を2016年度入学生に開示している。

・コード体系

全ての科目に7桁の英数字から構成されるコードを付し、教育課程体系上の位置付けを示している。各桁の意味は次のとおり。

桁数	1	2		3	4	5	6	7
コード例	A	A	-	A	A	1	0	1
意味	学部等	学科等		教育課程上の区分		配置年次	科目番号	
				（大区分）	（小区分）			
使用文字	英字	英字		英字	英字 一部数字あり	数字	数字	

1・2桁目 ：学部・学科等（どの学部・学科等の教育課程であるかを示す）

3・4桁目 ：教育課程上の区分（当該学部・学科の教育課程上の区分を示す）

（3桁目）大区分・・・カリキュラム（コース、領域、科目区分等）による区分

（4桁目）小区分・・・学修内容による区分

5桁目 ：配置年次（科目の配置年次（最低履修可能年次））

6・7桁目 ：科目番号（科目の位置付けや科目間のつながり等を示すことがある（科目番号の付け方は学部・学科等によって異なる））

2016 年度　青山学院大学　科目ナンバリング コード体系表

2016年4月1日
青山学院大学

桁数	1		2		3	4	5		6	7
内容	学部等		学科等		教育課程上の区分		配置年次		科目番号	
					大区分	小区分				
文字	英字		英字		英字	英字 一部数字あり	数字		数字	
コード・意味	G	青山スタンダード	G	青山スタンダード	A	A	1	1年次	01	
			L	青山スタンダード科目（第二外国語）						
	L	文学部	L	英米文学科						
			F	フランス文学科						
			N	日本文学科						
			H	史学科						
			A	比較芸術学科						
			C	文学部共通						
	P	教育人間科学部	P	教育学科						
			Y	心理学科						
			L	外国語						
	E	経済学部	E	経済学科			2	2年次		
			D	現代経済デザイン学科						
			L	外国語						
	J	法学部	J	法学科						
			L	外国語						
	B	経営学部	B	経営学科						
			M	マーケティング学科						
			L	外国語						
	S	理工学部	P	物理・数理学科						
			C	化学・生命科学科						
			E	電気電子工学科						
			M	機械創造工学科						
			S	経営システム工学科						
			I	情報テクノロジー学科						
			B	Basic Experiment						
			L	外国語			3	3年次		
	I	国際政治経済学部	P	国際政治学科 政治外交・安全保障コース						
			G	国際政治学科 グローバル・ガバナンスコース						
			E	国際経済学科 国際経済政策コース						
			B	国際経済学科 国際ビジネスコース						
			C	国際コミュニケーション学科 国際コミュニケーションコース						
			L	外国語						
	C	総合文化政策学部	C	総合文化政策学科			4	4年次		
			L	外国語						
	R	社会情報学部	R	社会情報学科						
			L	外国語						
	W	地球社会共生学部	W	地球社会共生学科						
			L	外国語						
区分方法	学部等による区分		学科等による区分		卒業要件（科目領域・科目区分等）による区分	学修内容（学問分野等）による区分	配置年次（最低履修年次）		科目識別	

11. 諸規則

○青山学院大学 FD 規則

（2009年3月26日理事会承認）

（趣旨）

第１条　この規則は、大学設置基準（昭和31年文部省令第28号）第25条の3に基づき、青山学院大学（以下「本学」という。）全体の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な取り組みであるファカルティ・ディベロップメント活動（以下「FD活動」という。）について必要な事項を定めるものとする。

（組織）

第２条　本学のFD活動を適切に実施するため、次の委員会を置く。

(1)　全学FD委員会

(2)　FD推進委員会

2　全学FD委員会は、FD活動を円滑に運営するために必要な事項等を審議する。

3　FD推進委員会は、FD活動の企画、立案及び実施に必要な事項等を審議する。

4　全学FD委員会及びFD推進委員会について、構成、審議事項等、その運営に必要な事項は、別に定める細則による。

（所管）

第３条　この規則は、学務部教務課が所管する。

（改廃手続）

第４条　この規則の改廃は、全学FD委員会、学部長会及び教授会の議を経たのち、常務委員会及び理事会の承認を得て、学長がこれを行う。

附　則

この規則は、2009年3月27日から施行する。

○青山学院大学全学 FD 委員会運営細則

（2009年3月16日学部長会承認）

（趣旨）

第１条　この細則は、青山学院大学FD規則第2条第4項の規定に基づき、全学FD委員会（以下「FD委員会」という。）について、構成、審議事項等、その運営に必要な事項を定めるものとする。

（構成）

第２条　FD委員会は、次の委員をもって構成する。

(1)　青山学院大学FD推進委員会運営細則第2条第1項に規定するFD推進委員会委員

(2)　青山学院大学全学教務委員会規則（以下「全学教務委員会規則」という。）第2条第1項に規定する全学教務委員会委員

(3)　全学教務委員会規則第9条に規定する全学教務委員会出席者

2　FD委員会が特に必要と認めるときは、委員以外の者に列席を求め、その意見を聴くことができる。

（委員長）

第３条　FD委員会に、委員長を置き、学務及び学生担当の副学長をこれに充てる。

2　委員長は、委員会を代表し、委員会の業務を統括する。

（副委員長）

第４条　FD委員会に、副委員長1名を置く。

2　副委員長は、委員長が委員の中から指名する。

3　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときには、委員長の職務を代行する。

4　副委員長の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

（招集、開催及び定足数）
第５条　FD委員会は、必要に応じて委員長が招集し、その議長となる。
2　FD委員会の定足数は、構成員の過半数とする。
（審議事項）
第６条　FD委員会は、次の事項を審議する。
(1)　FD活動全般に関する事項
(2)　FD推進委員会の審議結果に関する事項
(3)　その他FD活動を円滑に運営するために必要な事項
（審議結果）
第７条　委員長は、前条の審議結果を学長に報告するものとする。
（事務の所管）
第８条　FD委員会に関する事務は、学務部教務課が行う。
（改廃手続）
第９条　この細則の改廃は、FD委員会、学部長会及び教授会の議を経て、学長がこれを行う。

附　則
この細則は、2009年3月27日から施行する。

○青山学院大学 FD 推進委員会運営細則

（2008年10月6日学部長会承認）
改正 2009年3月2日 2012年2月27日

（趣旨）
第１条　この細則は、青山学院大学FD規則第2条第4項の規定に基づき、FD推進委員会（以下「委員会」という。）について、構成、審議事項等、その運営に必要な事項を定めるものとする。
（構成）
第２条　委員会は、次の委員をもって構成する。
(1)　副学長（学務及び学生担当）
(2)　専任教員の中から学長が指名する者　若干名
(3)　事務職員の中から学長が指名する者　若干名
2　前項第2号及び第3号に規定する委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。
3　委員会が特に必要と認めるときは、委員以外の者に列席を求め、その意見を聴くことができる。
（委員長）
第３条　委員会に、委員長を置き、前条第1項第1号に規定する副学長をこれに充てる。
2　委員長は、委員会を代表し、委員会の業務を統括する。
（副委員長）
第４条　委員会に、副委員長1名を置く。
2　副委員長は、委員長が委員の中から指名する。
3　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときには、委員長の職務を代行する。
4　副委員長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。
（招集、開催及び定足数）
第５条　委員会は、必要に応じて委員長が招集し、その議長となる。
2　委員会の定足数は、構成員の過半数とする。
（審議事項）
第６条　委員会は、次の事項を審議する。

(1)　FD活動の啓発に関する事項
(2)　FD活動の企画、立案及び実施に関する事項
(3)　学長の諮問する事項
(4)　その他FD活動全般に関する事項
（審議結果）
第７条　委員長は、前条の審議結果を学長に報告するものとする。
（学生FDスタッフ）
第８条　必要な場合には、委員会の下に学生FDスタッフ（以下「スタッフ」という。）を置くことができる。
2　スタッフは、委員会の委員の指示により、FD活動に係る業務に当たる。
3　スタッフは、学部又は大学院研究科に在籍する学生で、FD活動への参加を希望する者の中から、委員会が任命する。
（事務の所管）
第９条　委員会に関する事務は、学務部教務課が行う。
（改廃手続）
第10条　この細則の改廃は、委員会及び学部長会の議を経て、学長がこれを行う。

附　則
この細則は、2008年10月7日から施行する。

附　則（2009年3月2日）
この細則は、2009年3月27日から施行する。

附　則（2012年2月27日）
この細則は、2012年4月1日から施行する。

○青山学院大学 FD に係るデータ取扱に関する要領

（2009年2月4日制定）

（趣旨）
第１条　この要領は、学校法人青山学院個人情報保護に関する規則に基づき、青山学院大学のファカルティ・ディベロップメント（授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な取り組み。以下「FD」という。）活動において必要なデータの収集、集計と取り扱いについて、必要な事項を定める。
（目的）
第２条　データについては、以下の目的に使用される。
(1)　FD活動における企画・立案に資する
(2)　FD活動の報告に資する
2　前項以外の目的で、FD推進委員会（以下委員会）委員長が必要と認めたもの。
（データの範囲）
第３条　本要領が予定するデータとは、以下に掲げる各別から個人を特定できる情報を除いた匿名化データをいう。
(1)　広報入試センターが業務上収集する入試及び広報関連データ
(2)　学生部が管理するデータ
(3)　教務課が管理するデータ
(4)　進路・就職センターが業務上収集する就職関連データ
(5)　委員会が実施する調査データ・アンケートデータ
(6)　その他委員会が必要とするデータ

（データの収集）

第４条　FD活動に関わる必要なデータは、委員長が各部署と協議の上、学長名に基づき収集を行う。

（データ管理責任者）

第５条　データ管理責任者は委員会委員長とし、データは、各部署より委員長宛に提出する。

（データ利用者と利用時の注意義務、集計場所及び目的外利用の禁止）

第６条　データは委員会で認められた集計目的にのみ用いられ、その集計は同委員会から委嘱された専任教員（以下データ利用者）が、委員長の任命を受けてこれを行う。

2　データ利用者は集計期間中、原データや中間生成ファイルの保管に遺漏なく努めなければならない。ネットワークを介した当該情報の漏洩や集計場所への第三者の立ち入り、保存メディアの管理に対し、データ利用者は細心の注意を払う義務を負う。

3　データの使用場所は、原則として本学内とするが、データに十分な匿名化処理が施されていて、かつ委員長が特に必要と認めた場合についてはこの限りでない。

（結果の公表と守秘義務）

第７条　データ利用者は、係る集計が終了した後、速やかに委員長に報告する。委員長は集計結果について、委員会の議を経たのち、必要に応じて公表することができる。結果の正規公表がなされない限り、データ利用者と及び委員会委員は、集計過程で知りえた情報を一切口外してはならない。

（データの利用期間と破棄）

第８条　委員会で認められた目的に係る集計が終了した後、データ利用者は、速やかに中間生成ファイルを含む全ての利用データを削除し、データ管理責任者は、データの破棄を確認するとともに、これを学長に報告しなければならない。

（事故等への対応）

第９条　前条及び前条以外の項目について、事故等が発生した場合は、「学校法人青山学院個人情報保護に関する規則」を準用するものとする。

（改廃手続）

第10条　この要領の改廃は、委員会が行う。

附　則

この要領は、2009年2月4日から施行する。

12. FD 推進委員会及び全学 FD 委員会　委員一覧

1. FD推進委員会委員

氏名		所属等	備考
委員長	長谷川　信	副学長、経営学部経営学科	～2015年12月
委員長	篠原　進	副学長、文学部日本文学科	2015年12月～
副委員長	杉谷　祐美子	教育人間科学部教育学科	
委員	大山　和寿	法学部法学科	
委員	加藤　篤史	経営学部マーケティング学科	
委員	中野　昌宏	総合文化政策学部総合文化政策学科	
委員	米山　淳	理工学部電気電子工学科	
委員	宮川　裕之	社会情報学部社会情報学科	
委員	山口　直也	会計専門職大学院 会計プロフェッション研究科	2015年4月～
委員	鈴木　寛也	事務局長	
委員	髙野　悦子	学務部　部長	
委員	戸田　隆也	学務部　教育支援課　課長	～2015年5月
委員	竹田　治世	学務部　教育支援課　課長	2015年6月～
委員	鳥海　貴裕	学務部　教育支援課	
委員	土居　美菜子	学務部　教育支援課	
委員	萩原　とよ子	相模原事務部　学務課　主任	

2. 全学教務委員会委員

所属等	氏名	備考
委員長、副学長（学務及び学生担当）	長谷川　信	～2015年12月
委員長、副学長（学務及び学生担当）	篠原　進	2015年12月～
副委員長、副学長（将来構想及び第二部担当）	―	
大学宗教部長	伊藤　悟	
青山スタンダード教育機構副機構長	篠原　進	～2015年12月
青山スタンダード教育機構副機構長	竹内　康博	2015年12月～
文学部	麻生　えりか	
教育人間科学部	早坂　方志	
経済学部	矢吹　初	
法学部	大石　泰彦	～2015年12月
法学部	松田　憲忠	2015年12月～
経営学部	島田　淳二	
国際政治経済学部	渡邊　千秋	
総合文化政策学部	竹内　孝宏	
理工学部	谷口　健二	
社会情報学部	長橋　透	
地球社会共生学部	岡本　真佐子	
学務部　部長	髙野　悦子	
相模原事務部　学務課　課長	鈴木　あつ子	
政策・企画部　部長	白濱　哲郎	
学務部　教務課　課長	中津　昌義	～2015年5月
学務部　教務課　課長	馬場　俊和	2015年6月～

2015年度
青山学院大学 FD 活動報告書

発　行　日　2016 年 12 月22日
発　　行　青山学院大学全学 FD 委員会
　　学務部教育支援課
　　〒150-8366　渋谷区渋谷 4-4-25　17号館2階 スチューデントセンター
　　TEL 03-3409-4165　　FAX 03-3409-9423
発行責任者　田中　正郎

150th
140th